

註

- 1) 上野国府の研究についてはここでは詳細には触れないが、国府の所在地や規模について、これまで多くの研究が進められてきた。上野国府の研究論文については、前橋市教育委員会 1985「文化財調査報告書」などに一覧表が掲載され、その内容について説明がなされている。また、元総社明神道跡、寺田道跡、元総社寺田道跡などで国府に関連する可能性のある遺構が確認されている。
- 2) A・B下水田の総数については、相建史氏、香山秀幸氏、新井仁氏、寶藤英祐氏作成の資料より抜粋して記述させていただいた。
- 3) 前橋市の中原道跡群では、弘仁9(818)年の地置により発生した洪水により埋没した水田が検出されている。この水田は条里地割が確認できるものであり、坪を区画する東西の大畹跡5本、南北の大畹跡5本が確認されている。詳細は下記の各発掘調査報告書を参考されたい。都所敬尚他 1993「中原道跡群Ⅰ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団。荻野博巳 1994「中原道跡群Ⅱ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団。関口承他 1995「中原道跡群Ⅳ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団。荻野博巳 1996「中原道跡群Ⅴ・Ⅵ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団。

引用参考文献

- 新井 仁 2001「群馬県における平安時代の水田開発について ―前橋台地南部を中心とした試論―」研究紀要19 p.21-34 群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 石川正之助 1975「II 22地区 5 まとめ」上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報1 p.14-21 群馬県教育委員会文化財保護課。
- 梅澤重昭 1996「第四節二 条里水田の遺構と集落」、『第四節三 市域の条里水田址』『太田市史』通史編 原始古代 p.443-460 太田市史編纂室。
- 大江正行他 1982「日高道跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 大江正行 1988「第三章 考察 第1節 瓦類」『有馬南寺跡』群馬県渋川市教育委員会。
- 大江正行 1990「第7章 考察」『太田市八幡道跡』p.139-146 群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 岡田隆夫 1991「特論 上野国の条里制」『群馬県史』通史編2 原始古代2 p.807-918 群馬県史編さん委員会。
- 関口功一 1986「銅川流域の条里的地割 ―条里的地割の設定と持続に関する事例―」『条里制研究』第2号 p.81-98 条里制研究会。
- 高崎市史編さん委員会 2000「新編 高崎市史」資料編2 原始古代II。
- 田島桂男他 1979「大八木水田道跡」高崎市教育委員会。
- 能登 登・田中 雄 2000「考古学的にみた甘楽条里道跡(大前地区)の耕地変遷」『甘楽条里道跡(大前地区)・福鳥椿森道跡』p.74-102 群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 藤巻幸男 1993「五目牛瀧水田道跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 丸山雅康 1970「講演記録 渋川市有馬の条里制について」『群馬文化』第115号 p.2-13
- 三友園五郎 1969「関東地方の条里」『埼玉大学紀要 社会科学編(歴史学、地理学)』第8巻 p.1-22 埼玉大学。
- 横倉興一・西川正道 1982「考察 I B 軽石下水田址の現状と課題」『日高道跡(IV)』p.93-108 高崎市教育委員会。
- 横倉興一 1986「上野国府周辺における条里遺構の問題点」『条里制研究』第2号 p.61-80 条里制研究会。

№	遺跡名	遺跡所在地 市町村	調査された条里 階層 As・B As・B As・B 下	文献		
				①	②	③
15	八木原沖田遺跡	八木原	○	12	表1	①奥州市 教区調査。条里遺構を検出。②調査区域において検出の河川状の溝は条里遺構に属する可能性がある。幅1.9~2.2m、長さ40~55m。「第5集まとも」において、土地区画整理前の地区に沖田遺跡の範囲を投影、遺跡検出遺構と現在条里地割に見られる溝を照らし合わせる。出土土壌から条里遺行を6世紀後半代と推定する。
16	八木原沖田X遺跡	八木原	△	17	表2	①群馬条里に関する上字状の区域水路を検出。②「第4集まとも」において、当該調査区域で確認された条里に属すると見られる遺構を昭和19年内成の地図に設定した条里区域に投影する。有馬条里遺跡約32分画、八木原沖田遺跡2分画(東西向き)の2町を区画する条里地割による。また、南側一町の位置にある有馬条里遺跡26分画も地割にも見られる。
17	短町1遺跡	高崎市	△ △	高1		①As・B下水田およびき世記頃の向水で埋没した水田を検出。洪水下で条里性のある水田が検出されたことはこのころの条里制の存在を示唆するもので資料の増加がもたらされる。
18	短町II遺跡	高崎市 短町	△	高2		①調査区内の条里制は条里制の水田の名残を窺わせる。
19	東町遺跡	高崎市 東町	△	高3		①As・B下水田は条里地割に属した水田と推定できる。「IVまとも」では地帯地割からの条里地割の規定、条里制地割と条里地割との関連の検討を行う。
20	東町田遺跡	高崎市 東町	○	高4		①区域地割において2本の畦畔に挟まれた溝(南北走向)を検出。畔を区画する大畦畔と見られる。条里制地割を窺わせるもの。
21	東町I遺跡	高崎市 東町	△	高5		①大畦畔、小畦畔、溝を検出。
22	飯玉1・II遺跡	高崎市 飯玉町	△	高6		①飯玉目遺跡において大規模な畦畔4本を検出。条里地割との関連はこれからの検討が必要。
23	飯塚大宮代遺跡	高崎市 飯塚町	△	高7		①断崖と相並、東西を指す小畦畔を検出。長地帯の地形から、大畦畔も検出しているが畔を区画するものかどうかは検討が必要。
24	飯塚大宮道遺跡	高崎市 飯塚町	△	高8		①畔を区画する2断面できる大畦畔は見られない。半折型に近似、または半折型の変形したと見られる区画。
25	飯塚新田西II遺跡	高崎市 飯塚町	○	高9		①SF-1は条里北遺跡西大畦畔の延長線上、SF-2は条里北遺跡南北畦畔から東へ4坪のところを区画する。半折型地帯を挟んだ水田の可能性あり。
26	岩神町I遺跡	高崎市 岩神町	△	高10		①南北・東向き行の小畦畔を検出。
27	岩神町II遺跡	高崎市 岩神町	△	高11		①As・B下水田を検出。
28	江木深助西遺跡	高崎市 江木町	○	高12		①短畦畔 SF-1、SF-2は一町(110m前後)を区画する条里制遺構と見られる。半折型、長地帯の変形が見られる。本文参照。
29	大八木水田遺跡	高崎市 大八木町・下小島町	○	高13		
30	藤久保遺跡	高崎市 高崎町	○	高14		①地帯地割検出「南北大畦畔」より100m西へ9町分行った地点にあたる所で南北畦畔(30・35)を検出。また、条里地帯「東西大畦畔A」の120m北にあたる地点で東西断崖を検出。
31	御風呂遺跡 新井丹川遺跡	高崎市 新井町	△	13 14 22		①As・B下水田は南北方向の畦畔を軸に東西方向に区画して仕切られた大きな区画が検出されており基本的には条里制地帯に属するもの、一部は畦畔の交差がすり抜けたり畦畔を設けずに大きな区画としている場合も見られる。また、畦畔の上になきな畦行を置き石としてお目印にしていたとも考えられる。②As・B下水田は南北方向の畦畔を軸に東西方向の畦畔で仕切られた大きな区画が検出されており基本的には条里制地帯に属していると考えられる。③条里断面を参照。
32	上大磯町X遺跡	高崎市 上大磯町	△	高15		①断崖と南北、東西を指す小畦畔を検出。
33	上佐野郷遺跡	高崎市 上佐野町	△	14		①As・B下で水田検出。水田跡は南北方向の3本の畦畔に仕切られる。区画は大きい。基本的には条里制を踏襲していると考えられる。遺跡北側に位置する東西方向の畦畔は幅約1mの畦である。
34	上磯五反田遺跡	高崎市 上磯町	△ △	16 23		①As・A下後水田跡。区画は長方形で畦の町数はほぼ東西方向に沿っている。As・B下水田が検出される。概ね正方形で畦の方向はほぼ東西・南北に沿っている。②As・B下水田32区を検出。条里地帯の大区画を形成すると見られる東西畦畔、南北畦畔各1本を第38区(p.38)に示す。

No	遺跡名	遺跡所在地	調査された表層		文 献	備 考
			As-B 下層	As-B 上層		
		市町村	大字	① ② ③ ④		
35	上中居発掘1遺跡	高崎市 上中居町	高16	△		①A大塚群の他、坪を区画する可能性のある南北大塚群1を抽出。
36	上中居高塚遺跡	高崎市 上中居町	高17	△		①A大塚群抽出、坪を区画する形跡は確認できない。南北両断はしっかり残っており東割制の半円型の可能性が考えられる。
37	上中居西原敷田遺跡	高崎市 上中居町	高18	△		①南北北向の小塚群を抽出。ほぼ互方位で残行していることから東割プランを認識しているものと考えられる。
38	上層稲科所遺跡	高崎市 上層稲町	高19	○		①2区3水田と4水田の間に同層に群を伴う水溝抽出。南北大塚群(坪塚群)と見られる。東割北遺跡の大塚群からの距離から計算すると1町は16mである。また、3区2水田の南端(東割)も坪塚群と考えられる。
39	上層下松田遺跡	高崎市 上層下松田	高20	○		①IV区北西部で抽出された南北北向の水溝は同層に群をもち東割北遺跡の坪塚群にあたるものと考えられる。
40	上層下松田II遺跡	高崎市 上層下松田	高21 高22	○		①東割下松田IV区北西部で抽出された日本の群の間に水溝が走る東割坪塚群を抽出した。②調査区中央付近で南北水田、北西で東西小塚群を抽出。本跡は同層に群群を伴わせる。
41	菊地遺跡群(1)	高崎市 菊地町	高23	○		①南北北向の1号基壇群、東西北向の2号基壇群は坪塚群に抽出され、水田が東面水田と考えられる。
42	菊地遺跡群(II)	高崎市 菊地町、我 師町	高24	○		①南北水田遺跡の東面遺跡や北東遺跡の水田は抽出。基壇にのる水溝や群群が存在する。
43	菊地遺跡群(III)	高崎市 菊地町	高25	○		①とよめの(4、本田遺跡とも同層)において菊地遺跡におけるAs-B下層水田の調査時期の検討、一町の幅の倍差、上層両側から離れた地域で開発方針などの問題の提示をおこなっている。
44	京目久保・天神前 ・柳ノ内・上小路 遺跡	高崎市 京目町	高26	△		①As-B下層水田抽出。溝や群群が見られるが調査区との関連を把握する必要あり。
45	京目町作道遺跡	高崎市 京目町	高27	○		①As-B下層水田を抽出。群群が水田区画の基壇的群群と考えられ、高島地区で抽出された大塚群の区画寸法上に行われてきた行っている様子が見られる。
46	倉賀野上層宮前・ 三木遺跡	高崎市 倉賀野町	12	△		①筑前市教委調査。未調査に預かると思われる平安時代の水田。
47	倉賀野末層VI遺跡 倉賀野松島遺跡	高崎市 倉賀野町	高28	○		①7之郷村東遺跡(1984年度調査)で抽出された方格地割メッシュを基に西へ延長し本遺跡にのせると抽出された群群はそのメッシュにほぼ一致する。また、倉賀野末層では現在の道路や水路も東割地割に即って造られていることが見とれる。
48	倉賀野1遺跡	高崎市 倉賀野町	高29	△		①As-B下層水田の群群は方格地割を意識しているようだ。
49	栄崎遺跡群 南大塚遺跡群	高崎市 栄町・南 大塚町	高30	○		①24-5区では南北西面端の南東調査で抽出された東西、南北の大塚群(坪塚群)と連関する群群とその交点を抽出した。また、21・1-2区西面端では南北大塚Aの南東部分が抽出された。
50	栄崎遺跡群(1) 村間遺跡 富士塚南A遺跡	高崎市 栄町	高31	○		①As-B下層水田抽出。A・D・F・Hの各区域で東割制の群群を留めながら南北の基壇群群が抽出された。東へ5-10mの距離はあるが大体で中央遺跡群の想定メッシュに適合する可能性あり。
51	栄崎遺跡群(II) 東野・東上塚・高 土塚前B遺跡	高崎市 栄町町下 大塚町	高32	○		①As-B下層水田6,670㎡調査。抽出された大塚群は一面110m前後の方格地割を構成する群群と見られる。
52	栄崎遺跡群(III) 新堀・松岡、吹手 西A・高土塚B遺 跡	高崎市 栄町町	高33	○		①7、3、6、10トレンチにおいて南北大塚群を抽出。基壇群群(坪塚群)と考えられる。また、10トレンチで確認された新堀・松岡は東西の基壇群群と考えられる。さらに、2トレンチ中央部東面西端群も基壇群群と考えられる。これらの群群の延長により一町単位の方格地割の想定が可能となる。
53	栄崎遺跡群(IV) 西沖・柳原、吹手 西B遺跡	高崎市 栄町町	高34	○		①As-B下層水田を抽出。大塚群7水(うち南北4、東西3)、小塚群、南北・東西大塚水田、小塚水田状遺跡確認。これらの遺跡から約200m間があると想定できる。平均的な坪の一边の長さは105m。

No	遺跡名	遺跡所在地	調査された集落 As・B 上下層	文献			
				①	②	③	④
72	西鳥遺跡群(II)	西野村 高崎市	新保町・島 野町	○	高52		①As・B下水田を調査。東西方向の3本の大畹群が検出され、断面は約100mであった。また、南端の大畹群1本を抽出。8つの坪の存在を認め、坪内の区画についてある程度平坦に基づいた口分田である可能性を示している。
73	西鳥遺跡群(III)	高崎市	島野町・西 島町	○	高53		①As・B下水田を抽出。東西方向の大畹群3本、南北方向の大畹群1本を抽出。東西大畹群間の距離は約100m。大畹群の地形によってつむぎの坪が構成される。「南水田区」と「北水田区」という2層の坪の存在が確認された。西鳥遺跡群(II)とは東西区画の連続性を明らかにする。
74	西鳥手遺跡群(IV)	高崎市	森田町・西 橋手町	○	高54 高55		①昭和63年の発掘調査。桑里地帯を抽出。②As・B下水田において一辺110m前後の大畹群に区画された桑里地帯を抽出。南北大畹群は中央に水路を有する。東西大畹群は幅2mを越える。
75	西鳥手遺跡群(V)	高崎市	森田町・西 橋手町	○	高54		①B区で東西にのびる大畹群(坪地帯)を抽出し、それに平行する同型群を伴う水路を検出した。さらに、東へ約110mの位置には東西手遺跡群(Ⅰ)の別型調査で抽出した同型に同型群を伴う水路が検出されている。6トレンチでは坪地の位置に東西水路も検出された。p33で遺跡周辺のAs・B下水田の桑里地帯を想定。
76	萩原上・下五郎田	高崎市	萩原町	△	高56		①南北走向N-6.3°の畹群を抽出。
77	浜川遺跡群(浜川 高田遺跡・浜川長 町遺跡)	高崎市	浜川町	△	26		①刈原の北半から長尾端6区画までの範囲でAs・B下水田を抽出。大畹群はないものの水路を伴う坪が検出された。このうち、南北に走る浜川遺跡2区水跡と長町1区画38区A型付石の溝を伴う畹群の断面は約110m間隔である。
78	浜尻八坂遺跡	高崎市	浜尻町	△	高57		①中央が広く水跡となる南北大畹群とそれに直行する東西水跡を抽出。この南北大畹群は大入木田遺跡の調査区画などから一町方格を仕切る大畹群の性格をもつと考えられる。
79	東金井11遺跡	高崎市	船渡町	△	高58		①大畹群を抽出。一町区画内側の畹群と考えられる。
80	日高遺跡(II)	高崎市	日高町	○	高59		①桑里跡水田に伴うと思われるAs・B下水田の調査。8つの坪を抽出し各坪内の水田区の状態を記す。「(10)まとめ」において藍田の方法や水跡と坪地帯のあり方による。
81	日高遺跡(IV)	高崎市	日高町・新 保田中町	○	高60		①桑里跡水田と見られるAs・B下水田の調査。これまでの日高遺跡の発掘調査のまとめ、考察をおこなう。本文参照。
82	日高中塚遺跡	高崎市	日高町	△	高61		①水跡とこれに平行する畹群を抽出。周辺遺跡から考え、遺跡北側で遺跡北側で抽出された坪地帯が南へのびると考えられる。日高遺跡で見られる桑里跡に基づき畹群についての考えを要する。
83	元島名原跡北遺跡	高崎市	元島名町	△	高62		①水田の畹群は方格地帯水田を想定させるものである。
84	矢中遺跡群(Ⅰ)	高崎市	矢中町	○	高63		①As・B下水田は一辺約10m前後を単位とした方格地帯を形成する桑里跡群。一町方格内を継ぎ足す小畹群。畹状遺跡より分水された小型水跡などからなる。
85	矢中遺跡群(Ⅱ)	高崎市	矢中町	○	高64		①As・B下水田を抽出。一辺110m前後の方格地帯が見られる。地帯は大畹群から成るが、一部大畹水跡から成る場合もある。
86	矢中遺跡群(Ⅲ)	高崎市	矢中町	○	高65		①村北B遺跡においてAs・B下水田を抽出。村北A遺跡より伸びる南北基壇群の予定線となる遺跡。発掘調査の調査ではAs・B下水田について、B・F区では大畹群交点で検出される。この交点は南北基壇群上にあるもの。
87	矢中遺跡群(Ⅳ)	高崎市	矢中町	○	高66		①As・B下水田において水跡を影づける水跡を抽出した。調査「新保弘田」出土。
88	矢中村東遺跡	高崎市	矢中町	○	高67		①想定の一町四方方格地帯メッシュ交点部分の調査対象地に4ヶ所存在したが、調査において2ヶ所を抽出。交点間距離は約110m。
89	矢中遺跡群(Ⅴ)	高崎市	矢中町・東 崎町	○	高68		①2トレンチでは発掘調査下区、B区で検出された基壇群が南に伸びたものと推測される。3トレンチでは遺跡の2トレンチ高方約100mに位置するが遺跡群を抽出した。この位置は昭和57年度調査村北A・天王前遺跡1-2区抽出の基壇群跡18-SF-26を南へ一町と少し延長したものと推測される。

No	遺跡名	遺跡所在地		調査された糸里	文 献				記 述 内 容 ・ 備 考
		市町村	大字		As-B 上下層	①	②	③	
90	矢中遺跡群(X)	矢中町・新 里町	矢中町・新 里町	As-B 上下層	高砂				矢中遺跡群群集群遺跡まとめあり(P4~P6)。大形水跡を抽出。論文「2 物部氏と糸里水田」,「3 物部氏印」群集群古印の出土について」掲載。
91	矢中村西1遺跡	高崎市	矢中町	△	高70				①糸里制跡は平行に北を向き全断性に富んでいる。高砂群遺跡。
92	矢ノ上遺跡	高崎市	井野町	△	高71				①糸里制跡に横う水田があったが明確ではないが、SJ-1は坪原をなす大形組跡である可能性がある。
93	和田多中遺跡	高崎市	和田多中町	△	高72				①As-B下木田において東西群3本を抽出。群馬県委里にしたがっているものと推定できる。
94	尾軒町遺跡	玉村町	上堀島	△	玉1 玉2				①抽出された遺跡、溝の走向は南名の遺跡群にのる。糸里を現している可能性がある。②抽出大群の走向はN-0°3'-W、幅1.2m。
95	金免遺跡	玉村町	上堀島	△	玉3 玉2				①As-B下木田において南北北の小堀群、溝を抽出。②南北方向大群はN-5°W-N-7°E、幅65~90cm。
96	三境遺跡・三境II	玉村町	上茂木	△	玉4				①As-B下木田抽出。群跡、溝など。
97	砂町遺跡	玉村町	玉村町	△	玉2				①8世紀後半~9世紀頃と推定される水田の大群は東西方向にはほぼ一致。
98	湯川南遺跡	玉村町	玉村町	△	玉2				①抽出された南北方向の群は「玉村町の遺跡」の中で復元を試みた糸里地帯の推定線に合致するとと思われる。抽出大群はN-4°-Wを指向。
99	中道西遺跡	玉村町	上新田	△	玉2 玉5				①糸里地帯推定線に合致すると見られる群を抽出。大群はN-3°-Wの走向、幅1.4m。②大群とそれと平行する溝抽出。
100	福島大島遺跡	玉村町	福島	△	16 17				①As-B層下の水田は保存状況は良好ではない。区画は概ね糸里層の水田と推定される一方大群の発見はなかつた。中位の区画が傾斜より糸里層の水田跡が発見された。②As-Bで埋没した糸里層水田が調査区全体で確認された。
101	福島大北均遺跡	玉村町	福島	△	16				①河川川流変動時の洪水層に埋もれた水田跡は糸里制地帯(1町100m四方)と近似する区画であり糸里制地帯の名称と考えられる。
102	湯川前遺跡	玉村町	湯川	△	玉6 玉2				①As-B下木田を抽出。139層。②北東北方向N-4°W-N-4°E、幅15~20cm。
103	小野地区水田遺	玉村町	湯川	△	玉7				①As-B下木田3層が確認され群跡9本を抽出。南北北方向N-1°2'-W、群跡9m前後、長短の傾向が異なる。
104	湯川前遺跡	藤岡市	湯川	△	層1				①糸里に置置すと見られる溝状遺構3条抽出。うち1本は新基、2本は東西走向
105	上栗原寺前遺跡	藤岡市	上栗原	△	層1				①平行する2条の溝3カ所抽出。7世紀後半以降から9世紀前半頃の土器が溝に埋入する。これらの溝は小野地区水田北の糸里地帯に整合する傾向がある。
106	中大塚の糸里区画	藤岡市	中大塚・下 大塚	○	層2				①埋込跡において糸里層の坪坪は70坪を数え、裏にもさらに広がっていた可能性が高く、本地域が古墳、城跡地に囲まれている内で糸里の地帯が確認されていることから台地遺跡から中世にかけて成立していたと思われる。
107	新井大田原遺跡	前橋市	新井町	△	16				①8世紀代に放棄された水田は階層合より階層の台地帯へ向け監視されたものであり拡張した際の段差が確認された。この段差は新井町北方向の歩道であり糸里制の区画である可能性が高い。
108	都保遺跡	前橋市	前橋市	△	層1				①As-B下木田抽出。大形群などは抽出されていないが、西向き遺跡で設定した糸里地帯を延長し遺跡間隔の現地表における糸里地帯の存在の可能性について解れる。
109	家井八日市遺跡	前橋市	瓦井町・小 島田町	△	10				①群跡の走向は南北方向、幅1m以上の大塚も見られる
110	大光宅地跡遺跡	前橋市	大光町	○	層2				①As-B下木田を抽出。群跡は東西、南北を指向。糸里区画の半折返しに類似する計測値が得られる。また、C-18グリッFの部分比的に抽出された区画の幅は糸里層基本線から東に1,205m(位置し約11~1町)の位置にあたる。
111	女溝遺跡	前橋市	文京町	□	層3				①水跡と見られる大溝2条を抽出。溝北には遺構「女溝」と呼ばれる水溝があったとされる。1号水溝は推定上幅10m、深さ3.8m。覆土中にAs-Bが埋蔵することから断面はそれ以前と見られる。

No	遺跡名	遺跡所在 市町村	遺跡所在 大字	調査された 時期	調査された 土層		文献
					As-B 下層	As-B 上層	
112	上川郷大塚遺跡	前橋市	広瀬町	前橋	□	前3	①平野時代の溝1条、井戸2基を抽出。溝は幅2m、深さ1.5m。圃土層から9世紀後半から10世紀代の土層とまともに出土。層間の用水路と見られる。
113	上佐田中宮前遺跡	前橋市	上佐田町	前橋	△	前4	①As-B下層水田跡を抽出。[VI まとめ] において東部的影響を受けた区画であることが示唆される。
114	亀草半塚遺跡	前橋市	亀草町	△	△	27	①第1層(中世以降)の調査において3区から5区にかけて利根川支流高橋まで耕作された水田抽出。堀の方向がほぼ遺跡と同じで古代東北諸部の全土性が顕える。As-B下層水田については1区中央に東西大畦跡、3区3G調査区で水田状の浅い溝みを含んだ大畦跡を抽出した。
115	川島島砂戸前遺跡	前橋市	川島町	△	△	前5 前6	①As-B下層水田を抽出。東西畦跡5本、南北畦跡5本。調査された範囲では一町を区画する遺構は見つからなかった。畦跡のつらねられ、高田の堀跡から各里水田である可能性は高いとしている。②16枚の水田を抽出。柱状に対して0~7~。各里水田である可能性が高いとする。
116	関原塚遺跡	前橋市	元郷社町	前橋	□	前7	①1号溝は南向N-89°W、上層約6mであり、As-B層以下以前の溝。各里地帯に関連する可能性あり。
117	公田池の遺跡	前橋市	公田町	△	△	9 10 14	①抽出1mの穴で区画した水田を幅約30cmの小畦で分割し方角が長方形に区画した水田跡が抽出された。②As-B下層水田について出土遺物による区画の作業時期が推定できるほか、一部の区画にはほぼ遺跡直前の水田や現在の水田のものも出土している。③As-B下層水田抽出。水田区画は若干の距離差があるものの規則的に並び、畦跡も東西方向に作られる。
118	公田東遺跡	前橋市	公田町・上佐田町	△	△	15	①調査土層にはAs-Bが確認される大溝が抽出される。調査面には多くの遺物、東西に直線的にのびている。また、中世の遺跡に伴うと見られる南北方向の大溝も抽出されている。
119	五反田遺跡	前橋市	稲田町	△	○	前8	①As-B下層において水田跡、畦跡2本を抽出。遺跡する南北大畦跡SL 1, 6, 16は日高遺跡出土の条里地帯基準と考えられる推定南北古道から南へ十五町東長した位置とほぼ一致。遺跡周辺の現況調査区画は二町四方の区画が見られ条里地帯とも考えられる。
120	五反田川遺跡	前橋市	稲田町	△	△	前9 前10	①東西畦跡4本、南北畦跡2本抽出。南北畦跡はN-2°W。条里の遺跡の影響が推察される。②遺跡概略図あり。
121	地蔵前遺跡	前橋市	川島町	△	△	前11	①小畦跡38本を抽出。坪を区画すると見られる遺構は確認できなかったが、水田跡状が長方形、畦跡走向がほぼ南北を指すことから、条里跡による可能性が高いと見られる。
122	下内町寺町交差遺跡・下内町新田遺跡	前橋市	下内町	△	○	28	①As-B下層水田において方一町を区画した大畦(内堀跡)5本、方一町を区画する7本の推定ライン上には中世の遺次遺構、式部一世代の溝などが抽出された。抽出された南北大畦の走向はほぼ条里準。
123	下新田中宮遺跡	前橋市	下新田町	△	△	前12 前3	①As-B下層水田跡を抽出。畦跡15号が大畦跡の可能性あり。遺跡跡が条里準の遺行区域であったと想定する。②上層大畦跡、平行畦跡と面の遺跡抽出。
124	下新田中宮川遺跡	前橋市	下新田町	△	△	前1	①As-B下層水田跡、畦跡2本を抽出。南北大畦跡抽出。北に延長すると下新田中宮遺跡で抽出の大畦跡につながる。
125	静呂遺跡	前橋市	江田町	○	○	前13	①条里の坪を形成すると見られる大畦跡6本をはじめとする畦跡16本を抽出。牛馬の足跡、耕作痕も見つかっている。[まとめ] で前橋市内抽出の水田の概略、条里水田の分析を行う。
126	桑野廻り遺跡	前橋市	朝倉町	□	□	前14	①抽出の推定上層4.5mの南北大溝(W-1号溝)は条里準に関連する重要な用水溝と考えられる。次に元平以降の期間と考えられる。
127	鶴小橋原川遺跡	前橋市	鶴小橋町	△	△	前15	①As-B下層水田抽出。坪を区画すると推定される東西向大畦跡1、畦跡12、大畦跡の走向は西から約3°北に傾く。
128	徳丸中田遺跡	前橋市	徳丸町	○	○	18	①As-Bに覆われた水田跡抽出。堀はほぼ東西南北にあり、古代条里型地形に基づいた100m間隔の堀も見られる。②旧教受野原。徳丸中田遺跡C区畦跡(走向N-0°~7°W)は条里水田に近しい畦跡の可能性あり。
129	中内村前遺跡	前橋市	中内町	△	△	17	①As-B下層水田を抽出。4区では20m×30m程度の穴区画であった。5区では条里準で南北方向に母かかって掘れた溝に沿って内堀が大畦跡抽出された。

No	遺跡名	遺跡所在地 市町村	大字	調査された条里 As-B 上下層	文献			
					①	②	③	④
130	中大門遺跡	前橋市	六掛町	△	前16			①As-B下田を抽出。条里制に関連すると見られる箇所とした青北、東西の小畦群を抽出。遺跡1号北の地点に条里関連地名と見られる「市ノ下」がある。
131	中原遺跡群I	前橋市	上堀田町	○	前17			①弘仁9(818)年洪水下田抽出。水田下にも世紀後半から9世紀初期の住居1軒あり。
132	中原遺跡群II	前橋市	上堀田町・ 瓦井町・今井町	○	前18			①弘仁9年洪水下田抽出。条里区画、実測的区画の水田を抽出。水口や配水方法について細かく検証する。坪界となる大畦群を抽出。
133	中原遺跡群III・ V・VII	前橋市	上堀田町・ 瓦井町	○	前19 前20			①弘仁9年洪水下田抽出。条里制水田域。②中原遺跡群V域説明。
134	中原遺跡群IV	前橋市	上堀田町	○	前20			①弘仁9年の大池遺に伴う洪水に埋没した条里水田を抽出。水田は16枚、溝は1条、川は1条、「IV 成果(中間地点)」において条里の箇所を抽出。南北走向の坪界はN・0°・E、東西の坪界はN・88°・W、2枚の坪を抽出できる。②遺跡域説明。
135	西田遺跡	前橋市	鶴小崎町	△	前21			①東西畦群1本も、南北畦群1本を抽出。水田27枚。C、D区で抽出された幅約1mの東西畦群は坪界畦群の可能性あり。
136	西田V遺跡	前橋市	鶴小崎町	△	前22			①As-B下田13箇所抽出。条里の町界を区画する箇所は抽出されていないが、周辺遺跡の様子から条里による水田である可能性を示唆。
137	鶴島川遺跡	前橋市	鶴島町	○	11	12	13	①As-B下田の畦群は東北とそれに直交する方向にあり、条里制に関連する遺構と考えられる。②As-B下田に抽出した水田の畦群はほぼ南北方向、もしくはそれに直交する方向を示し条里制との関連がうかがえる③川西水口や赤水に対する原田作業は条里区画を基本的に踏襲していることが判明した。また、As-B下田以前の段階で切り盛りを行う大規模な耕地管理(条里地帯の状況)が実行された可能性が高い。④中・近世の条里地帯に合った溝が確認された。1区では条里の坪に相当する10m間隔で平行する東西方向の溝が確認された。
138	野中央神遺跡	前橋市	野中町・上長磯町	△	10	11		①ほぼ南北、東西方向の畦群が抽出される。②上層幅3.5m、深さ80cmほどではほぼ東西方向に走向をもつ溝が確認された。
139	箱田遺跡	前橋市	箱田町	△	前23	前24		①小畦群7本を抽出。「まよめ」において、水遺跡の様相は条里制の遺跡を高いつつも再分断が行われているとしている。②水田40枚を抽出。
140	前箱田遺跡	前橋市	前箱田町	△	前25			①小畦群16本抽出。坪を区画すると見られる大畦群は認められなかったが、小畦群走向が東西・南北と整っている点、水田形状が長方形である点などから条里制に基づきつものである可能性が高い。
141	前箱田村西口遺跡	前橋市	前箱田町		前26			①As-B下田9枚を抽出。畦群5本。坪を区画する大畦群は見つつかない。畦群はほぼ東西、南北に直行、互いに直交し、水田形状は概ね長方形。または長方形を示すことから条里区画に起因する可能性をもちているものと考えられている。
142	宮地中田遺跡	前橋市	宮地町	○	前27			①A区、D区、E区で東西方向の坪界群3本、D区からE区にかけて南北走向の坪界群1本を抽出。坪界区画を設定し調査区をあてこみ考察をおこなっている。
143	村前遺跡	前橋市	箱田町	△	前28			①As-B下田の畑を抽出。条里制が実行された地域と見られるが、調査区からは断定できなかった。
144	元郷川中神遺跡 III・IV	前橋市	元郷社町	○	前29			①抽出されたW-2a、2b箇所は北偏北で、元郷社中神遺跡IIで報告した南偏北の南北溝が伸びたものと推定。覆土上面にAs-B層が確認できる。遺跡は10世紀初め以降。日高条里に一致する。付区に周辺遺跡で確認された大溝を示す。
145	柳橋遺跡	前橋市	川島町	△	前30	前10		①As-B下田23枚を抽出。「まよめ」において方格地帯を設定し、前橋市西条遺跡群との関連を確認している。②遺跡群跡説明。
146	横手宮田遺跡	前橋市	横手町	△	16	27		①河川川原遺跡より洪水層に埋もれた水田遺跡は条里制地帯(1町10畝四方)と近接する区画でもより条里制地帯の位置と考えられる。②第2層、As-B覆土上面)の調査ではII区北偏北で東西走向の大畦群を抽出したが坪区画にあたるかは不明。

No	遺跡名	遺跡所在市	調査された条里	文獻			備考
				A ₅ -B _下	A ₅ -B _下	A ₅ -B _下	
		市町村	大字	調査	①	②	③
147	橋手湯田遺跡	前橋市	橋手町・橋 小湯町・龜 里町	△	16	前31	①中世末の利根川遺跡帯に伴う洪水により埋没した畦畔の名残を留めている。A ₅ -B _下 で検出された水田の畦畔の多くがほほ条里制に合わせて埋没されている。②前橋市教委調査。橋手湯田V遺跡。A ₅ -B _下 水田を検出。水田1枚、畦畔16条。畦畔の様子、地名などから条里制の影響を受けている可能性あり。
148	六俣下堂水日遺跡	前橋市	六俣町	○	前32		① A ₅ -B _下 水田を検出。No.130畦畔は上幅32cm、下幅190cmと規模が大きく坪を区画する畦畔の可能性あり。走向はN-85°-E。周辺地名や活断層による原因によると条里地割が存在した可能性もある。
149	六俣下堂水田遺跡	前橋市	六俣町	△	前33	前3	① A ₅ -B _下 水田1枚を検出。東西畦畔4本、南北畦畔10本。調査された範囲では一町を区画する遺構は見つからなかった。畦畔のつくられ方、周辺の様子から条里水田である可能性は高いとしている。②条里水田の可能性を否定。
150	六俣下堂水V遺跡	前橋市	六俣町	○	前34		① A ₅ -B _下 水田を検出。下堂水日遺跡No.130畦畔（東西）、No.2畦畔（南北）、No.20畦畔（南北）で区画を想定するとはほぼ100m間隔となる。No.2を北に延長すると下堂水V遺跡の畦畔にあたる。
151	六俣草草安寺遺跡	前橋市	六俣町	△	前6	前35	① A ₅ -B _下 水田29枚を検出。畦畔の走向は区画間などから条里制水田の可能性が考えられる。②六俣町など条里地割を示すものは検出されなかったが、付近の「田ノ坪」、「公田」などの地名、迅速田における地割の露現、周辺遺跡の様子などから遺跡の水田性が条里に関わる可能性があるとしている。

〔付表 県内条里関連機関調査一覧〕文獻一覧
はじめに市町村名、あるいは編集機関名を五十音順に並べ、その後、各市町村ごとに文獻を一覧表形式に並べた。

邑楽町

邑1. 邑楽町教育委員会 2001「町内道跡群」

邑2. 邑楽町教育委員会 1996「藤川保遺跡」

太田市

太1. 太田市教育委員会 2000「渡良瀬川流域道跡群発掘調査概報
一丸山腰古道跡一」

太2. 太田市 「太田市史」

尾島町

尾1. 群馬県新田郡尾島町教育委員会 1998「世良田諏訪下遺跡」

甘楽町

甘1. 甘楽町教育委員会 1984「甘楽条里遺跡」

甘2. 甘楽町教育委員会 1985「甘楽条里遺跡」

甘3. 甘楽町教育委員会 1986「甘楽条里遺跡」

甘4. 甘楽町道跡調査会 1998「甘楽条里遺跡」

群馬県埋蔵文化財調査事業団

1. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982「年報1」

2. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983「年報2」

3. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984「年報3」

4. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985「年報4」

5. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986「年報5」

6. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987「年報6」

7. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988「年報7」

8. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989「年報8」

9. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990「年報9」

10. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991「年報10」

11. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992「年報11」

12. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993「年報12」

13. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994「年報13」

14. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995「年報14」

15. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996「年報15」

16. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997「年報16」

17. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「年報17」

18. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「年報18」

19. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「年報19」

20. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993「五日午許水田遺跡」

21. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000「甘楽条里遺跡(大山前遺跡)・福島橋遺跡」

22. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「芦田貝戸遺跡・興島遺跡・餅貝戸遺跡・西下井出遺跡」

23. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999「上滝五反堀遺跡」

24. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981「下之城条里遺跡の調査」

25. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001「猪俣手三波川遺跡」

26. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998「高川遺跡群」

27. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001「亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手平塚田遺跡・横手南川遺跡」

28. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001「下河内町町道跡、下河内前田遺跡」

境町

境1. 矢ノ原道跡発掘調査事務所 1987「矢ノ原道跡の発掘調査の概要」

渋川市

渋1. 渋川市教育委員会 1993「八木原沖田田遺跡」

渋2. 渋川市教育委員会 1998「八木原沖田X遺跡」

高崎市

高1. 高崎市教育委員会 1996「高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報」

高2. 高崎市道跡調査会 1999「旭町I遺跡」

高3. 高崎市教育委員会 1989「東町道跡調査報告書」

高4. 高崎市教育委員会 1994「東町II遺跡」

高5. 高崎市道跡調査会 2000「東町VI遺跡」

高6. 高崎市教育委員会 1999「東町I・II遺跡」

高7. 高崎市道跡調査会 1997「飯塚大冨代遺跡」

高8. 高崎市道跡調査会 1996「飯塚大塚遺跡」

高9. 高崎市道跡調査会 1997「飯塚新田西日遺跡」

高10. 高崎市道跡調査会・高崎市教育委員会 1994「岩押町I遺跡」

高11. 高崎市道跡調査会 1996「岩押町II遺跡」

高12. 高崎市道跡調査会 1995「江北諏訪西遺跡」

高13. 高崎市教育委員会 1979「大八木水田遺跡」

高14. 高崎市教育委員会 1988「阿久保遺跡」

高15. 高崎市道跡調査会 1997「上大塚坂中塚遺跡」

高16. 高崎市道跡調査会 1997「上中居荒神I遺跡」

高17. 高崎市道跡調査会 1998「上中居島原遺跡」

高18. 高崎市道跡調査会 1997「上中居西蔵教田遺跡」

高19. 高崎市教育委員会 1990「上並塚御所遺跡」

高20. 高崎市教育委員会 1991「上並塚下松遺跡」

高21. 高崎市教育委員会 1992「高崎市内道跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」

高22. 高崎市教育委員会 1993「井野高塚遺跡、上並塚下松II遺跡、石原鶴田地目遺跡、飯塚東金井遺跡、埋蔵文化財保護事業について発掘調査概要」

高23. 高崎市教育委員会 1981「菊地遺跡群(I)」

高24. 高崎市教育委員会 1982「菊地遺跡群(II)」

高25. 高崎市教育委員会 1986「菊地遺跡群(VI) 石神・五反田遺跡」

高26. 高崎市教育委員会 2000「京日久保・天神前・柳ノ内・上小路遺跡」

高27. 高崎市工業団地造成組合・高崎市教育委員会 1986「京日町作道遺跡」

高28. 高崎市教育委員会 1999「倉賀野統橋遺跡(倉賀野条里VI遺跡)」

高29. 高崎市道跡調査会 1996「栄町I遺跡発掘調査報告書」

高30. 高崎市教育委員会 1993「栄町遺跡群、南大塚遺跡群」

高31. 高崎市教育委員会 1984「栄町遺跡群(I) 村間遺跡、富士塚前A遺跡」

高32. 高崎市教育委員会 1985「栄町遺跡群(II) 東原・富士塚・富士塚前B遺跡」

高33. 高崎市教育委員会 1986「栄町遺跡群(III) 新堀・櫻原・吹手西A・富士塚B遺跡」

高34. 高崎市教育委員会 1987「栄町遺跡群(IV) 西沖、柳原、吹手西B遺跡」

高35. 高崎市教育委員会 1989「栄町遺跡群(V) 殿谷戸、旭・富士塚、準人、吹手、崎岸遺跡」

高36. 高崎市道跡調査会 1994「下天神遺跡」

高37. 高崎市教育委員会 1996「下中居条里遺跡」

高38. 高崎市教育委員会 1987「高崎市内道跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書」

高39. 下之城村東遺跡調査会 1983「下之城村東遺跡」

高40. 高崎市道跡調査会 1996「下之城村前II遺跡」

高41. 高崎市教育委員会 1984「宿大塚遺跡群 天田遺跡(II)」

高42. 高崎市教育委員会 1984「宿大塚遺跡群(3) 山島・天神遺跡」

高43. 高崎市教育委員会 1985「宿大塚遺跡群(IV) 村北・欠島前・村東遺跡」

高44. 高崎市教育委員会 1985「宿大塚遺跡群(5) 天神久保遺跡」

高45. 高崎市教育委員会 1993「高崎市内道跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」

高46. 高崎市道跡調査会・高崎市教育委員会 1992「昭和町I遺跡」

高47. 高崎市教育委員会 1990「高崎市内道跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書」

高48. 高崎市道跡調査会 1988「中尾村前遺跡」

高49. 高崎市教育委員会 1986「長野北部遺跡群 六反田遺跡、中屋敷(II)遺跡」

高50. 高崎市教育委員会 1988「並塚北遺跡」

高51. 高崎市教育委員会 1996「並塚北II・III・IV・V遺跡」

高52. 高崎市教育委員会 1985「西島遺跡群(II)」

高53. 高崎市教育委員会 1986「西島遺跡群(III)」

高54. 高崎市教育委員会 1990「西橋手遺跡群(II)」

高55. 高崎市教育委員会 1989「西橋手遺跡群(1)」

- 高56. 関東旭理区萩原遺跡調査会 1999「萩原上・下五町田遺跡」
- 高57. 高崎市教育委員会 1997「高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財緊急発掘調査報告書1」
- 高58. 高崎市遺跡調査会 1993「東金井II遺跡」
- 高59. 高崎市教育委員会 1980「日高遺跡(II)」
- 高60. 高崎市教育委員会 1982「日高遺跡(IV)」
- 高61. 高崎市教育委員会 1990「高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
- 高62. 高崎市教育委員会 1992「高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
- 高63. 高崎市教育委員会 1982「矢中遺跡群(II) 天王前遺跡」
- 高64. 高崎市教育委員会 1983「矢中遺跡群(III) 村北A遺跡、天王前遺跡」
- 高65. 高崎市教育委員会 1984「矢中遺跡群(V) 村北B遺跡」
- 高66. 高崎市教育委員会 1984「矢中遺跡群(VII) 矢中村東遺跡」
- 高67. 高崎市教育委員会 1985「矢中遺跡群(VIII) 矢中村東B遺跡」
- 高68. 高崎市教育委員会 1986「矢中遺跡群(IX) 下村北・砂内遺跡」
- 高69. 高崎市教育委員会 1988「矢中遺跡群(X) 矢中村東C遺跡」
- 高70. 高崎市遺跡調査会 1996「矢中村西I遺跡」
- 高71. 高崎市遺跡調査会 1994「矢ノ上遺跡」
- 高72. 高崎市教育委員会 1989「高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
- 玉村町**
- 玉1. 玉村町教育委員会・玉村町遺跡調査会 1992「尾崎町遺跡」
- 玉2. 玉村町教育委員会 1999「滝川南遺跡」
- 玉3. 群馬県在政部玉村町教育委員会 1989「金免遺跡」
- 玉4. 玉村町教育委員会・玉村町遺跡調査会 1997「三境・三境II遺跡」
- 玉5. 玉村町教育委員会「中道西遺跡」
- 玉6. 玉村町教育委員会 1993「藤川南遺跡」
- 玉7. 玉村町教育委員会・玉村町遺跡調査会 2000「前通遺跡」
- 藤岡市**
- 藤1. 群馬県藤岡市教育委員会 1995「小野地区水田址遺跡 塚原裏C遺跡・築野裏D遺跡・築野前遺跡・中栗洞川遺跡・谷地B遺跡」
- 藤2. 群馬県藤岡市教育委員会 1983「藤岡市道路詳細分布調査(II) 美土里地区」
- 前橋市**
- 前1. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997「稻荷遺跡」
- 前2. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「大友宅地添遺跡」
- 前3. 前橋市教育委員会 1997「文化財調査報告書第28集」
- 前4. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「上佐島中原前遺跡」
- 前5. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「川曲見沙門目遺跡」
- 前6. 前橋市教育委員会 1998「文化財調査報告書第29集」
- 前7. 前橋市教育委員会 1982「文化財調査報告書第13集」
- 前8. 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987「五反田遺跡」
- 前9. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1995「五反田II遺跡」
- 前10. 前橋市教育委員会 1982「文化財調査報告書第25集」
- 前11. 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988「地蔵前遺跡」
- 前12. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「下新田中沖遺跡」
- 前13. 前橋市教育委員会 1987「藤呂遺跡」
- 前14. 前橋市教育委員会 1986「鏡守廻り遺跡」
- 前15. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997「鶴小路引遺跡」
- 前16. 前橋市教育委員会・明和工業株式会社 1983「中大門遺跡」
- 前17. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1993「中原遺跡群I」
- 前18. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994「中原遺跡群II」
- 前19. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996「中原遺跡群III・V・VII」
- 前20. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996「中原遺跡群IV」
- 前21. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996「西田遺跡」
- 前22. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「西田IV遺跡」
- 前23. 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985「箱田堤遺跡」
- 前24. 前橋市教育委員会 1984「文化財調査報告書第15集」
- 前25. 前橋市教育委員会 1982「前箱田遺跡」
- 前26. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000「前箱田村西I遺跡」
- 前27. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997「宮地中田遺跡」
- 前28. 前橋市教育委員会 1987「村前遺跡」
- 前29. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986「元社社神明通跡III・IV」
- 前30. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994「柳橋遺跡」
- 前31. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999「橋手番田VI遺跡」
- 前32. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997「六供下堂木II遺跡」
- 前33. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「六供中京安寺遺跡・六供下堂木田遺跡」
- 前34. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998「六供下堂木V遺跡」
- 前35. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999「六供東京安寺遺跡」

一本造り軒丸瓦における布と模骨

——瓦工人たちの創意工夫——

高井佳弘

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 はじめに | 3 模骨と布 |
| 2 特殊な布目痕跡 | 4 まとめにかえて |

要 旨

上野国では国分寺創建期以降、瓦当裏面にいわゆる「無紋り」の布目痕を残す縦置き型一本造り軒丸瓦が盛んに作られるが、本稿はそこで用いられる布と模骨についての資料紹介である。紹介するのは4方向の糸によって構成される特殊な布と、布を貼り付けた模骨である。これらは現在までのところ笠懸町山際瓦窯の生産品にのみ見られるもので、他に類例が知られていない。おそらく一本造り軒丸瓦の製作にあたり、布を模骨にかぶせる困難さを解消しようとした工夫であると思われるが、瓦製作技法の研究ばかりでなく、古代の布を考える上でも興味深い資料であると思われる。

キーワード

対象時代 奈良～平安時代

対象地域 群馬県（上野国）

研究対象 軒丸瓦 製作技法 布

1 はじめに

近年古代瓦の研究は著しく深化している。特に技法研究は精緻を極め、瓦にあらわれる微細な痕跡から多くの情報を得る努力が各地で続けられ、瓦研究に新たな視点が多く提供されている。このような技法研究を行う上で重要なのは瓦の詳細な観察であるが、それを一層進展させるためには、その観察結果をなるべく早く公表し、研究者の共有財産とすることが必要であり、資料紹介はその意味で重要であると思われる。

本稿で扱う上野国分寺跡の出土瓦には数多くの種類の軒先瓦があり、製作技法にも興味深い資料が多数存在する。そのうちの大部分は既に『土跡上野国分寺跡発掘調査報告書』（前沢・高井1998、以下、本書を引用する場合は「報告書」と略記する）で報告したが、その後、執筆時には気がつかなかったものや不明だったものがいくつかあることに気がついた。それら未報告資料については、できるだけ資料紹介したいと思っているが、とりあえず本稿では、一本造り軒丸瓦に見られる興味深い痕跡について報告することにしたい。

古代における上野国の瓦生産は一本造り技法が盛んであることが一つの特徴であり、8世紀前半からいわゆる縦置き型一本造り（図1模式図参照）による軒丸瓦が数多く生産されている。この技法によって造られた瓦の外見上の特徴としてまず第一にあげられるのは、丸瓦凹面に付いた布目痕が瓦当裏面にまで続いていることである。この布目痕は、いうまでもなく、瓦を製作するために用いられた型木（内型）=横骨にかぶせられた麻布が瓦に押しつけられた痕跡であるが、そのうち瓦当裏面に残る布目痕には大きく分けて二つの種類がある。一つは布を絞ったような跡が残るものであり、もう一つはそのような痕跡のない、まったく平らな布の痕跡である。前者を「有紋り布目」、後者を「無紋り布目」と便宜的に呼んでおくと、ここで紹介する痕跡は後者の「無紋り布目」をもつ一本造りの軒丸瓦の一部に見られるものである。

2 特殊な布目痕跡

ここで紹介する布目痕跡は写真1に見えるようなものである。写真に写っている部分は軒丸瓦の瓦当裏面であるが、この写真は瓦に残る布目痕を直接撮影したものではない。というのも、こういった布目痕は布が粘土に押しつけられた痕跡であり、布目がいわばネガの状態になっているので、布を構成する糸を観察しにくいのである。そのため、布目痕に樹脂を押しあてて型どりし、ボジの状態、すなわち、布を直接見ているような状態にしたほうが観察しやすい。この写真1はそのようにして型どりした布目痕を拡大撮影したものである。詳しくは後述するが、この写真に見える布目痕のほとんどの部分で、

糸が4方向あることが見て取れるであろう。写真の右上にはごく普通の状態の布目、すなわち経糸と緯糸との2方向の糸で織られた布目が見えるが、それを左下に追っていくとそれとは違う2方向の糸が新たに加わってくる。その2方向の糸が加わった部分では、4方向の糸があるためにまるで2枚の布が向きを少しずらして重なっているかのようにみえる。ところが、これをよく観察すると、新たに加わった糸は最初の2方向の糸をまたいだりくぐったりしており、まったく別に存在しているのではないことが分かる。つまりこの布は、この部分では4方向の糸で織られているかのような状態になっているのである。

このような布目痕の存在に初めて気が付いたのは、すでに10年以上前、上野国分寺の発掘調査報告書の執筆のために出土瓦の整理をしていたときである。しかし、その当時はこのような特殊な布の存在を自分自身でも納得

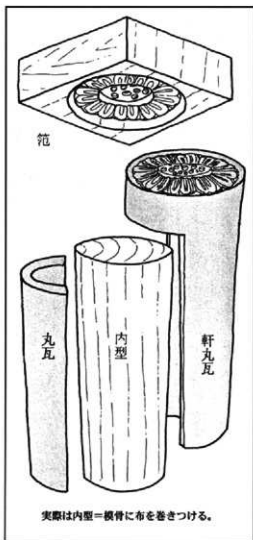


図1 縦置き型一本造り模式図（上原1997より）

することができなかった。また、ほかの研究者の方に実物を見せて相談しても、「そのような布はあり得ない」、「布が2回押しつけられているだけではないのか」と言下に否定されてしまうような状態であった。そのため、直後に執筆した「報告書」では「二重になっている部分や不連続な部分が見られるものも多い」(同書133ページ)などといった、今から思えば不正確な表現を用いて報告してしまった。だが、その後樹脂によって布目痕を型どりしてするなど、細々と観察を続けた結果、やはり4本の糸によって織られたような状態であると確信がもてるようになった。ただし、明確な痕跡を残す資料が少ないこともあり、実際の布がどのような形状をしているのかという肝心な点がよく分からず、それ以上の追究はほとんど進展しないままだったので、発表はその後も控えていた。しかし、このような布目痕自体興味深いのと、広く類例を求めることが必要であると感じていたため、早い機会に資料紹介だけはしなければならぬとも思っていた。冒頭に述べたように瓦研究は著しく進展しており、このような資料の提示は、これまであまり注意されてこなかった瓦の布目痕について注意を喚起することにもなるであろう。そのため、いささか遅きに失した観もあるが、今回発表することにしたものである。

問題の布目について今少し詳細に述べてみる。

この写真の個体は上野国分寺跡出土の軒丸瓦で、分類番号はB101(分類番号について詳細は「報告書」参照)である。図2に拓本と実測図を示したが、写真1に写っている範囲はこの個体の瓦当裏面で、四角で囲ってある部分である。この瓦は単弁5葉蓮華文の文様をもち、国分寺創建期を代表するB201(図4上)の系統を引くものであるが、蓮弁に反転の表現が見られず、蓮子も1+5

から1+4に変化しているなど、やや退化傾向にあり、創建期でも後半に位置づけられるものである(この系統の変遷私案は図4の通り)。このB101は国分寺から94点(破片接合前の点数。破片を接合すると84点となる)ほど出土しているが、それらはいずれも瓦当裏面に無紋りの布目を残す縦置き型一本造りによって作られている。そして、そのうちの数個体に、このような特殊な布目痕が残っているのである。B101の中にはこのような布目痕を観察できない個体もあるので、全部が同様な布を用いているわけではないようであるが、小破片で出土するものが多いために、その比率を明らかにすることはできない。

なお、少し先走ってしまうが誤解のないように述べておくと、この個体の製作に用いられている布は、次節で詳述するように、模骨に直接接着されているという、これまたいささか特殊なものである。しかし、模骨に接着しているようなものはこの例しか確認できないので、現時点では模骨に布を接着することとこのような布を用いることとは不可分の条件ではないと思われる。おそらくこのような特殊な布を用いているとはいっても、ほとんどの場合はふつうの布を用いた時と同様、一本の軒丸瓦を作るたびに模骨にかぶせるものなのだと思います。

この特殊な布目痕の特徴は前述の通りであるが、写真1の右上にごく普通の布目が見られることから明らかにように、瓦当裏面全面がそうになっているわけではなく、一部分に見られることに注意が必要である。その範囲は個体によって異なるが、写真1・図2にあげた個体では概ね瓦当裏面の下半分にその特殊な布目痕を残している。

この個体では布目痕がかなり明確に残っていて瓦当裏

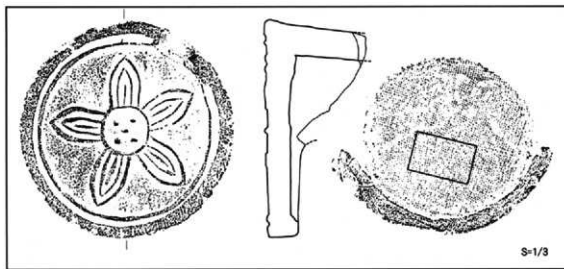


図2 瓦当裏面に特殊な布目痕を残す軒丸瓦 (B101)

面全面の布目がよく見えるが、4方向の糸からなる布目痕については、全体のある部分がそのようになっていることが分かるのみで、実際に布全体がどのような形状になっているかを考える痕跡はほとんどない。この付近で布が2枚重なっているようなことは、布の端の圧痕が残っていないことからおそらくあり得ないことであり、結局、瓦に残る布の痕跡からは、一見1枚に見える布の一部分が4方向の糸で構成されていることしか分からない。残念ながらその他の個体では布目が不明瞭になっているものが多く、現在までのところそれ以上の追究ができていない状態である。縦置き型一本造りによる軒丸瓦では当然のことであるが、筒部の粘土で丸瓦となる部分の逆側は最終的には切り取られてしまうため、その部分の布がどのような状態なのか分からないことも、この布の復元には不利な条件である。

布全体の形状が分からないので、どのようにして4方向の糸を部分的に用いた布を作っているのかは不明である。ただし、一度に4方向の糸を用いて布を織ることは不可能であろうから、まず緯糸・経糸からなる2方向のふつうの布を織り、その後刺し子のように、手作業で1本ずつ糸を加えていったと考えるのが自然であろう。しかし、そのような手作業を行っているとするとき、その作業は気が遠くなるほど細かく面倒なものになるであろう。また、手作業で、この布目痕のように、まるで2枚の布が重複しているかのように見えるほど直線的かつ平行に糸を加えられるのかという疑問が湧いてくる。その他の方法を現在のところ思いつかないが、いずれにしろ、このような布を作るためには多大の労力がかかるものと思われる。

それほどの労力をかけて、このような布を作る目的は何なのだろうか。これも布全体の形状が分からない以上推定の域を出ないが、現時点ではおそらく円筒形の横骨に布をかぶせることに関係しているのではないかと考えている。

縦置き型一本造りの場合、瓦当裏面の粘土と横骨とを離れやすくするため、丸瓦部分だけではなく瓦当裏面に当たる部分にも布がなければならぬ。つまり、横骨の広端面にも布をかぶせなければならぬのである。そのため、横骨に布をかぶせる際には丸瓦を造る場合に比べて工夫が必要であるが、このような場合、布を袋状にして横骨にかぶせるのが最も簡単な方法であると思われる。「はじめに」で述べたように、瓦当裏面には「有紋り」か「無紋り」の布目が残るが、「有紋り」の場合はまず布を筒状に縫い、その後一方の口を絞って縛り、袋状にする。そして、それを裏返して横骨の広端側からかぶせるので、瓦当裏面に紋目のある布目が残るのだと考えられる。「有紋り」の布目痕については以上の復元でほとんど問題がないと思われるが、「無紋り」には問題が多い。

というも、横骨に一枚の布を巻き付けるのであるから、密着させるためにはかなり無理があり、布には大きなしわが寄ってしまうはずであるが、『報告書』132～133ページで既に指摘したように、「無紋り」の瓦を見ると、瓦当裏面に丸瓦凹面にもほとんど布のしわが見られないからである。とすれば、布をかぶせる時にしわを消すような何らかの工夫がなされていたのであろう。そして、ここで紹介している4方向の糸を用いる布はその工夫のひとつではないかと思われるのである。

ふつうの布を用いた「無紋り」一本造りは、『報告書』で述べたとおり、布を一方に引っ張り、すべてのしわをそちらに集めるようにしているのだと考えているが、実際にそのような布を引っ張るのはかなり難しいと考えられる。そのため、横骨に密着するように巻き付けてもしわが寄りにくいような布が必要となり、それを解決する一つの工夫として、このような特殊な布が考え出されたのではないだろうか。もちろん、以上の推定は、布の全体が明らかにならない限り推測の域を出るものではない。

上野国では、瓦当裏面に「無紋り布目」をもつ一本造りが国分寺創建期に導入され、その後国内で広く用いられるようになるが、そのうち、ほとんどのものはごく普通の布を使用している。ただし、この特殊な布が見られるのはB101だけに限られるわけではない。この他に、B003、B004、B203、B208(図3)に見ることができる。そして、B101を合わせた5範種のうち、B003、B101、B203は新田郡笠懸町の山際瓦窯から表採されて³⁾、生産地が判明する。ほかの2範種についても、胎土・焼成の特徴が類似しており、これも山際瓦窯の製品の可能性が高い。とすれば、このような特殊な布目痕をもつ軒丸瓦は、全て山際瓦窯で造られていることになる。今のところ、上野国内の他の瓦窯の製品で、このような布を使用した例は見出していない。

山際瓦窯は創建期から修造期に至るまで、国分寺に瓦を供給した瓦窯である。そこで生産された軒丸瓦の変遷私案は図4のようであるが、そのうちの大部分の瓦にこのような布が使用されているのである。この5種類は、図4の通り、創建期中頃から修造期に至るまでのかなり長い期間にわたっているが、ごくふつうの布を用いた瓦も同時期に生産されていることにも注意が必要である³⁾。つまり、このような布は、山際瓦窯の工人の一部に長期間受け継がれてきた工夫なのだと考えられるのである。その意義については次節を述べた後に触れることにする。

3 横骨と布

次に取り上げるのは、一本造り軒丸瓦の横骨と布に関する興味深い一事例である。

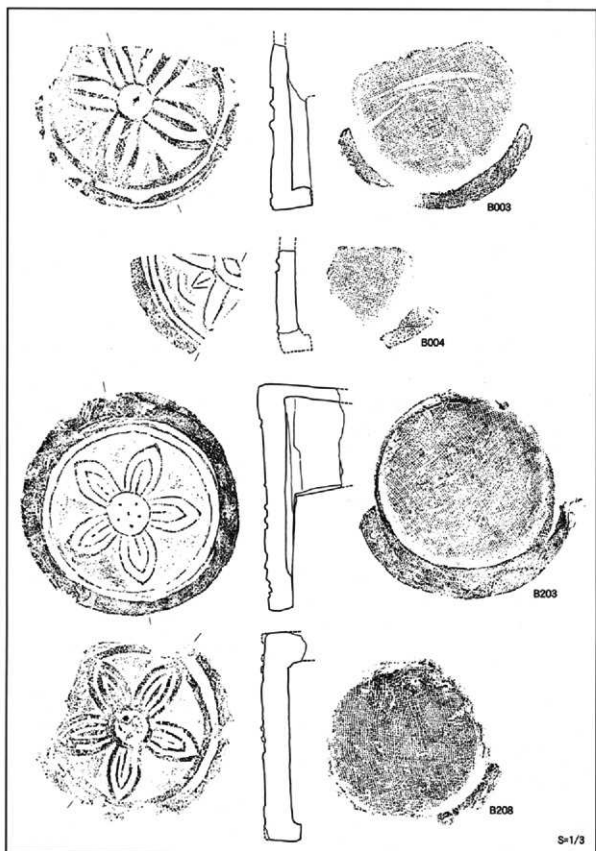


図3 特殊な布目底をもつ軒丸瓦

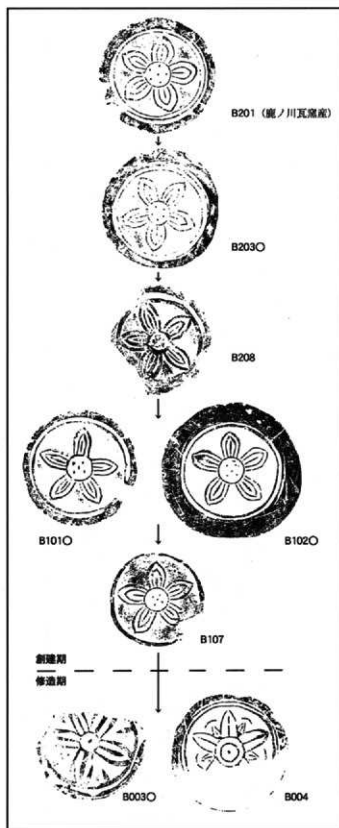


図4 山原瓦窯産軒丸瓦の変遷
(○印は山原瓦窯で表採されているもの。)

写真2を見ていただきたい。これは前節と同様、上野国分寺跡出土の軒丸瓦B101のある2個体を瓦当裏面側から撮影したものである。左側は前節で紹介したものと同一個体である。ただしこの写真では、撮影の都合上、瓦の天地が逆に置いている。

この写真を見れば明らかなように、この両個体の瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて残るすべての痕跡は全く同じである。瓦当裏面中央付近に残る山形の段差(写真ではこの段差を境に上が高く、下が低くなっているのが写っている。ここで1mm程度の段差がある)やその他の凹凸は、模骨の先端の形状がそのまま押し付けられたものと思われるが、それが左右全く同じであることが見て取れる。また、布目痕も全く同じで、糸の流れる方向などは左右で全く変わらない。それは丸瓦凹面でも全く同様である。さらに、丸瓦の位置を見ると、丸瓦部を造るために粘土円筒を切り取った位置まで全く同じであることがわかる。しかも、この写真ではやや見にくいだが、丸瓦凹面の瓦当近くには何かが擦れたような跡があるが、それも全く同位置にある。

以上の痕跡から、この二つの軒丸瓦の製作に用いられた模骨は同じものであることが分かる。しかも、布目痕が全く同じであることは、布がその模骨に接着されていることを示している。さらに、丸瓦部の切り取り位置が同じであることは、模骨に切り取り位置を示す目印が付けられていたことを示す。この目印はおそらく模骨の狭端面についていたであろう。さらに丸瓦凹面に残る痕跡は、粘土円筒を半分切り取った後、模骨を抜く際についたものと思われるが、これも同一であることは、模骨を傾けて抜く方向まで同じであることを示している。

以上の痕跡のうち、模骨を傾けて抜き去る方向が同じであることは、おそらく工人の癖に属することからであり、この2個体を作った工人が同一人物であったことを示している。その他は模骨の特徴に関することであるが、前述のような興味深い工夫を凝らした模骨を用いている。その工夫とは、布を模骨に貼り付けていることと、丸瓦を作り出す際に粘土を切り取る目印を付けていることの二つである。

この二つのうち、丸瓦部の粘土円筒を切る際の目印は、他の一本造り軒丸瓦にもあった可能性がある。なぜならば、先述のように、模骨に布を巻き付ける際にできるしわは、丸瓦となる部分とは逆方向に集められている可能性が高く、だとすれば、そのしわの集める部分を正確に切り取る必要があるからであり、そのためには何らかの目印を付けておいた方が便利だからである。この目印は丸瓦部がまだ円筒形であるときに必要なものなので、そのときに外から見える場所、すなわち模骨の狭端面につけられていたものと推定している。

もう一つの、模骨に布を貼り付けている工夫について

は、他に類例を知らない。このような痕跡を残す軒丸瓦は、写真で紹介した2個体と、上植木庵寺出土品1個体の合計3個体しか見出していない。現状では上野国でも珍しい事例である。そこで問題となるのは、なぜ布を貼り付けたのかということであるが、これもよくわからない。これらの個体は前節で述べたような特殊な布を用いているが、その布を用いることと模骨に貼り付けることは、これも先述したように不可分ではないと思われる。しかし、やはりこの工夫も、布を模骨に巻き付けるのがかなり困難であることを少しでも解消しようとした工夫の一つであると考えられるが、やはり一番自然なものではないだろう。布を模骨に貼り付ければ、一回ごとに布を巻き付けなくても済むからである。それがどれほどの労力節減になるかはよくわからない。実際には、貼り付けている例は少ないので、あまり有利な方法ではなかったのかもしれない。あるいは、何回か使用するうちに、粘土が離れにくくなるというような欠点もあるかもしれない。いずれにしても、一本造りに伴う工夫の一つであることは間違いないのではなかろうか。

なお、このように模骨が特定できる例は、全国的にもあまり知られていない。ふつう模骨には布が巻き付けられてしまうので、それだけで模骨のもつ特徴が消されてしまうのに、さらに布が一回ごとにまき直されるために特徴がますます弱みにくくなるからである。そのため、瓦製作に用いられる模骨を特定し、その数などを明らかにできた事例は、山梨県天狗沢瓦窯³の事例など、わずかしかない。本稿にあげた例はわずか3個体だが、他にも詳細に観察すれば、模骨を特定できる例が他にもある可能性はある。そのような可能性を、この3個体を観察すると感じることができる。

4 まとめにかえて

以上、上野国分寺跡から出土した一本造り軒丸瓦に残る模骨と布の痕跡について資料紹介をした。不明な点が数多く存在するので、資料紹介としてはかなり不十分であることは痛感しているが、現時点までわかっていることをとりあえず報告させていただいた。各地における類例と、それから、特に布の作り方の方面から御教示等をいただけたら幸いである。

最後に、ここで紹介した工夫の意義について述べて本稿のまとめとしたい。

これらの工夫は、先述のように、国分寺創建期から修造期にかけて、笠懸町山際瓦窯における瓦工人の一部が用いたものである。そこでは「無紋り」一本造り軒丸瓦が生産されていたが、実は、国分寺創建期という時期は、「有紋り」が「無紋り」に変化する時期に当たっている。上野国では、8世紀初頭頃、上植木庵寺に供給する瓦窯(場所不明)で「有紋り」一本造りが造り始められる。

その後東毛地区ではこの技法の瓦が作り続けられるが、国分寺創建期にあたって、いわゆる横置き型一本造りの技法が導入される。おそらくそれが一つの契機となって上野の一本造り技法に変化が起ころ、瓦当裏面の布目が「無紋り」に変わることになる。国分寺創建期に東毛地区で造られる軒丸瓦は単弁5葉の特徴的な文様を持っているが、この系統の瓦で「有紋り」をもつのはB202aの1範種のみであり、そのほかの縦置き型一本造りはみな「無紋り」である。それほど急激に「有紋り」→「無紋り」の変化が起きているのである。この変化のメリットが何なのかはよくわからないが、「有紋り」では瓦当裏面の粘土に凹凸が大きくなってしまい、そこに耐久性の上での欠点を認めるのも一つの考えだと思える。しかし、「無紋り」では何度も述べるように布を巻き付ける作業がやや難しくなる。そのため、特にそれを初めて造り始めた山際瓦窯の工人たちは、その欠点を克服しようとする苦慮したのではなかろうか。その際の創意工夫の一部が、本稿で紹介した事例なのではないかと思われる。つまり、新しい技法の欠点を克服しようとした努力の一端が、これらの痕跡から見て取れるのだと考えられるのである。

布を模骨に貼り付けるという工夫はほとんど一過性で、その後なくなってしまったようだが、特殊な布を作る工夫の方は、全部で5範種の軒丸瓦に用いられているので、かなりの長期間伝えられていることがわかる。しかし、同一の瓦窯で生産されている軒丸瓦でも、その布を用いないものもあることも注意が必要である。なぜならば、その布を用いる、用いないは何に起因する違いなのか、工人の違いなのか、単に工房に用意されている布に種類があるためだけなのか、一つの工房における工人の実態を考える上でも興味深い問題にも関わってくるからである。現状ではまだそこまで追究が進んでいないが、国分寺創建瓦窯の組織を考える上では一つの突破口になる問題だと思われる。

また、この特殊な布がどのように作られているのか、それは、古代における布の作り方、使い方にも関わってくる問題だと思われる。現状ではこのような布は山際瓦窯でのみ使われた珍しいものであるが、そのもの自体興味深いものであり、単に特殊な例として済ますわけにはいかないものを感じている。同時に、これが本当に山際瓦窯の工人のみの創意工夫で作られたものなのか、あるいは、どこかにそのような技術がありそれを学んだものなのかという問題も、今後類例を探すことで解決したい課題である。布そのものについては、筆者自身の専門ではないので問題の本質を理解しきれないが、これまであまり研究されてこなかった瓦に残る布目についても、今後研究が必要であることを痛感している。各方面からの御教示をいただけると幸いである。

なお、本稿で取り上げた布目に関して、坂口一氏、外山政子氏にご教示を賜りました。記して感謝の意を表します。

註

- 1) 丸瓦の成形の際にその心として用いる造瓦器具を「模骨」と呼ぶことについては大脇氏の見解に従った(大脇1991)。
- 2) 山際瓦窯の表採品については(須田1986)を参照のこと。
- 3) たとえばB102は山際瓦窯で表採されているので、そこでの生産品であると思われるが、これには同様な布目は見られない。
- 4) 山梨県天狗沢瓦窯では、布をかぶせない木製の模骨を用いて一本造り軒丸瓦が作られている。ここでは模骨の痕跡の詳細な検討が行われ、2本の模骨が用いられていたことが明らかにされた。(藤原1992)

参考文献

- 上原真人 1997 『瓦を読む』(『歴史発掘』11 講談社)
- 大脇 肇 1991 『丸瓦の製作技術』(『研究論集』IX、奈良国立文化財研究所)
- 藤原功一 1992 「天狗沢瓦窯跡の軒丸瓦」『丘陵』13
- 須田 茂 1986 「山際窯跡」(『群馬県史 資料編』2 群馬県)
- 前沢和之・高井佳弘 1988 『史跡上野国分寺発掘調査報告書』群馬県教育委員会

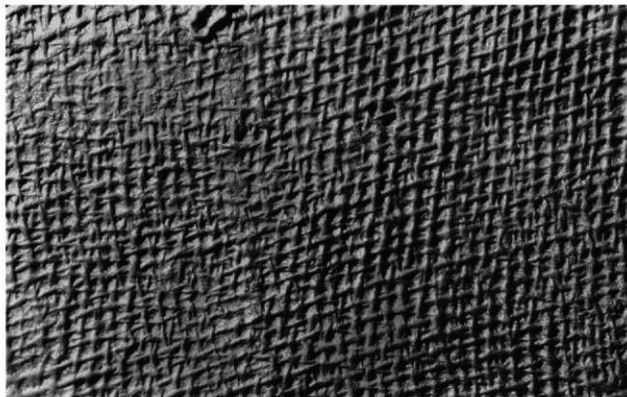


写真1 瓦当裏面の特殊な布目



写真2 瓦当裏面の痕跡の比較

群馬県内出土の縄文時代石製装身具集成

谷 藤 保 彦・関 根 慎 二・今 井 和 久

- | | |
|------------|----------|
| 1 はじめに | 3 集成一覧表 |
| 2 石製装身具の分類 | 4 報告書一覧表 |

— 要 旨 —

本集成は、平成11・13年度の2カ年にわたる群馬県埋蔵文化財調査事業団自主研究指定を受けた一部である。

今日までに発掘調査が進められてきた群馬県内の縄文時代の遺跡は数多く、それに伴って出土遺物も膨大な量となっている。そうした資料による縄文時代研究は、各研究者によって探求されつつあるが、装身具等に至っては未だ対象とされていないのが現状である。そこで本稿では、縄文時代の石製装身具についての資料集成と分類を行った。

群馬県内では、500点以上の石製装身具が出土している。装身具は、日常に使用し身体に装飾するもの、或いは、死者を埋葬するときに装飾するものなど多様な性格を持つが、使用の実態は不明なものが多い。これらの装身具について群馬県内資料について資料集成を進めてきたが、今回は石製の装身具を取り上げた。

集成した石製装身具は、用途・形状等から瑛状耳飾り・笥状石製品・刀状石製品・環状頸飾り・「の」字状石製品・勾玉状石製品・棒状石製品・方形石製品・楕円形石製品・円形石製品・三角形石製品・玉・大珠・その他の石製品の14種に形態分類している。今後の石製装身具を研究するための基礎資料としていきたい。

キーワード

対象時代	縄文時代
対象地域	群馬県
研究対象	石製装身具

1 はじめに

縄文時代の遺跡から発見される遺物は、多種多様なものが多い。その中で、日常生活を営むために使われた道具を第一の道具、非日常的に使われ方をする道具を第二の道具と呼び縄文時代人の特性を表そうとしている。そういった中で、装身具は日常生活を営むために必要不可欠なものではないと言った意味では第一の道具ではないが、日常の場での使用も考えられ、第二の道具にすることも難しい。野生の動物にとって身体の装飾は種の維持に不可欠な部分である。人間にとっても同様に装飾することは、種の維持を考えるならば本能に近い部分での働きがあると考えられる。以上のように装身具に対する位置づけは、第一の道具、第二の道具と単純に割り切れるものではなく多様な性格を持ったものとする。

従来より装身具は、出土遺物として特異な形態から注目されてきたが、集成や分類が出土の多さにならざるに乏しいものである。硬玉製大珠や瑛状耳飾などの定型的なもので型式として認められているものについての研究、集成はある程度行われてきた。しかし、その他の装身具については、研究・集成は多くないのが現状である。今回、身近なところで県内の装身具を集成し縄文時代の装身具について考えてみたい。

集成に当たっては、多様な性格を持った装身具は、装着される場（ステージ）・材料・時期・装着方法・地域などを考慮に入れ、資料集成を行ってきた。一方で、発掘報告書からの引用という一面もあり、報告者の記載によるならなければならない、必ずしも統一的な集成が行われたとはいえない。

今回は、石製品資料について分類を行い公表する。順次土製品等の装身具を集成公表し装身具のデータベースを作り研究の一助としたい。

なお、掲載資料の縮尺については、各報告書のままであるため統一は図られていない。一覧表についても報告書の記載をそのまま転載した。

2 石製装身具の分類

瑛状耳飾り（第1～6図）

瑛状耳飾りを一括した。県内出土の装身具の中で最も出土量が多く、その形状から外形を呈するものをⅠ類、方形を呈するものをⅡ類、三角形を呈するものをⅢ類、小型のものをⅣ類と大別し、さらに各型の中を形状差から細分した。以下、分類毎に説明を加える。

Ⅰ類 外形が円形を呈するものを本類とした。内径の小、大、断面形状等から以下のa～fの6細分される。

a（1～32）

外径に対して内径が大きく、断面が円ないし楕円形となり、細身のリング状を呈する一群である。完形となる出土資料は、現集成の中には見あたらない。1は

三ツ子沢中遺跡22号住居から、花積下層式土器と共に出土している。3～30は新堀東源ヶ原遺跡出土のもので、5が75号住居から花積下層Ⅰ式土器と共に出土している。また、それ以外も花積下層Ⅰ式期に伴う資料とされている。これらの出土例から、本類は前期初頭期に多く見られるようである。

b（33～45）

外径に対して内径が小さく、断面が円ないし楕円形となり、やや肉厚な一群である。37は曾木森裏遺跡8号土坑から、諸磯b式土器と共に出土している。42・43は行田梅水平遺跡476号土坑から、花積下層式土器と共に出土している。44・45は中標遺跡2号住居から、有尾式・大木2a式土器と共に出土している。これらの出土例から、本類は前期でも長い時間帯に存在するようである。

c（46～94）

外径に対して内径が小さく、断面が扁平となり一群である。中野谷松原遺跡出土の48はJ113住居、53はJ56住居、54はJ78住居からで、それぞれ諸磯b式土器と共存している。57は清水山遺跡2号住居から、諸磯a式土器と共に出土している。69は愛宕山遺跡74号土坑から、諸磯b式土器と共に出土している。71は行田梅水平遺跡36号住居から、諸磯b式土器と共に出土している。72は行田梅水平遺跡63号住居から、有尾式土器と共に出土している。75は行田梅水平遺跡1号住居から、諸磯a式土器と共に出土している。80は芳賀岡地遺跡J36号住居から、黒浜式土器と共に出土している。83は粕戸原II遺跡1号住居から、諸磯式土器と共に出土している。89は分郷八崎遺跡1号住居から、有尾式土器と共に出土している。94は切れ目が中途であり、未製品である。これらの出土例から、本類は前期でも中葉以降に多く見られる。

d（95～110）

外径に対して内径が小さく、断面が扁平気味で、やや肉厚な一群である。101は白倉下原遺跡A区78号住居から、諸磯c式土器と共に出土している。108は粕戸原II遺跡1号住居から、諸磯式土器と共に出土している。110は切れ目が中途であり、未製品である。これらの出土例から、本類は前期後葉に伴う傾向が窺える。

e（111～120）

外径に対して内径が小さく、断面が扁平となり、内径が上方へ寄ることで切れ目部が長くなる一群である。119は糸井宮前遺跡129号住居出土で、諸磯b式土器と共存している。この出土例から、本類は前期後葉に伴う傾向が窺える。

f（121～122）

a～e以外の断面形状のものである。121はbに属されると思われるが、その断面形状が正方形に近いこと

から分別した。三原田城遺跡7号住居から出土したもので、前期初頭の花積下層Ⅲ式に伴う。また、122は小型ではあるが、管状に近い厚さを持ち、他とは異なる形状を呈している。五日牛清水水田遺跡出土で、花積下層式に伴うものと考えられる。この両例共に、前期でも古い段階に伴うもので、今後の資料増加に期待したい。

Ⅱ類 外形が方形を呈するものを本類とした。断面形状等から以下のa・bの2細分される。

a (123～125)

外径に対して内径が小さく、断面が扁平となる一群である。123は中野谷松原遺跡J109号住居から、有尾式土器と共に出土している。この例により、本類は前期中葉に存在しているようである。

b (126)

外径に対して内径が小さく、内径が上方へ寄ることで切れ目部が長くなる一群である。土器と共存する例はないが、Ⅰ類aと共通する特徴からすれば、前期後葉に伴う可能性が高い。

Ⅲ類 外形が三角形を呈するものを本類としたが、127の1点のみである。糸井宮前遺跡116号住居出土で、有尾式・大木2a式土器と共存している。この出土例から、本類は前期中葉に存在しているようである。

Ⅳ類 小型のものを本類とした。128の1点のみである。新堀東源ヶ原遺跡出土のもので、花積下層Ⅰ式期に伴う資料とされている。同様のものは他県においても出土しており、やはり前期初頭に伴うようである。

籠状石製品 (第7図)

縦長で扁平な形状を呈し、上端(基部)付近に孔をもつ類で、所謂「籠状石製品」とされてきたものである。形状から分類できる要素をもつが、ここでは分類しない。6・7・11の上端(基部)には、孔を貫くような溝状の掘込みを両面にもつ。

1～8は新堀東源ヶ原遺跡出土のもので、花積下層式期に伴う資料とされている。9は箱田遺跡群J19住居から出土したもので、前期の関山Ⅰ式古段階の土器に伴う。それ以外のものは、遺構出土であっても時期は不明。

刀状石製品 (第8図)

上端(基部)付近に孔を持ち、下端(先端)が刃部のごとく切っ先状に薄く尖る。その全体的な形状が小型な状を呈していることから、籠状石製品から分別して刀状石製品とした。

1は三原田城遺跡86号土坑から出土したもので、前期初頭の花積下層Ⅲ式に伴う。蛇紋岩製で、全面がかなり丁寧に研磨されて光沢をもち、側縁の一方に両面からの擦り切り痕を残し、もう一方の側縁は平坦となる。上端

には、孔を貫くような溝状の掘込みを両面にもつ。図示できなかったが、この三原田城遺跡例以外にも伊勢崎市大上遺跡から出土している。ほぼ同形状で、溝状の掘込み・擦り切り痕をもつ蛇紋岩製で、前期初頭に属するようである。

環状頸飾り (第9図)

弧状ないし棒状の形状を呈し、全面および両端部まで丁寧な研磨が施され、両端部付近に小孔が穿たれているものである。「縄文時代 12号」に掲載された「環状頸飾り」について(谷藤 2001)に準拠する石製品を、この類とした。

1は坪井遺跡SII2住居から花積下層Ⅰ式・塚田式土器と共に出土したもので、前期初頭に属される。3は中野谷松原遺跡J118住居から諸磯b式土器と共に出土している。2は小型なもので、4は幅広な方形形状を呈し、共に時期不明。

「の」字状石製品 (第10図)

平面形状がひらがなの「の」字状をする。断面は扁平。中央の孔は裝飾としての機能と考えられる。上端部にも小さい孔が穿たれ、垂飾用或いは他の装身具と連結するためのものと考えられる。1は、葉蠟石製で全体に擦痕がみられ、作りは粗雑な感じがする。2は、蛇紋岩製で丁寧に磨き込まれている。前期末を主体とする遺跡から出土している。

勾玉 (第11図)

平面形状が勾玉状(牙齒状)になる。断面形は、丸みを帯びたものや扁平なものがある。形状からⅢ類に分類できる。

Ⅰ類 (3～7)

孔が小さく端部によっているものが多い。全体に細身で弧状を描くものが多く、袂状耳飾の半載された形に似ることから、袂状耳飾からの転用品と考えられる。前期のものが多い傾向にある。

Ⅱ類 (1、2、8、9)

頭部が頸部に比べ膨らみ、孔が全幅に対してやや大きめに穿たれる。中期以降に多く見られるようである。

Ⅲ類 (10～12)

頭部が膨らみ、孔が大きい。頭部に刻みを持つことから丁字頭勾玉に分類できる。出土遺跡から、後期以降に多く見られる。

棒状石製品 (第12図)

平面形状が棒状を呈し、断面形が隅丸方形、或いは楕円形をする。孔は、端部に穿たれる。孔の直径は本体に比べ小さいものが多い。中期の遺跡から多く出土してい

る。

方形石製品 (第13図)

平面形状は方形を呈し、断面形は扁平である。いわゆる板状のものである。孔は、端部に穿たれるものが多い。1は、表面を磨き線刻を施す。2～5は、表面を磨いた研磨痕が見られる。6～16についても表面は磨かれ滑らかである。前期以降の遺跡から出土しており、時期幅は広い。

楕円形石製品 (第14図)

平面形状は楕円・長楕円形を呈する。断面形は、扁平の板状である。孔は、端部に穿たれるものが多い。7～12については、孔が中央よりに穿たれる。これらのものは、中期の遺跡から多く出土する傾向を持つが、時期幅は広いと思われる。

円形石製品 (第15図)

平面形状は円形を呈し、断面形は扁平の板状である。孔の形状により、以下の3種類に分類される。なお、I類は後期、II類は前期中葉から、III類は前期中葉の遺跡・遺構から、多く出土している傾向が窺える。

I類 (3)

小孔が2カ所に穿たれる。

II類 (1、2、4、13～16)

孔は、直径が比べ小さく穿たれ、白玉状になる。

III類 (5～12)

大形の孔を持ち、環状になる。5、6は表面に線刻を持つ。

三角形石製品 (第16図)

平面形状は三角形を呈する。断面は扁平の板状である。孔は、上端に穿たれるものが多いが、1は2カ所に穿孔される。また、7は、中央部に孔を持つ。1～3は逆三角形を呈する。時期は、前期以降の遺跡から出土している。

玉 (第17～19図)

大珠を除く玉を一括した。その形状から、管玉状を呈するものをI類、棗玉状を呈するものをII類、小玉をIII類と3分類した。以下、分類毎に説明を加える。

I類 管玉状 (1～21)

縦長で、側面が平坦となり、管状の形状を呈するものである。中には、側面がやや括れるものも含めている。1は三原田城遺跡2号住居から、花積下層III式土器と共に出土している。7・8は八幡林古墳群から、黒浜式土器と共に出土している。13は箱田遺跡群JP110号土坑から、篋状石製品10と共に出土している。

14は分郷八崎遺跡8号住居から、有尾式土器と共に出土している。15・18は中野谷松原遺跡から出土したものであり、15はJ80住居、18はJ83住居からで、共に諸磯b式土器に伴っている。20は三原田遺跡2～9住居からで、加曾利E3式土器と共に出土している。また、21は新堀東源ヶ原遺跡出土のもので、花積下層式期に伴う資料とされている。こうした出土例から、本類は前期を通じて存在しているようであり、特に後期以降に増加する傾向が見られる。

II類 棗玉状 (22～83)

やや縦長となるが、側面形が膨らみ、棗状の形状を呈するものである。22～34は新堀東源ヶ原遺跡出土の完形品で、花積下層式期に伴う資料とされている。この内、23・24・32・34は接合資料である。また、44～83は製作に関わる未製品ないし破損品と考えられるものである。35は中野谷松原遺跡J7住居から、有尾式土器と共に出土している。38は三原田城遺跡70号土坑から、花積下層III式土器と共に出土している。40は鳥取福蔵寺遺跡J1住居から、有尾式土器と共に出土している。こうした出土例から、本類は前期初頭に多く伴うようであるが、僅かに中期まで存在するようである。

III類 小玉 (84～117)

I・II類とは異なり、小型のものを本類とした。85～100・102～104・108は深沢遺跡から出土したもので、85～97・102～104はC区20号配石、98はC区5号配石、99はC区9号配石、100はC区27号配石からで、いずれも後期の加曾利B式に伴っている。112は輪戸原II遺跡48号土坑から、諸磯b式土器と共に出土している。113は小仁田遺跡3号住居から、諸磯b式土器と共に出土している。115は新堀東源ヶ原遺跡出土で、花積下層式期に伴うとされている。117は五目牛清水田遺跡4号住居から、花積下層II式土器と共に出土している。こうした出土例から、本類は前期以降の縄文時代を通じて存在しているようであり、特に後期以降に増加する傾向が見られる。

大珠 (第20図～22図)

石材から、I類を硬玉製(1～5)、II類をその他の石材(7～19)に分類した。さらに八幡一郎、寺村光晴氏らの分類に従い大珠の形状から、細分を行った。

I類 石材が硬玉製のもの。

a (1～3)

いわゆる節彫形を呈するものである。1は、南蛇井増光寺遺跡ピットから出土している。2は、小町田遺跡の遺構外から出土。3は、三原田遺跡中期後半の3-1住居から出土している。

b 不整形 (4～6)

自然石や転石をそのままの形で、あまり形を作らず

に表面を磨いたもの。4は三原田遺跡、5は鼻毛石中山遺跡、6は、白川傘松遺跡のいずれも中期後半の遺構から出土している。

II類 石材が硬玉以外のもの。

a (7)

盤形を呈し、硬玉製大珠を模倣したものと考えられる。7は、緑色片岩製のもので遺構外出土である。

b (8)

形状が縞縷形を呈する。中野谷松原遺跡から、蛇紋岩製のものが1点出土している。

c (9~14)

形状が石斧形を呈するものである。今回の集成では、9の資料は報告書によると、I類の翡翠製となっているが、観察では蛇紋岩と思われるので本類に入れた。11は、下鎌田遺跡147号住居の中期の遺構から出土している。12~14は、神保植松遺跡出土のものでほぼ中央に孔が穿たれている。遺構外出土のため時期は特定できない。

d (15~23)

不整形のもの。自然石や転石を利用している。表面に研磨痕と自然面を残すものが多い。表面の研磨の丁寧さなどから硬玉製大珠を模倣したものと考えられるものもあるが、自然面も多く残すものも多い。15は、軽石で敷石住居から出土している。16は、蛇紋岩製で前期の遺跡から出土しているなど素材の精緻や出土時期等幅広いものがある。

e (24~30)

形状は、楕円形を呈している。前項の楕円形石製品よりやや大形。孔が中央よりにあるものが多く、硬玉製大珠を模倣した小型のものと考えられるものもある。時期は、中期以降のものが多い。

その他 (第23図)

形状が不定形のもの、未製品(原石を含む)に分けられる。

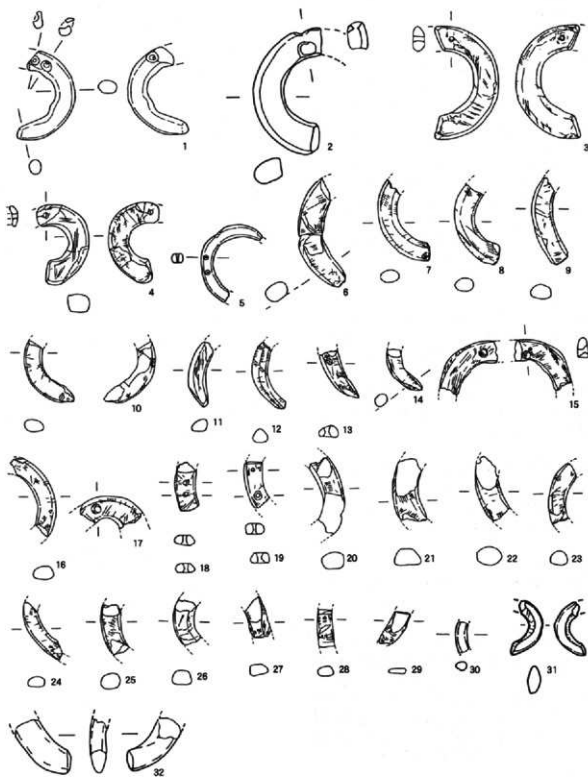
I類 (1~8)

形状が不特定のものを一括した。2は、中野谷松原遺跡出土のもので三角形の形状で、竪に孔を穿っている。時期は、1、2とも前期と考えられる。3は、形状が「8」の字状になる。深沢遺跡出土のもので後期と考えられる。4は、頂部に突起を持ったもので突起の下に孔を穿つ。下佐野遺跡出土で中期のものである。5~8は、不定形で時期不明のものである。

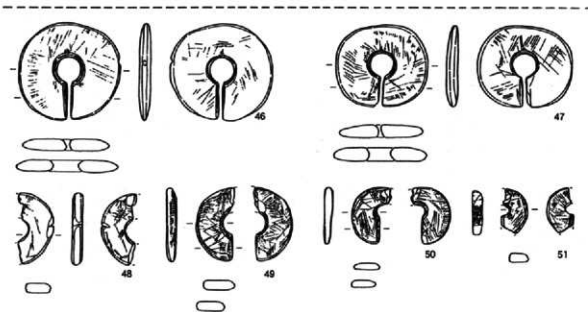
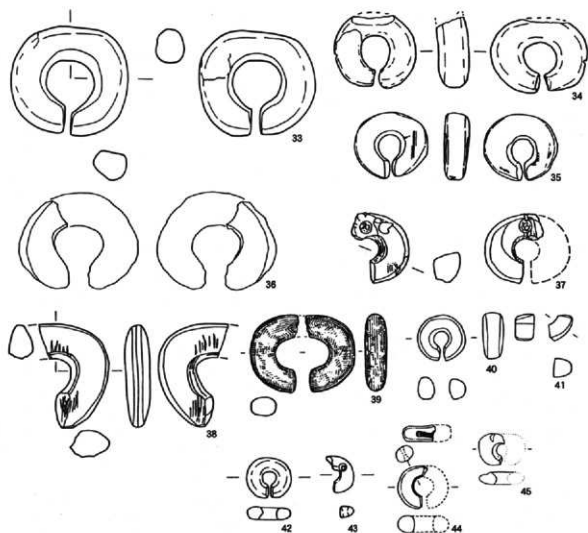
II類 (9~17)

未製品で、いずれも新堀東源ヶ原遺跡出土のもので、前期初頭とされている。9・10は原石に近い、荒削りした素材である。15~17には擦り切り痕が残されているものである。

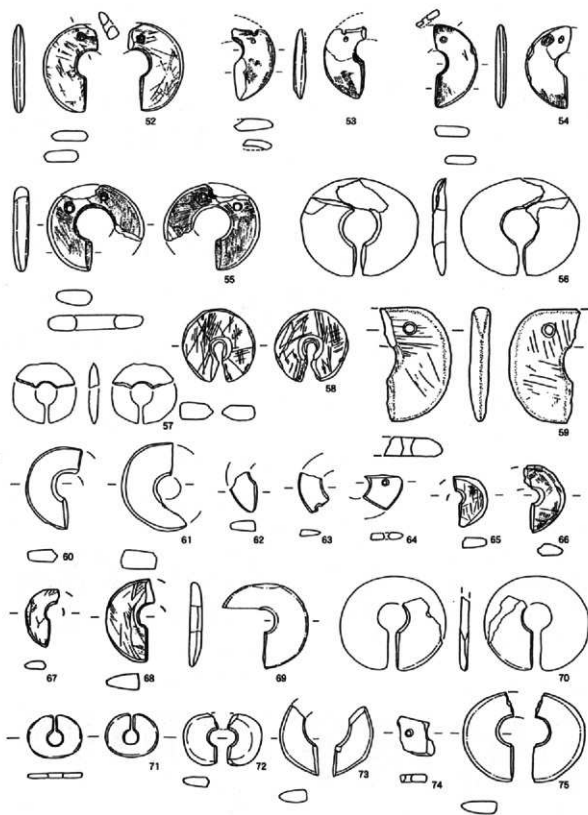
以上、集成した石製装身具の分類を行ってきたが、集成図、分類別一覧表、出土遺跡報告書(文献)一覧を併せて掲載する。



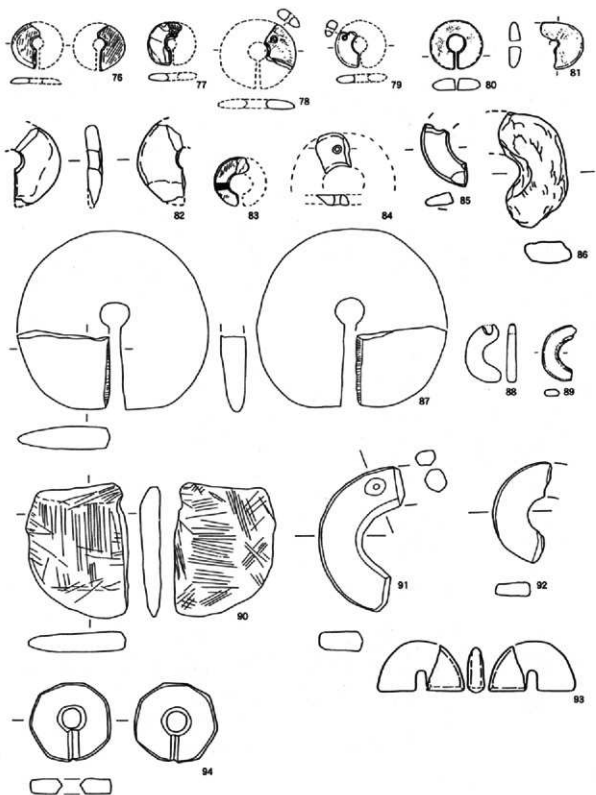
第1圖 玦状耳鱗(1)



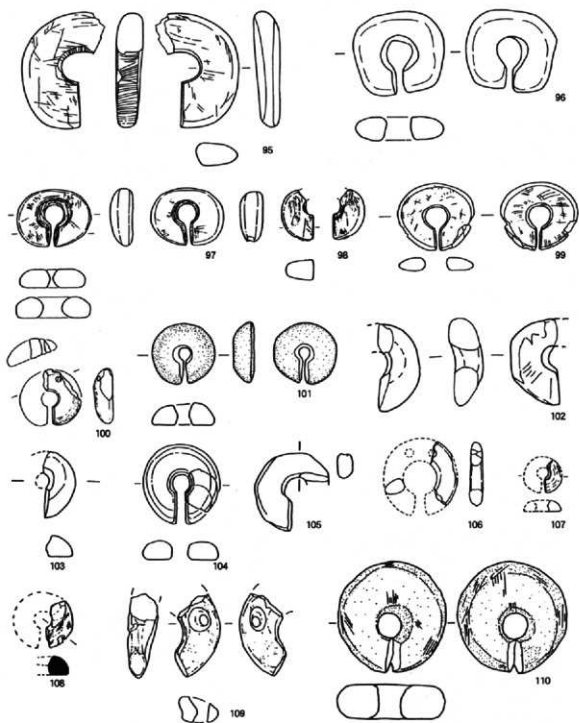
第2図 珠状耳飾(2)



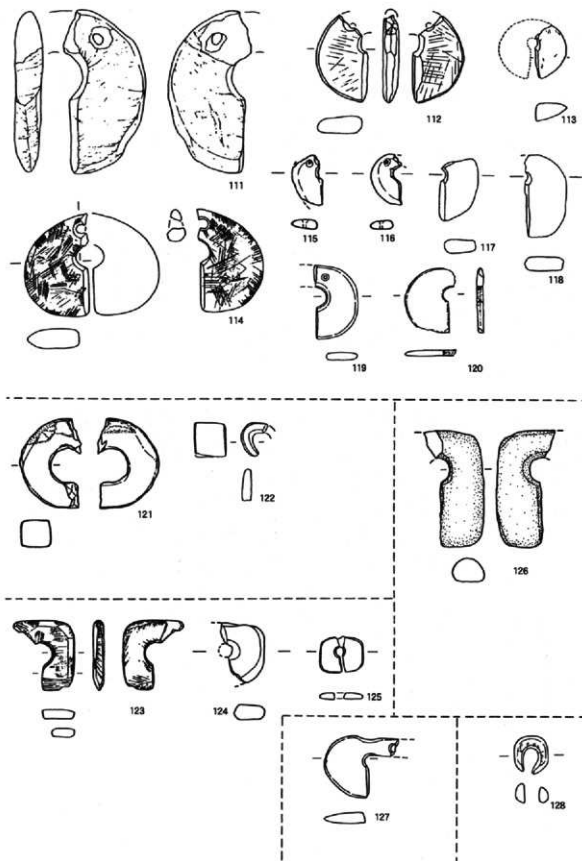
第3圖 袂伏耳齶(3)



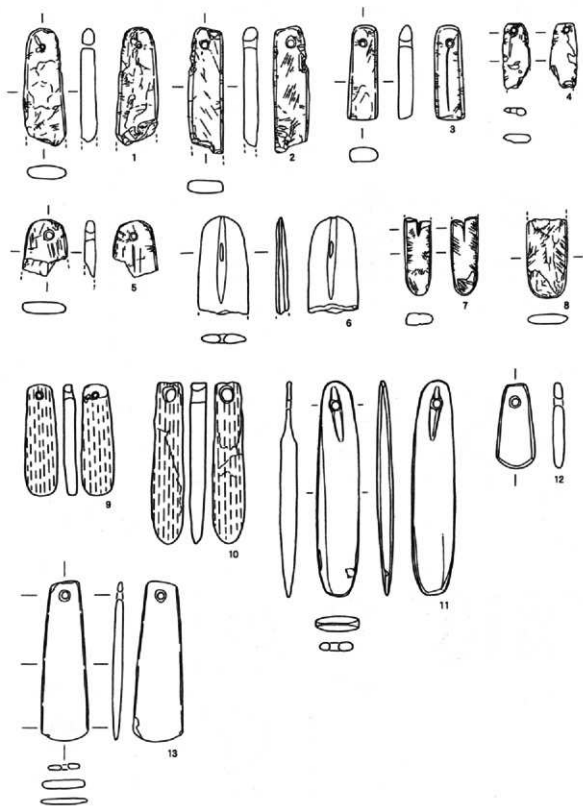
第4図 玦状耳飾(4)



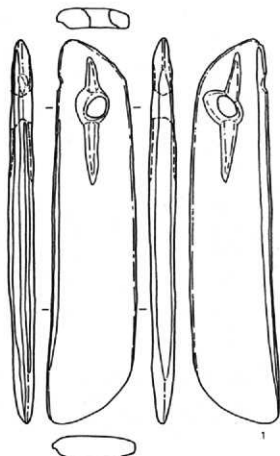
第5圖 塊狀耳飾(5)



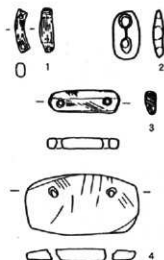
第6図 状耳飾(6)



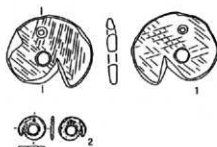
第7圖 筒状石製品



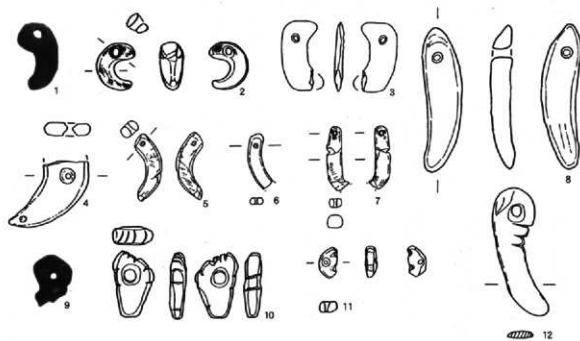
第8図 刀状石製品



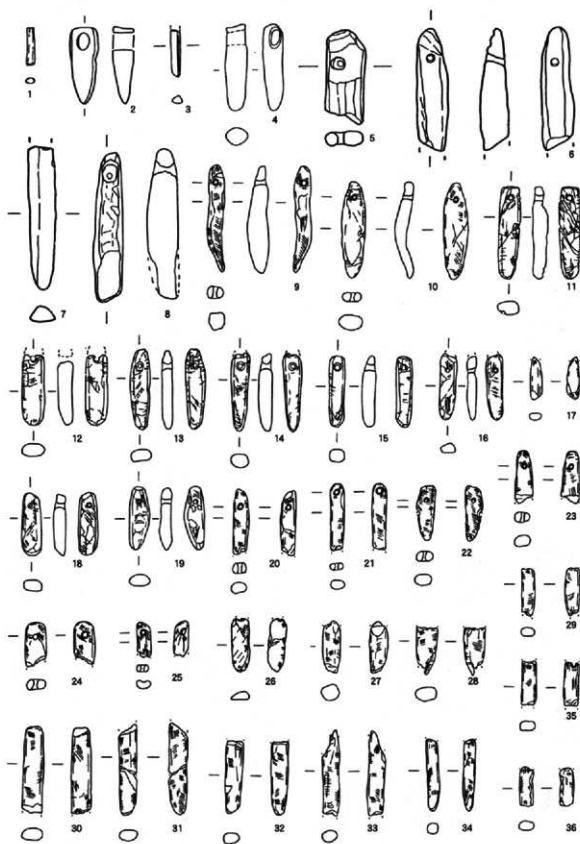
第9図 環状頸飾り



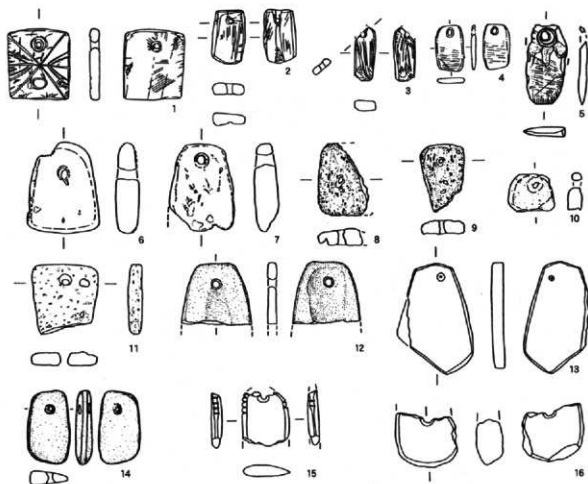
第10図 「の」字状石製品



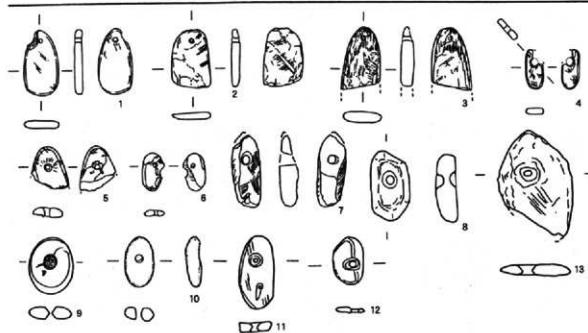
第11図 勾玉状石製品



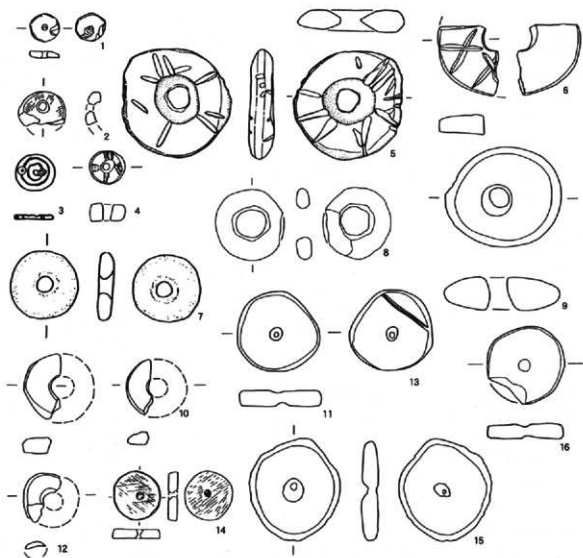
第12圖 棒状石製品



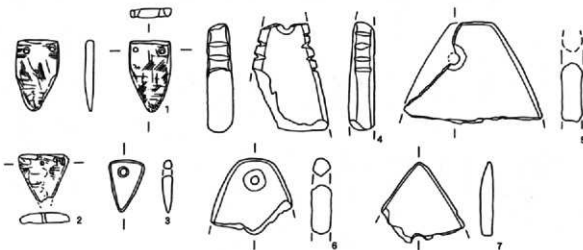
第13図 方形石製品



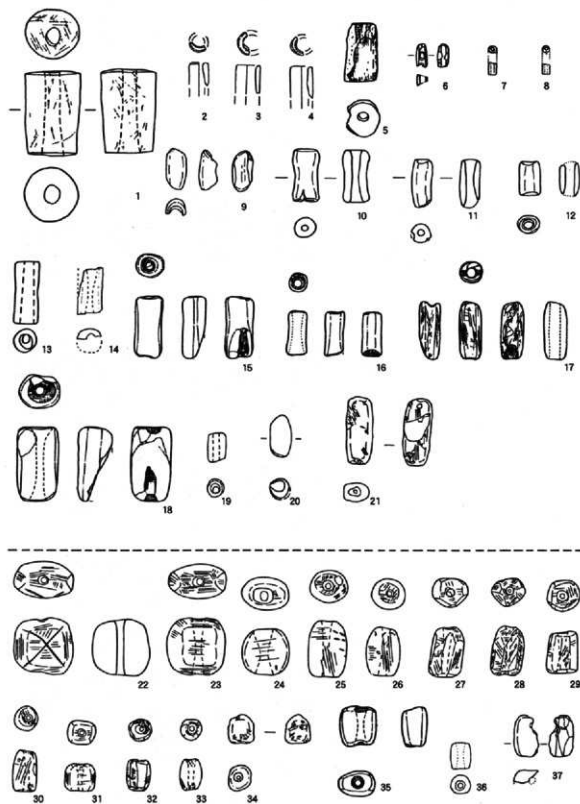
第14図 楕円形石製品



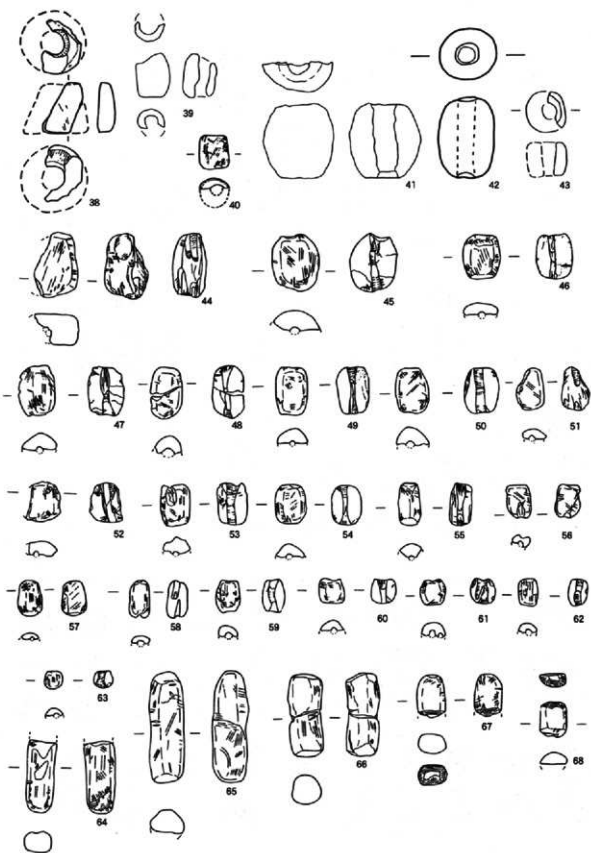
第15圖 円形石製品



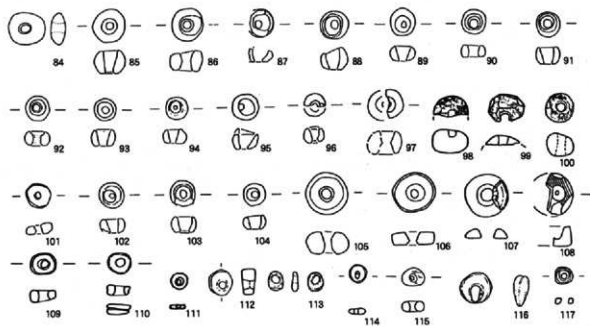
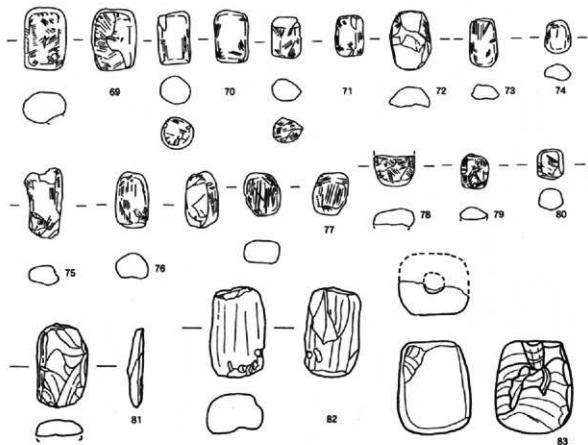
第16圖 三角形石製品



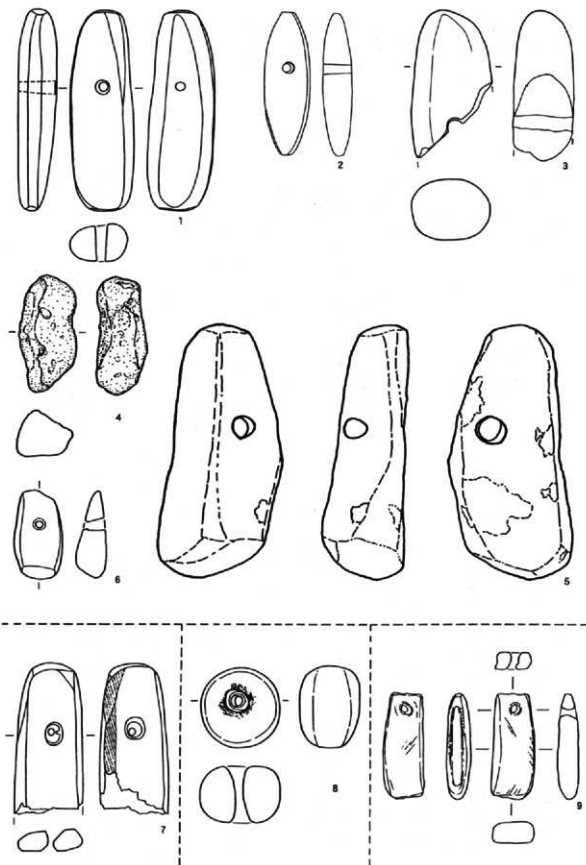
第17図 玉 (1)



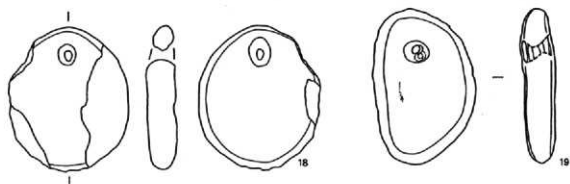
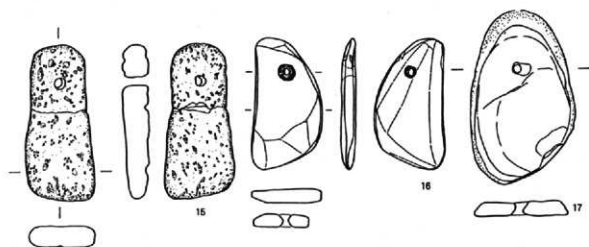
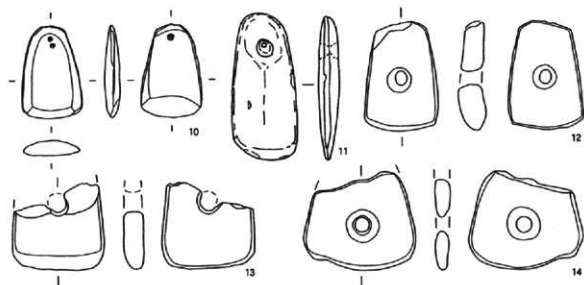
第18図 玉 (2)



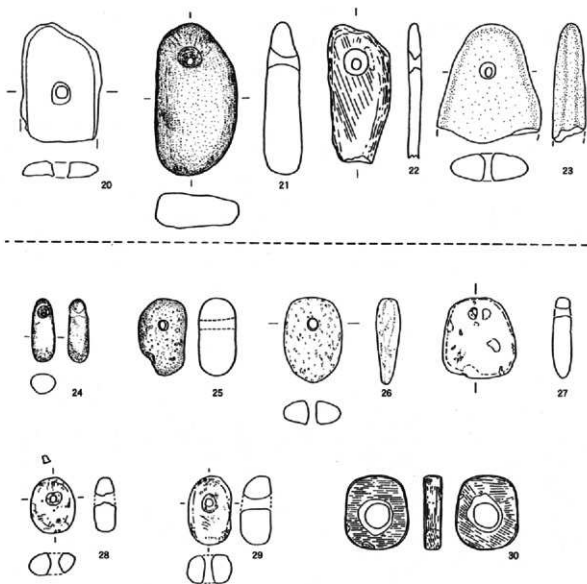
第19図 玉 (3)



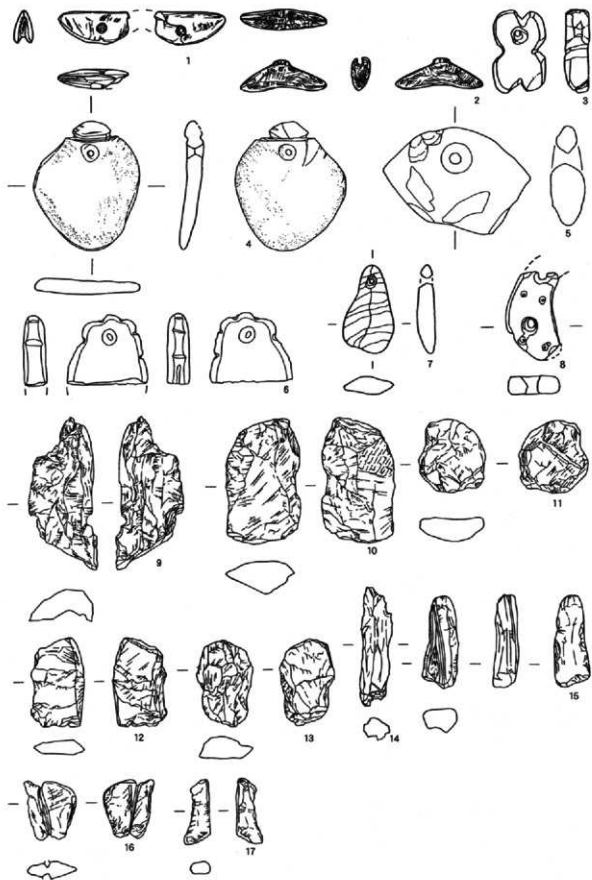
第20圖 大珠(1)



第21図 大珠(2)



第22圖 大珠(3)



第23図 その他

球状耳飾り

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	榛名町	三ツ子沢中	I a	蛇紋岩			0.7	8.0	22号住居	68
2	下仁田町	下鎌田	I a	硬質の白色岩					1172号土坑	55
3	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	6.0	1.3	0.6	15.7	グリッド	58
4	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	4.3	1.3	0.4	11.7	グリッド	58
5	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石				15.6	75号住居	58
6	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	5.5	1.4	0.9	13.2	グリッド	58
7	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	4.4	1.0	0.7	7.6	グリッド	58
8	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	4.2	1.1	0.7	7.1	グリッド	58
9	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	4.7	1.1	0.8	6.5	グリッド	58
10	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.2	0.9	0.6	5.0	グリッド	58
11	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.0	1.8	0.5	4.0	グリッド	58
12	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.6	0.8	0.7	3.6	グリッド	58
13	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.5	0.9	0.6	2.6	グリッド	58
14	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.2	0.8	0.5	2.5	グリッド	58
15	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.3	1.2	0.6	5.1	グリッド	58
16	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	4.2	1.0	0.7	6.1	グリッド	58
17	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.3	1.5	1.3	8.8	グリッド	58
18	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.6	1.1	0.5		グリッド	58
19	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.6	1.0	0.6	2.9	グリッド	58
20	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	4.0	1.2	0.9	2.7	グリッド	58
21	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.3	1.4	0.9	6.4	グリッド	58
22	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.3	1.3	1.0	6.3	グリッド	58
23	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.1	1.0	0.7	6.3	グリッド	58
24	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.2	0.9	0.6	3.7	グリッド	58
25	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	3.2	1.1	0.8	3.5	グリッド	58
26	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.3	1.1	0.8	3.8	グリッド	58
27	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.2	1.2	0.6	3.0	グリッド	58
28	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	2.1	0.8	0.6	2.0	グリッド	58
29	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石	1.2	0.9	0.3	1.6	グリッド	58
30	松井田町	新堀東源ヶ原	I a	滑石				1.0	182号住居	58
31	赤城村	三原田城	I a	蛇紋岩	1.4	0.8	0.4	3.6	遺構外	22
32	下仁田町	下鎌田	I a	滑石				0.8	160号住居	55
33	下仁田町	下鎌田	I b	滑石					1011号土坑	55
34	下仁田町	下鎌田	I b	滑石					遺構外	55
35	北橋村	道訓前	I b	滑石	3.6	3.8	1.3		土坑	73
36	子持村	白井北中道II	I b	葉ろう石	(2.3)	(1.2)	(0.5)	28.4		63
37	富岡市	曾木森裏	I b	滑石	2.6	2.5	1.1	(3.0)	8号土坑	50
38	前橋市	小島田八日市	I b	蛇紋岩	2.8	1.8	0.7	7.0	P54	41
39	月夜野町	大友館址	I b	蛇紋岩	4.1	(2.6)	1.1	3.7	J-1	21
40	赤堀町	五日牛清水田	I b	葉ろう石	2.5			(10.0)		38
41	赤堀町	五日牛清水田	I b	葉ろう石	2.5			11.2		38
42	松井田町	行田梅水平	I b	滑石	3.2	3.5	1.0	2.7	476号土坑	56
43	松井田町	行田梅水平	I b	滑石	3.0	2.1	1.0	17.0	476号土坑	56
44	昭和村	中標	I b	瑪瑙				6.7	2号住居	12
45	昭和村	中標	I b	蛇紋岩				13.0	4号住居	12
46	安中市	中野谷松原	I c	結晶片岩				7.0	遺構外	72
47	安中市	中野谷松原	I c	蛇灰岩					遺構外	72
48	安中市	中野谷松原	I c	滑石					113号住居	72
49	安中市	中野谷松原	I c	結晶片岩					31号住居	72
50	安中市	中野谷松原	I c	滑石					遺構外	72
51	安中市	中野谷松原	I c	結晶片岩					62号住居	72
52	安中市	中野谷松原	I c	蛇灰岩					遺構外	72
53	安中市	中野谷松原	I c	蛇灰岩					56号住居	72
54	安中市	中野谷松原	I c	滑石					78号住居	72
55	安中市	中野谷松原	I c	蛇灰岩					遺構外	72
56	笠懸町	清水山	I c	土製					遺構外	9
57	笠懸町	清水山	I c	滑石					遺構外	9
58	吉井町	神保富士塚	I c						P32	6

番号	市町村名	遺 跡 名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出 土 位 置	文献
59	北橋村	諏訪西	1c	蛇紋岩	3.1	1.9	0.5	4.5	56号土坑	16
60	吉井町	神保植松	1c	砂岩	4.5	3.0	0.7	8.0	遺構外	24
61	吉井町	神保植松	1c	滑石	4.7	3.4	1.0	15.4	遺構外	24
62	吉井町	神保植松	1c	蛇紋岩	2.1	1.5	0.5	1.9	遺構外	24
63	吉井町	神保植松	1c	変質蛇紋岩	2.1	1.3	0.3	1.2	遺構外	24
64	吉井町	神保植松	1c	蛇紋岩	1.4	1.7	0.4	1.9	遺構外	24
65	富岡市	中高瀬観音山	1c	滑石質蛇紋岩	2.8	1.4	0.5	4.0		47
66	富岡市	中高瀬観音山	1c	滑石質蛇紋岩	3.6	1.3	0.6	6.0	竪穴	47
67	富岡市	中高瀬観音山	1c	滑石	3.1	1.8	0.5	4.0	P69	47
68	富岡市	中高瀬観音山	1c	滑石	4.4	2.6	0.9	12.0	P190	47
69	富士見村	愛宕山	1c	蛇紋岩	4.4	(4.4)	0.6	10.1	74号土坑	45
70	北橋村	道訓前	1c	滑石	3.8	2.4	0.4	6.1	遺構外	73
71	松井田町	行田梅木平	1c	滑石	3.4	4.2	0.4	12.0	36号住居	56
72	松井田町	行田梅木平	1c	滑石	4.2	2.7	0.8	14.5	63号住居	56
73	松井田町	行田梅木平	1c	蛇紋岩	3.7	1.5	0.6	5.5	1号配石基群	56
74	松井田町	行田梅木平	1c	滑石	2.1	1.9	0.4	2.2	遺構外	56
75	松井田町	行田梅木平	1c	蛇紋岩	4.7	1.8	0.7	12.6	1号住居	56
76	昭和村	中棚	1c	滑石				4.5	グリッド	12
77	昭和村	中棚	1c	滑石				6.0	グリッド	12
78	昭和村	中棚	1c	蛇紋岩				9.0	グリッド	12
79	昭和村	中棚	1c	蛇紋岩				6.0	グリッド	12
80	前橋市	芳賀団地	1c	蛇紋岩	4.0	4.2	1.0	25.0	J36号住居址	29
81	前橋市	芳賀団地	1c	蛇紋岩	2.5	(2.2)	0.6	7.0	J51号住居址	29
82	下仁田町	下鎌田	1c	滑石					遺構外	35
83	富岡市	鞆戸原	1c	滑石	(2.7)		0.3		1号住居址	55
84	安中市	大下原	1c	滑石					遺構外	39
85	富岡市	中高瀬観音山	1c	滑石質蛇紋岩	3.4	2.3	0.6	6.0	P89	47
86	下仁田町	下鎌田	1c	滑石					93号住居	55
87	子持村	吹屋中原	1c	変質蛇紋岩						63
88	赤城村	見立瀧井	1c		3.1	1.5	0.5	3.2	グリッド	14
89	北橋村	分郷八崎	1c	蛇紋岩	3.1	0.9	0.4	2.7	1号住居	20
90	子持村	吹屋中原	1c						包含層	63
91	吉井町	多比良天神原	1c	牛伏砂岩						69
92	吉井町	多比良天神原	1c	牛伏砂岩						69
93	北橋村	真壁諏訪	1c	滑石				5.4	遺構外	66
94	吉井町	神保植松	1c	砂岩	4.2	4.3	0.9	15.4	遺構外	24
95	子持村	吹屋子塚	1d	葉ろう石	(3.1)	(1.5)	(0.5)	(5.0)	包含層	63
96	赤城村	勝保沢中ノ山	1d	瑪瑙	2.3	2.1	0.6	5.9	包含層	27
97	安中市	中野谷松原	1d	蛇灰岩					遺構外	72
98	安中市	中野谷松原	1d	結晶片岩					遺構外	72
99	榛名町	白岩浦久保	1d	滑石	3.6	4.0	0.7	14.2	グリッド	70
100	北橋村	分郷八崎	1d	滑石	3.1	(1.3)	0.9	6.6	140号土坑	20
101	甘楽町	白倉下原	1d	滑石	3.2	3.3	1.2	20.0	A区78号住居	40
102	下仁田町	下鎌田	1d	滑石					202号住居	55
103	下仁田町	下鎌田	1d	滑石					遺構外	55
104	渋川市	半田南原	1d	滑石			1.0			44
105	吉井町	入野	1d						グリッド	10
106	月夜野町	前中原	1d	瑪瑙				4.0		3
107	昭和村	中棚	1d	滑石				3.3	グリッド	12
108	富岡市	鞆戸原	1d	滑石	(3.0)		1.0	4.0	1号住居址	35
109	前橋市	荒砥北三木堂	1d		2.2	1.2		2.3	P177	32
110	赤城村	三原田城	1d	蛇紋岩	3.0	2.9	0.9	11.6	25号土坑	22
111	前橋市	荒砥北三木堂	1e	滑石	4.3	2.1		15.9	P177	32
112	富岡市	南蛇井増光寺	1e	滑石	3.0	1.7	0.5	3.8	P614	25
113	前橋市	芳賀団地	1e	土製						29
114	甘楽町	白倉下原	1e	葉ろう石	2.7	1.7	0.5	3.5	C区50号住居	40
115	松井田町	行田梅木平	1e	滑石	4.0	2.1	0.7	11.2	474号土坑	56
116	松井田町	行田梅木平	1e	滑石	4.1	1.8	0.7	11.1	474号土坑	56
117	吉井町	多比良天神原	1e	牛伏砂岩						69
118	吉井町	多比良天神原	1e	牛伏砂岩						69

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
119	昭和村	糸井宮前	I c	玉ずい	4.0	2.1	3.0	6.9	129号住居	17
120	北橋村	分郷八崎	I e	滑石	3.6	(2.3)	0.4	5.5	遺構外	20
121	赤城村	三原田城	I f	滑石	2.4	1.1	0.8	3.8	7号住居	22
122	赤堀町	五日午清水田	I f	葉ろう石				4.3		38
123	安中市	中野谷松原	II a	滑石					109号住居	72
124	下仁田町	下鎌田	II a	凝灰岩					122号住居	55
125	吉井町	神保植松	II a	滑石	2.0	2.3	0.4	2.4	遺構外	24
126	赤城村	三原田城	II b	滑石	3.1	1.6	0.7	4.4	25号土坑	22
127	昭和村	糸井宮前	III	滑石	3.3	3.8	6.0	8.0	116号住居	17
128	松井田町	新堀東源ヶ原	IV	滑石	3.5	0.8	0.7	3.4	グリッド	58

瓦状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	6.3	2.1	0.8	15.8	グリッド	58
2	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	6.7	1.8	0.7	16.6	グリッド	58
3	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	5.0	1.6	0.7	11.4	グリッド	58
4	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.5	1.4	0.5	3.7	グリッド	58
5	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.0	2.2	0.6	6.1	グリッド	58
6	松井田町	新堀東源ヶ原		蛇紋岩				6.6	618号土坑	58
7	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.2	1.4	0.6	6.7	グリッド	58
8	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.2	2.1	0.5	8.1	グリッド	58
9	北橋村	真壁諏訪		緑色片岩				11.5	J19号住居址	66
10	北橋村	真壁諏訪		滑石				21.1	土坑	66
11	安中市	中野谷松原		蛇紋岩						72
12	吉井町	神保植松		蛇紋岩	4.5	2.0	0.6	8.7	遺構外	24
13	榛名町	三ツ子沢中		蛇紋岩	12.6	3.8	0.8	62.0	75号土坑	68

刀状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	赤城村	三原田城		蛇紋岩	10.2	2.4	0.7	26.8	86号土坑	22

環状彫り

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	長野原町	坪井		葉ろう石					SI12	71
2	藤岡市	藤岡北山B		石製						48
3	安中市	中野谷松原		滑石					118号住居	72
4	富岡市	中高瀬観音山		滑石	1.7	3.0	0.3	3.0	P190	47

「の」字状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	富岡市	南蛇井増光寺		滑石	2.4	2.8	0.3	2.6	731号土坑	59
2	藤岡市	白石大御堂		蛇紋岩	4.3	3.7	2.5	5.0	上谷戸調査区	30

勾玉状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	妙義町	行沢大竹	II	滑石					遺構外	64
2	安中市	中野谷松原	II						78号住居	72
3	高崎市	柴附長坂	I	変質蛇紋岩	3.7	1.7	0.3	3.9	遺構外	67
4	大胡町	上大屋	I	滑石					グリッド	19
5	松井田町	新堀東源ヶ原	I	滑石	3.5	0.9	0.6	3.4	グリッド	58
6	松井田町	新堀東源ヶ原	I	滑石				5.5	68号住居	58
7	松井田町	新堀東源ヶ原	I	滑石	3.4	0.8	0.7	3.1	グリッド	58
8	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石				4.2	180号住居	58
9	妙義町	行沢大竹	II	滑石					遺構外	64
10	小野上村	藤田萩久保	III	滑石	2.6	1.7	0.6	4.2	217号土坑	43
11	前橋市	大道	III	安山岩					グリッド	31
12	前橋市	大道	III	安山岩					グリッド	31

棒状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	館林市	大袋1			2.0				グリッド	4
2	榛名町	白川傘松		葉ろう石	3.1	1.2	0.9	5.0	20号住居	54
3	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石				2.9	68号住居	58
4	赤穂町	五日牛清水田		葉ろう石	4.7			9.2		38
5	松井田町	新堀東源ヶ原		滑岩				2.0	826号土坑	58
6	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石				3.4	189号住居	58
7	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石				1.9	185号住居	58
8	下仁田町	下鎌田		緑色片岩					グリッド	55
9	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	5.7	0.8	0.9	6.9	グリッド	58
10	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	5.0	1.2	0.8	6.9	グリッド	58
11	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.9	1.0	0.8	5.4	グリッド	58
12	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.7	1.2	0.8	5.7	グリッド	58
13	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.3	1.1	0.6	4.4	グリッド	58
14	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.2	1.0	0.7	3.6	グリッド	58
15	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.8	0.9	0.6	3.9	グリッド	58
16	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.5	0.9	0.5	2.5	グリッド	58
17	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.2	0.6	0.4	0.9	グリッド	58
18	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.3	1.0	0.6	3.4	グリッド	58
19	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.3	1.1	0.6	3.3	グリッド	58
20	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.4	0.8	0.5	2.6	グリッド	58
21	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.5	0.7	0.5	2.1	グリッド	58
22	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.9	0.9	0.6	2.2	グリッド	58
23	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.8	0.8	0.6	2.0	グリッド	58
24	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.3	1.0	0.5	2.2	グリッド	58
25	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	1.9	0.8	0.4	1.0	グリッド	58
26	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.8	1.0	0.4	2.0	グリッド	58
27	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.6	1.0	0.8	3.1	グリッド	58
28	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.5	1.0	0.8	2.7	グリッド	58
29	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.6	0.8	0.4	1.6	グリッド	58
30	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.7	1.1	0.7	3.8	グリッド	58
31	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.8	1.1	0.7	4.4	グリッド	58
32	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.8	0.8	0.5	6.0	グリッド	58
33	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	4.8	0.9	0.6	4.1	グリッド	58
34	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.9	0.6	0.5	2.4	グリッド	58
35	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.2	0.8	0.5	2.3	グリッド	58
36	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.0	0.7	0.4	1.0	グリッド	58

方形状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.8	3.3	0.5	14.7	グリッド	58
2	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.9	1.7	0.7	5.8	グリッド	58
3	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.9	1.1	0.6	3.0	グリッド	58
4	昭和村	中棚		瑪瑙				6.0	グリッド	12
5	富岡市	中高瀬観音山		緑色片岩	4.3	2.0	0.4	6.0	P149	47
6	大胡町	上ノ山			7.3	5.7	1.9	42.0	グリッド	34
7	大胡町	上ノ山			7.1	5.2	1.8	28.0	グリッド	34
8	松井田町	行田梅木平		軽石	7.8	5.6	1.8	35.0	1号配石基群	56
9	松井田町	行田梅木平		軽石	7.1	4.6	1.5	21.6	177号土坑	56
10	大胡町	堀越西一丁田		軽石	3.0	3.6	1.1	3.7	遺構外	62
11	松井田町	五料野ヶ久保		軽石	(5.4)	5.0	0.9	20.0	グリッド	53
12	昭和村	糸井宮前		砂岩	4.9	5.4	0.7	30.0	遺構外	17
13	吉井町	神保植松		砂岩	5.9	3.4	0.6	16.3	遺構外	24
14	吾妻町	霧原		翡翠					J 2号住居	11
15	吉井町	神保植松		滑石	2.9	2.0	0.6	6.4	遺構外	24
16	吉井町	神保植松		砂岩	3.0	3.2	1.5	15.8	遺構外	24

楕円形状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.5	1.9	0.4	4.6	グリッド	58
2	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.1	2.0	0.4	4.8	グリッド	58
3	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.3	2.1	0.6	6.1	グリッド	58
4	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.1	0.9	0.3	1.1	グリッド	58
5	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.4	2.0	0.5	2.6	グリッド	58
6	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.0	1.2	0.3	1.1	グリッド	58
7	高崎市	乗附長坂		滑石	(3.8)	1.5	1.0	8.6	遺構外	67
8	下仁田町	下鎌田		堆積岩					グリッド	55
9	大胡町	稲荷窪B			4.4	3.4	0.9	23.4		61
10	松井田町	五料野ヶ久保		安山岩	4.0	2.3	0.9	12.2	グリッド	53
11	下仁田町	下鎌田		堆積岩					629号土坑	55
12	下仁田町	下鎌田		堆積岩					213号住居	55
13	下仁田町	下鎌田		緑色片岩					161号住居	55

円形状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	1.5	1.5	0.4	1.4	グリッド	58
2	吉井町	神保植松	II	滑石	1.8	2.5	0.9	4.7	遺構外	24
3	明和町	矢島	I	砂岩						49
4	吉井町	神保植松	II	滑石	1.8	1.9	0.9	5.2	26号住居	24
5	安中市	中野谷松原	III	牛伏砂岩					78号住居	72
6	吉井町	神保植松	III	砂岩	3.8	3.2	1.1	13.4	遺構外	24
7	北構村	中畦	III	滑石	1.8	1.8	0.5	3.0	6号住居	12
8	子持村	吹屋中原	III	珪質頁岩					包含層	63
9	吉井町	神保植松	III	滑石	5.3	6.1	1.8	64.5	遺構外	24
10	吉井町	神保植松	III	砂岩	3.5	2.0	0.8	5.3	28号住居	24
11	吉井町	神保植松	III	滑石	2.9	1.4	0.7	3.5	26号住居	24
12	吉井町	神保植松	III	蛇紋岩	2.6	1.9	0.4	1.8	26号住居	24
13	吉井町	神保植松	II	砂岩	4.3	4.4	0.9	23.5	35号住居	24
14	昭和村	中棚	II	凝灰岩				15.0	グリッド	12
15	吉井町	神保植松	II	砂岩	5.4	4.9	0.9	27.4	遺構外	24
16	吉井町	多比良天神原	II	牛伏砂岩						69

三角形状石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	3.7	2.3	0.4	6.1	グリッド	58
2	松井田町	新堀東源ヶ原		滑石	2.5	2.6	0.6	4.3	グリッド	58
3	吉井町	神保植松		砂岩	12.1	7.5	2.0	203.3	35号住居	24
4	吉井町	神保植松		泥質凝灰岩	5.7	4.0	1.4	31.7	遺構外	24
5	吉井町	神保植松		砂岩	5.4	7.2	1.1	35.9	遺構外	24
6	吉井町	神保植松		砂岩	4.0	4.2	1.0	17.2	遺構外	24
7	吉井町	神保植松		砂岩	4.3	4.5	0.7	12.0	遺構外	24

玉

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	赤城村	三原田城	I	滑石	2.2	1.4	1.4	8.3	2号住居	22
2	吉井町	神保植松	I	滑石	1.2			0.6	遺構外	24
3	吉井町	神保植松	I	葉ろう石	1.5			1.1	遺構外	24
4	吉井町	神保植松	I	葉ろう石	1.7			0.7	遺構外	24
5	北碓村	芝山	I	ろう石	3.1	1.9		15.0	JP19	37
6	沼田市	寺入	I						遺構外	18
7	赤城村	八幡林	I	黒色で硬質					4号住居	5
8	赤城村	八幡林	I	黒色で硬質					4号住居	5
9	北碓村	道訓前	I	滑石	2.1	1.0	0.5	2.5	遺構外	73
10	松井田町	行田梅木平	I	滑石	2.8	1.4	1.1	6.9	373号土坑	56
11	松井田町	行田梅木平	I						遺構外	56
12	松井田町	行田梅木平	I	滑石	1.8	1.1	0.4	0.5	遺構外	56
13	北碓村	真壁諏訪	I	滑石				9.4	110号土坑	66
14	北碓村	分郷八崎	I	滑石	1.7	1.0	0.3	1.0	8号住居	20
15	安中市	中野谷松原	I	蛇灰岩					J-80号住居	72
16	安中市	中野谷松原	I	蛇灰岩						72
17	安中市	中野谷松原	I	蛇紋岩						72
18	安中市	中野谷松原	I	蛇灰岩					J-83号住居	72
19	赤堀町	五日牛清水田	I	葉ろう石						38
20	赤城村	三原田	I	蛇紋岩	(2.1)	1.2	(1.2)	(3.5)	2-9号住居	33
21	松井田町	新堀東源ヶ原	I	滑石	3.6	1.5	0.9	7.6	グリッド	58
22	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	3.0	3.1	1.9	27.8	グリッド	58
23	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	3.0	3.0	1.9	25.8	グリッド	58
24	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.4	2.5	1.8	15.1	グリッド	58
25	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.9	2.0	1.7	16.3	グリッド	58
26	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.5	1.8	1.6	10.6	グリッド	58
27	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.6	1.8	1.5	9.7	グリッド	58
28	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.5	1.8	1.5	9.9	グリッド	58
29	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.2	1.7	1.6	9.1	グリッド	58
30	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	2.2	1.2	1.3	5.2	グリッド	58
31	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	1.4	1.6	1.3	4.7	グリッド	58
32	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	1.7	1.2	1.2	3.9	グリッド	58
33	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	1.6	1.2	1.1	2.9	グリッド	58
34	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	1.6	1.5	1.4	3.4	グリッド	58
35	安中市	中野谷松原	II	翡翠					J-7号住居	72
36	赤城村	見立瀧井	II		1.4	1.0		2.4	グリッド	14
37	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石				10.7	902号土坑	58
38	赤城村	三原田城	II	滑石	1.3		0.8	1.3	70号土坑	22
39	子持村	吹屋中原	II	滑石					包含層	63
40	前橋市	鳥取福蔵寺	II	滑石	(1.9)	1.6	0.4	(2.4)	J-1号住居址	60
41	子持村	吹屋中原	II	翡翠					包含層	63
42	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石				7.5	178号住居	58
43	月夜野町	深沢	II	滑石	1.1	1.0	0.9	0.7	C区20号配石	26
44	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	3.4	2.3	1.6	15.2	グリッド	58

番号	市町村名	遺跡名	分類	石	材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
45	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		3.1	2.5	1.1	9.8	グリッド	58
46	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.2	1.9	0.7	5.3	グリッド	58
47	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.7	1.8	0.9	6.8	グリッド	58
48	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.5	1.7	1.1	5.3	グリッド	58
49	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.5	1.8	0.9	4.4	グリッド	58
50	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.4	1.8	1.0	5.0	グリッド	58
51	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.1	1.5	0.6	2.6	グリッド	58
52	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.1	1.7	0.8	3.3	グリッド	58
53	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.2	1.6	0.9	3.1	グリッド	58
54	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.1	1.7	0.8	4.4	グリッド	58
55	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.2	1.4	0.8	2.3	グリッド	58
56	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.8	1.3	0.7	2.0	グリッド	58
57	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.8	1.5	0.7	2.1	グリッド	58
58	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.1	1.1	0.4	1.2	グリッド	58
59	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.8	1.2	0.5	2.0	グリッド	58
60	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.3	1.4	0.6	1.3	グリッド	58
61	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.4	1.4	0.8	1.8	グリッド	58
62	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.5	1.1	0.6	1.0	グリッド	58
63	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		0.9	1.0	0.5	0.5	グリッド	58
64	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		3.8	1.4	1.1	12.1	グリッド	58
65	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		5.9	2.1	1.3	24.4	グリッド	58
66	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		4.5	2.0	1.5	19.2	グリッド	58
67	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.3	1.5	1.0	6.0	グリッド	58
68	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.0	1.4	0.6	3.1	グリッド	58
69	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		3.4	2.2	1.6	20.1	グリッド	58
70	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.8	1.8	1.5	12.1	グリッド	58
71	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.2	1.5	1.1	5.7	グリッド	58
72	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		3.2	2.1	1.0	10.4	グリッド	58
73	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.6	1.5	0.8	5.4	グリッド	58
74	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.7	1.3	0.9	3.2	グリッド	58
75	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		3.7	2.1	1.0	11.2	グリッド	58
76	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		3.0	1.7	1.3	11.7	グリッド	58
77	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		2.3	1.8	1.2	8.6	グリッド	58
78	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.5	2.2	1.0	5.8	グリッド	58
79	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.4	1.5	0.7	2.1	グリッド	58
80	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石		1.6	1.3	1.1	3.5	グリッド	58
81	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石					7.6	180号住居	58
82	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石					2.1	180号住居	58
83	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石					7.8	123号土坑	58
84	赤城村	見立瀧井	III			1.9	1.7		3.5	グリッド	14
85	月夜野町	深沢	III	玉ずい		0.9	0.9	0.6	0.6	C区20号配石	26
86	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.8	0.8	0.6	0.6	C区20号配石	26
87	月夜野町	深沢	III	変質蛇紋岩		0.8	0.6	0.4	0.2	C区20号配石	26
88	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.8	0.8	0.6	0.3	C区20号配石	26
89	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.7	0.7	0.4	0.3	C区20号配石	26
90	月夜野町	深沢	III	玉ずい		0.7	0.6	0.3	0.2	C区20号配石	26
91	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.7	0.6	0.4	0.3	C区20号配石	26
92	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.7	0.7	0.4	0.2	C区20号配石	26
93	月夜野町	深沢	III	変質蛇紋岩		0.6	0.6	0.4	0.3	C区20号配石	26
94	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.6	0.6	0.4	0.2	C区20号配石	26
95	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.7	0.6	0.4	0.3	C区20号配石	26
96	月夜野町	深沢	III	緑色珪質岩		0.6	0.3	0.4	0.1	C区20号配石	26
97	月夜野町	深沢	III	緑色珪質岩		0.8	0.5	0.3	0.2	C区20号配石	26
98	月夜野町	深沢	III	珪質変質岩		0.9	1.4	0.9	1.6	C区5号配石	26
99	月夜野町	深沢	III	緑色珪質岩		1.1	1.4	0.4	0.8	C区9号配石	26
100	月夜野町	深沢	III	緑色珪質岩		1.1	1.0	0.9	1.6	C区27号配石	26
101	吉井町	神保瀬松	III	滑石		1.3	1.3	0.6	1.3	遺構外	24
102	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.7	0.7	0.4	0.2	C区20号配石	26
103	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.7	0.7	0.4	0.2	C区20号配石	26
104	月夜野町	深沢	III	翡翠		0.6	0.6	0.4	0.1	C区20号配石	26

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
105	吉井町	神保植松	Ⅲ	滑石	2.2	2.2	1.2	9.1	遺構外	24
106	吉井町	神保植松	Ⅲ	泥岩	2.0	2.2	0.7	3.9	遺構外	24
107	渋川市	半田南原	Ⅲ	滑石	2.2		0.5			44
108	月夜野町	深沢	Ⅲ	緑色珪質岩	1.1	1.0	0.5	0.5	C区20号配石	26
109	松井田町	行田梅木平	Ⅲ	滑石	1.2	1.4	0.6	1.2	285号土坑	56
110	松井田町	行田梅木平	Ⅲ	滑石	1.1	1.3	0.6	1.0	449号土坑	56
111	明和町	矢鳥	Ⅲ							49
112	富岡市	粕戸原 I	Ⅲ	滑石				2.6	48号土坑	35
113	水上町	小仁田	Ⅲ	瑪瑙					3号住居址	15
114	北橋村	分郷八崎	Ⅲ	蛇紋岩	1.0	1.0	0.4	0.6	遺構外	20
115	松井田町	新堀東源ヶ原	Ⅲ	滑石	1.0	1.2	0.5	1.0	グリッド	58
116	北橋村	分郷八崎	Ⅲ	滑石	1.7	1.7	0.8	3.0	遺構外	20
117	赤堀町	五日牛清水田	Ⅲ						4号住居	38

大珠

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	富岡市	南蛇井増光寺	I a	翡翠	10.6	3.4	2.0	146.9	C 5号住居	25
2	太田市	小町田	I a	翡翠珪質岩	11.6	3.8	2.4	158.0		13
3	赤城村	三原田	I a	翡翠珪質岩	(7.9)	4.3	3.2	(142.6)	3-1号住居	33
4	赤城村	三原田	I d	翡翠珪質岩	6.3	2.9	2.7	65.6	7-13号住居	33
5	宮城村	鼻毛石中山	I d	翡翠	6.9	3.3	2.2	65.6		51
6	権名町	白川奉松	I d	翡翠	7.0	3.3	2.4	110.0	55号土坑	54
7	子持村	吹屋大子塚	Ⅱ a	緑色片岩	(4.0)	1.8	0.5	(6.0)	包含層	63
8	安中市	中野谷松原	Ⅱ b	蛇紋岩						72
9	松井田町	八城二本杉東	Ⅱ c	滑石	5.7	2.3	1.2	27.7	6号住居跡	57
10	吉井町	多胡蛇風	Ⅱ c	翡翠	7.3	4.7	1.2	64.0	170号住居	36
11	下仁田町	下鎌田	Ⅱ c	蛇紋岩					147号住居	55
12	吉井町	神保植松	Ⅱ c	砂岩	5.8	3.9	1.6	35.0	遺構外	24
13	吉井町	神保植松	Ⅱ c	砂岩	4.6	4.9	1.0	27.3	遺構外	24
14	吉井町	神保植松	Ⅱ c	砂岩	5.2	6.0	0.8	28.8	遺構外	24
15	松井田町	五料野ヶ久保	Ⅱ d	軽石	12.3	5.2	1.7	60.0	1号敷石	53
16	安中市	中野谷松原	Ⅱ d	蛇紋岩						72
17	下仁田町	下鎌田	Ⅱ d	砂岩					199号住居	55
18	吉井町	神保植松	Ⅱ d	砂岩	7.7	6.3	1.6	80.6	遺構外	24
19	藤岡市	上栗須寺前	Ⅱ d	砂岩	8.0	5.5		80.0	P111	7
20	吉井町	神保植松	Ⅱ d	砂岩	6.4	4.2	0.9	31.5	26号住居	24
21	沼田市	寺入	Ⅱ d						遺構外	18
22	下仁田町	下鎌田	Ⅱ d	緑色片岩					グリッド	55
23	安中市	大下原	Ⅱ d	軽石					遺構外	39
24	沼田市	寺入	Ⅱ e		5.0				7号住居址	18
25	吾妻町	郷原	Ⅱ e	軽石(軟質)					J-2号住居址	11
26	松井田町	五料野ヶ久保	Ⅱ e	軽石	6.7	4.5	1.7	20.0	グリッド	53
27	大胡町	上ノ山	Ⅱ e		6.6	5.8	1.3	18.0	表土	34
28	長野原町	坪井	Ⅱ e	葉ろう石	3.0	2.4	1.1	12.3	SI05	71
29	長野原町	坪井	Ⅱ e	葉ろう石	3.5	2.3	2.6	20.6	SI10	71
30	群馬町	上野園分僧寺中間	Ⅱ e						A区309号土坑	23

その他の石製品

番号	市町村名	遺跡名	分類	石 材	縦	横	厚さ	重量	出土位置	文献
1	安中市	中野谷松原	I	滑石					1045号土坑墓	72
2	安中市	中野谷松原	I	蛇紋岩						72
3	月夜野町	深沢	I	変質凝灰岩	3.4	2.2	1.0	6.6	C区11号配石	26
4	高崎市	下佐野	I	砂岩	6.8	5.6	0.9	33.5	I地区A区58号住居	28
5	吉井町	多比良天神原	I							69
6	吉井町	神保植松	I	砂岩	3.7	4.3	1.2	21.9	遺構外	24
7	富岡市	中高瀬観音山	I	流紋岩	4.7	2.6	1.0	10.0	P148	47
8	下仁田町	下鎌田	I	滑石					遺構外	55
9	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	8.2	3.3	1.1	47.1	グリッド	58
10	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	6.7	3.8	1.7	50.9	グリッド	58
11	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	3.9	3.4	1.1	24.3	グリッド	58
12	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	4.7	2.8	0.7	15.8	グリッド	58
13	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	4.6	2.9	1.2	19.3	グリッド	58
14	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	6.3	1.6	1.2	16.6	グリッド	58
15	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	4.9	1.6	1.2	17.1	グリッド	58
16	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	3.0	2.5	0.9	7.3	グリッド	58
17	松井田町	新堀東源ヶ原	II	滑石	3.5	1.0	0.6	4.4	グリッド	58

出土遺跡報告書(文献)一覧

文献番号	発行年	書名	発行所
1	1981	大原道東遺跡発掘調査報告書	館林市教育委員会
2	1981	天竺南遺跡	新里村教育委員会
3	1982	十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
4	1982	大袋I遺跡発掘調査報告書	館林市教育委員会
5	1982	八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報	赤堀村教育委員会
6	1983	神保富士塚遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
7	1985	上栗須寺前遺跡群II	群馬県埋蔵文化財調査事業団
8	1985	荒砥前原遺跡・赤石城址	群馬県埋蔵文化財調査事業団
9	1985	清水山遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
10	1985	入野遺跡	吉井町教育委員会
11	1985	郷原遺跡	吾妻町教育委員会
12	1985	中樞遺跡	昭和村教育委員会
13	1985	太田東部遺跡群	群馬県埋蔵文化財調査事業団
14	1985	見立瀧井遺跡・見立大久保遺跡	赤城村教育委員会
15	1985	北貝戸遺跡・川上遺跡・小仁田遺跡	水上町遺跡調査会
16	1986	中畦遺跡・諏訪西遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
17	1986	糸井宮前遺跡II	群馬県埋蔵文化財調査事業団
18	1986	寺入遺跡	沼田市埋蔵文化財発掘調査団
19	1986	上大原・榎越地区遺跡群	大胡町教育委員会
20	1986	分郷八崎遺跡	北橋村教育委員会
21	1986	三峰神社裏遺跡・大友館遺跡	月夜野町教育委員会
22	1987	三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上青栗子古墳	群馬県埋蔵文化財調査事業団
23	1987	上野国分僧寺・尼寺中間地域	群馬県埋蔵文化財調査事業団
24	1987	神保榎松遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
25	1987	南蛇井増光寺遺跡V	群馬県埋蔵文化財調査事業団
26	1988	深沢遺跡・前田原遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
27	1988	勝保沢中ノ山遺跡I	群馬県埋蔵文化財調査事業団
28	1989	下佐野遺跡II地区(2)	群馬県埋蔵文化財調査事業団
29	1990	芳賀東部団地遺跡III	前橋市教育委員会
30	1991	白石大御堂遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
31	1991	横伏遺跡群II	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
32	1992	荒砥北三木堂遺跡II	群馬県埋蔵文化財調査事業団
33	1992	三原田遺跡第3巻	群馬県企業局
34	1992	上野山遺跡・中川原遺跡群	大胡町教育委員会
35	1992	粕戸原I、粕戸原II、西平原、野上地区遺跡群発掘調査報告書	富岡市教育委員会
36	1993	多胡蛇黒遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
37	1993	芝山遺跡	北橋村教育委員会
38	1993	五日牛清水水田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
39	1993	大下原遺跡・吉田原遺跡	安中市教育委員会
40	1994	白倉下原・天引向原遺跡II	群馬県埋蔵文化財調査事業団
41	1994	小島田八日市遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
42	1994	西小路遺跡	大胡町教育委員会
43	1994	藤田疾久保遺跡発掘調査報告書	小野上村教育委員会
44	1994	半田南原遺跡	渋川市教育委員会
45	1994	富士見地区遺跡群、愛宕山遺跡、初室古墳、愛宕遺跡、日向遺跡	富士見村教育委員会
46	1994	E14保美地区遺跡群	藤岡市教育委員会
47	1995	中高瀬観音山遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
48	1995	藤岡北山B遺跡	藤岡市教育委員会
49	1995	矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書	明和町教育委員会
50	1996	曾木森裏遺跡	富岡市教育委員会
51	1996	鼻毛石中山遺跡	宮城村教育委員会
52	1997	大胡西北部遺跡群堀越中道遺跡	大胡町教育委員会
53	1997	五科平遺跡・五科野ヶ久保遺跡・五科稲荷谷戸遺跡	松井田町遺跡調査会
54	1997	白川傘松遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
55	1997	下鎌田遺跡	下仁田町遺跡調査会
56	1997	行田梅木平遺跡	松井田町遺跡調査会
57	1997	八城二本杉東遺跡・行田大道北遺跡	松井田町遺跡調査会

文献番号	発行年	書名	発行所
58	1997	新堀東源ヶ原遺跡	松井田町遺跡調査会
59	1998	南蛇井増光寺遺跡VI	群馬県埋蔵文化財調査事業団
60	1998	鳥取福蔵寺	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
61	1998	茂木遺跡群稲荷窪B地点遺跡	大胡町教育委員会
62	1998	大胡西北部遺跡群堀越西一丁田遺跡・堀越乙関替戸遺跡	大胡町教育委員会
63	1998	白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
64	1999	八十運西久保遺跡・行沢大竹遺跡・行沢竹松遺跡・諸戸スサキ遺跡	妙義町教育委員会
65	1999	矢島遺跡東地区発掘調査報告書	明和町教育委員会
66	1999	箱田遺跡群(上原・三角遺跡)、真壁諏訪遺跡	北橋村教育委員会
67	2000	乗附長坂遺跡・乗附中原遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
68	2000	三ッ子沢中遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
69	2000	多比良天神原遺跡発掘調査報告書	吉井町教育委員会
70	2000	白川笹塚・白岩浦久保・白岩民部遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団
71	2000	坪井遺跡II	長野原町教育委員会
72	2000	中野谷松原遺跡	安中市教育委員会
73	2001	道訓前遺跡	北橋村教育委員会

聖嶽洞窟表面採集人骨

横 崎 修一郎

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 1985年4月5日採集人骨 |
| 2. 1983年3月採集人骨 | 5. 1999年発見人骨との比較 |
| 3. 1984年4月採集人骨 | 6. おわりに |

— 要 旨 —

聖嶽洞窟は、大分県南海部郡本匠村大字津々に位置する石灰質土洞である。1962年には、賀川光夫と小片 保を中心として発掘調査が行われ、旧石器と人骨が発見された。第1層の黒色土層からは、中世に属する幼児骨より老年骨に至るまで数体を越える人骨群が発見された。さらに、第III層の粘土層からは、左右頭頂骨を含む後頭骨と前頭骨の2点が発見された。田辺義一によるフッ素分析により、第1層出土人骨は0.2%であるのに対し、第III層出土人骨は、0.55%と0.56%とフッ素含有量が多いことから2層の間に大きな年代差があると考えられた。左右頭頂骨を含む後頭骨は、骨の厚さが厚く、この骨を壮年又は熟年女性と推定しながらも中国の周口店出土土洞人（山頂洞人）No101男性老人頭蓋との類似を指摘した。その後、1983年には鈴木忠司・山下秀樹・綿貫俊一等により、洞内において人骨の表面採集が行われ、人骨数点が採集された。その中でも、左距骨は化石化の程度が高く、松浦秀治によるフッ素分析では0.95%という高い含有量を示し、旧石器時代人骨の可能性が示された。1999年には、横 崎 昌信・春成秀爾・小田静夫等により同洞窟の再発掘調査が行われ、旧石器2点と人骨143点が発見された。この調査に人類学班班長として参加した筆者は、副班長の藤田 尚と共に人骨の記載を行い、化石化の程度が高い人骨は無く、4歳の子供1体・約50歳の成人男性1体・約40歳の成人女性2体の合計4体が出土していることを報告した。また、人骨のフッ素分析及び放射性炭素年代測定を行った松浦秀治等は、フッ素分析では0.056%～0.857%というばらつきを示し、年代測定ではAD1,305～AD1,480という結果を示し、少なくとも中世と縄文時代に由来する可能性を示した。河村善也等による獣骨の記載では、完新世に属する可能性が示された。

1983年表面採集人骨は、鈴木忠司・山下秀樹・綿貫俊一等により行われ、全部で8点ある。この内、7点は、遊離歯2点・下顎骨1点・小児脊椎骨1点・長骨片2点・左距骨1点である。1点は種同定には至らなかったが獣骨であることが判明した。左距骨は、すでに形態記載が報告されており、縄文時代に由来する可能性が示されている。化石化の程度は、左距骨が高く、次に獣骨であり、その他の骨は低かった。1984年表面採集人骨は、安井金也により行われ、全部で10点ある。この内訳は、右頰骨1点・右側頭骨岩様部1点・後頭骨片1点・第1頸椎1点・第7胸椎椎体1点・小児脊椎骨椎弓1点・小児脊椎骨椎体1点・小児左尺骨片1点・右第5中足骨1点・右第5基節骨1点である。化石化の程度は、どれも低い。1985年表面採集人骨は、和田 洋・北川賢一により行われ、全部で8点ある。この内訳は、頭骨片2点・左尺骨片1点・右有頭骨1点・四肢骨片1点・寛骨片1点・左第2中足骨の頭1点・右外側楔状骨1点である。化石化の程度は、どれも低い。

1999年発掘人骨と比較すると、未成人のものは約4歳のもので、その他は、成人男性と成人女性のものであり、1999年発掘人骨で推定された未成人1体・成人男性1体・成人女性2体のものと推定される。しかしながら、1983年採集の左距骨は化石化の程度も高く、フッ素含有量も多いため、聖嶽洞窟には、縄文時代のものと中近世の人骨群との2群が埋葬あるいは放置されていたと推定される。

キーワード

対象時代 旧石器時代～中近世
対象地域 日本国、大分県
研究対象 人骨、人類学

1. はじめに

聖嶽洞窟は、大分県南海部郡本匠村大字津々に位置する石灰鍾乳洞である(賀川、1962・1967ab・1971・1983)。本洞窟は、発掘調査が1962年と1999年に行われ、いずれも人骨及び石器が発見されている(賀川、1962・1967ab・1971・1983; 小片、1967・1981; 春成、2001a)。その他に、1983年に表面採集で人骨が収集されていたことが知られていたが(MATSUURA, 1984; 北川他、2001)、それ以外にも1984年と1985年に表面採集で人骨が収集されており未報告であることが判明したので以下に記載する。まず、本洞窟の調査経過について以下に記した。なお、2001年の報告書出版後、石器については論争が起きている(栗田、2001; 春成、2001b)が、本稿ではその問題については触れないこととする。

(1) 1962年の発掘調査

本洞窟は、1961年9月13日に洞内にて人骨が発見されたことから、1962年10月8日から15日までに日本考古学協会の日本洞穴遺跡調査特別委員会により賀川光夫(当時、別府大学)と小片保(当時、新潟大学)を中心として発掘調査が実施された。その際、洞内の層位は第I層(黒色土層)・第II層(粘質軟砂層)・第III層(粘土層)の3層に分けられ、この内、第I層・第II層と第III層の境界部・第III層から人骨が出土した(賀川、1967; 小片、1967)。第I層からは、幼児骨より老年骨にいたるまで数体の中世人骨が出土したが発見点数は報告されていない(小片、1967)。この人骨群の形態は、距骨のみ記載され、後は未記載である(森本、1969)。また、第II層と第III層境界部からは右距骨1点・腰椎1点・骨器と思われる右脛骨1点及び右腓骨1点の4点が発見されたが、詳細な記載はなされていない。そして、第III層出土として、左右頭頂骨を含む後頭骨1点[以下、頭蓋後頭部]と前頭骨破片1点の2点が旧石器時代人骨として報告された(小片、1967・1981)。小片は、その頭蓋後頭部の厚さや側面輪廓に着目し、壮年又は熟年女性と推定しながら中国の北京郊外にある周口店の上洞人(山頂洞人) Na101男性老人頭蓋との類似に言及した(小片、1967・1981)。また、前頭骨破片も頭蓋後頭部と同一個体である可能性を示唆した。田辺義一(当時、東京大学)がフッ素分析を行った結果、第I層人骨が0.20%であるのに対し、第III層人骨が0.55%(前頭骨片)及び0.56%(頭蓋後頭部)であったので、2者の間に強い差異が認められたことが報告されている(小片、1967・1981)。

(2) 1983年の表面採集

1983年には、同洞窟を訪問した鈴木忠司と山下秀樹(当時、平安博物館)並びに舘貫俊一が左距骨1点を洞内に表面採集で発見し、池田次郎(当時、京都大学)がその化石化の程度が高いことに注目し、松浦秀治(当時、国立科学博物館)がフッ素分析を行って、0.634%という

結果を得て、補正して0.95%という結果を出した(MATSUURA, 1984)。また、その形態記載も行われ、縄文時代に由来する可能性が示された(北川他、2001)。

(3) 1998年の馬場悠男の見解

1994年11月26日と27日に、考古学者及び人類学者を含めてシンポジウムが行われ、その記録が1998年に出版された(岡村他、1998)。この中で、国立科学博物館の馬場悠男は、1988年7月16日～同年8月31日まで国立科学博物館開館110周年記念として開催された企画展「日本人の起源展」で借用して展示した聖嶽洞窟人骨について見解を述べた。要約すると、石灰岩洞窟出土のものにまともな化石化していないこと、後頭部の湾曲は江戸時代人骨にも時々見られることの後である。東北歴史資料館で聖嶽洞窟人骨を借用して展示した、文化庁の岡村道雄も、同様に人骨が脆かったことを述べている。

(4) 1999年の再発掘調査

1999年には、文部省科学研究費特定領域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」(代表者、桃山学院大学の尾本恵市)の中で、考古学班(代表者、国立歴史民俗博物館の春成秀爾)内に「聖嶽洞窟発掘調査団」が組織され、別府大学の橋昌信(団長)・国立歴史民俗博物館の春成秀爾(副団長)・東京都の小田勝夫(副団長)等による再発掘調査が行われた。筆者は、この調査に人類学班班長として参加(当時、群馬県立自然史博物館)し、発掘調査で発見された人骨96点及び歯47点の合計143点と本匠村歴史民俗資料館が所蔵し1961年の予備調査で出土したとされた人骨9点について報告した(橋崎・藤田、2001)。同報告では、4歳の子供1体・約50歳の成人男性1体・40歳代の成人女性2体の合計4体が出土していると推定したが、確かに旧石器時代人であると思われる人骨は1点も認められなかったと結論づけた。なお、これらの人骨12点と歯13点のフッ素分析では、人骨が0.166%～0.691%・歯が0.056%～0.857%とばらつきを示し、人骨3点と歯1点の放射性炭素14年代測定では、AD1,305～AD1480という結果が示され、フッ素分析の結果からは少なくとも中世と縄文時代の2時代に由来する可能性が示された(松浦・近藤、2001)。また、木炭8点の放射性炭素14年代測定では、7点が17世紀～20世紀という新しい年代を示した(今村・春成、2001)。第II層～第III層の漸移層出土の1点は、BP8,530～BP8,285という古い年代を示した(津村、2001)。

国立科学博物館の馬場悠男による形態の再検討により、山頂洞人及び滄川人[沖繩県]との類似は否定され、頭蓋後頭部の厚さは江戸時代人骨に同様なものがあるとし、その厚さはマリアリアによる可能性が示され(馬場、2001a)、その後の出版物でも更新世人骨である可能性を否定した(馬場、2001b)。さらに、国立科学博物館にて、2001年9月18日～同年11月11日まで開催された企画展

「日本人はるかな旅展」では、疑問化石人骨の中に聖嶽洞窟人骨を入れて展示を行った(馬場, 2001d)。

この後頭部の厚さの問題は、筆者の経験では、ページェット病に罹患した人骨にこの骨の肥厚が見られる。このページェット病は、1877年にジェームズ・ページェット [James PAGET] により報告され、報告者の名前が病名につけられたものであるが、発症の原因は不明である。しかし、現代人の疫学調査ではイギリスに多く発症例が見られ、他のヨーロッパ諸国には少ないことから太陽光の少なさに原因を求める指摘もある(POLEDNAK, 1989)。発症例は、主に40歳〜50歳の成人男性に見られ、骨が肥厚する部位としては、頭蓋骨・鎖骨・胸骨・肋骨・脊椎骨・上腕骨・寛骨・仙骨・大腿骨・脛骨が上げられている(GESCHICKTER & COPELAND, 1931; JANSSENS, 1970; ORTNER & PUTSCHAR, 1985; STEINBOCK, 1976; ZIMMERMAN & KELLEY, 1982; ZIVANOVIC, 1982; WEINMANN & SICHER, 1947)。この病気は、X線像及び骨の組織検査で確認することができるので、将来的にこの頭蓋後頭部の検査が行われることが望まれる。

(5) 1983年・1984年・1985年表面採集人骨

本稿で報告する人骨は、1983年3月・1984年4月・1985年4月に同洞窟内部にて表面採集により収集されたものである。人骨は、一括して、京都文化博物館の鈴木忠司が管理している。これらの人骨は、「第15回国民文化祭・ぐんま2001」の関連行事として2001年9月29日〜同年11月18日にかけて、笠原野岩宿文化資料館にて開催された第33回企画展「日本人のルーツを探る」において本邦初公開として一部展示が行われた(笠原野岩宿文化資料館編, 2001)。なお、筆者は、この展示の監修及び指導を行ったが、借用に際して、標本管理者の鈴木忠司よりこれら表面採集人骨の記載を依頼されたので、以下に報告する。なお、本表面採集人骨の記載は、1983年3月に採集された人骨群の左距骨のみにて報告されており、その他の人骨は未報告である(北川・安井・池田, 2001)。

人骨の計測は、マルティン[MARTIN]の計測法にしたがった(BRAUER, 馬場, 1991)。また、歯の計測は、藤田の計測法にしたがった(藤田, 1949b)。今回報告する人骨及び歯は、出土時の状態を保つために、水洗や清掃を行わずに形態観察及び計測を行った。但し、計測に支障があるほどの状態ではない。なお、これら標本群には採集者により地点名の番号がつけられているが、同一地点での採集には同じ番号がつけられているため、便宜的に洞窟入口から奥にかけて番号をつけた。その方法は、HC [Hijiridaki 奥: 聖嶽洞穴]—採集年 SC [Surface Collection: 表面採集]—番号とした。



図1. 表面採集人骨の採集位置

[区名は、1999年発掘時のもの。()内は、採集者設定名]

表1. 聖嶽洞窟表面採集人骨のリスト

表1. 1983年3月表面採集 (採集者: 鈴木忠司・山下秀樹・綿貫俊一)				
No.	同定部位	番号	採集場所	報告書(2001)の場所
1	上腕骨第2小指骨	HC-1983SC-1	第2地点	第10区
2	小指骨(第2小指骨)	HC-1983SC-2	第2地点	第10区
3	小指骨(第2小指骨)	HC-1983SC-3	第2地点	第10区
4	上腕骨第1小指骨	HC-1983SC-4	第2地点	第10区
5	尺骨	HC-1983SC-5	第3地点	第5区
6	尺骨	HC-1983SC-6	第3地点	第5区
7	尺骨	HC-1983SC-7	第3地点	第5区
8	尺骨	HC-1983SC-8	第3地点	第5区
9	尺骨	HC-1983SC-9	第4地点	第3区
10	尺骨	HC-1983SC-10	第4地点	第3区
11	尺骨	HC-1983SC-11	第4地点	第3区
12	尺骨	HC-1983SC-12	第4地点	第3区
13	尺骨	HC-1983SC-13	第4地点	第3区
表2. 1984年4月表面採集 (採集者: 北川・安井・池田)				
No.	同定部位	番号	採集場所	報告書(2001)の場所
1	第1頰骨	HC-1984SC-1	第5地点	第8区
2	第2頰骨	HC-1984SC-2	第5地点	第8区
3	右側頰骨	HC-1984SC-3	第5地点	第8区
4	小児尺骨	HC-1984SC-4	第6地点	第8区
5	第7胸骨	HC-1984SC-5	第6地点	第8区
6	右側5中腕骨	HC-1984SC-6	第6地点	第8区
7	腕骨	HC-1984SC-7	第7地点	第5区
8	小児脛骨骨端	HC-1984SC-8	第7地点	第5区
9	小児脛骨骨端	HC-1984SC-9	第7地点	第5区
10	右第5掌骨	HC-1984SC-10	第7地点	第5区
表3. 1985年4月表面採集 (採集者: 北川・安井・池田)				
No.	同定部位	番号	採集場所	報告書(2001)の場所
1	第1頰骨	HC-1985SC-1	第8地点	第13区
2	第2頰骨	HC-1985SC-2	第8地点	第13区
3	右側頰骨	HC-1985SC-3	第8地点	第13区
4	腕骨	HC-1985SC-4	第8地点	第13区
5	腕骨	HC-1985SC-5	第8地点	第13区
6	中腕骨	HC-1985SC-6	第8地点	第13区
7	腕骨	HC-1985SC-7	第8地点	第13区
8	右側腕骨	HC-1985SC-8	第8地点	第13区

2. 1983年3月採集人骨

[8区: HC—1983SC—1〜HC—1983SC—8]

この表面採集は、当時、平安博物館の鈴木忠司・山下秀樹(現京都文化博物館)・綿貫俊一(現大分県文化課)により採集が行われた。全部で、8区、採集されている。この内、第2地点[1999年発掘地点での第10区]で2点・第3地点[1999年発掘地点での第9区]で5点・第4地点[1999年発掘地点での第5区近辺]で1点が採集されている。以下に、採集人骨の形態を記載する。なお、人骨の形態記載は、左距骨[HC-1983SC-5]のみにて報告されている(北川・安井・池田, 2001)。

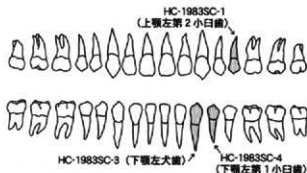


図2. 1983年表面採集歯の出土部位

- ① 上顎左第2小白歯(P2)【HC-1983SC-1】(図2・写真1・表2参照)

[採集者記載: 第2地点, 1999年の発掘地点: 第10区]

上顎左第2小白歯の遊離歯である。歯冠部から歯根部まで残存している。歯根は単根である。この上顎小白歯には、歯石が付着していた痕跡が認められた。しかし、現状ではわずかにその痕跡を留めている。歯冠計測値より性別は、女性であると推定される。但し、全長や歯根長、特に歯根長が現代人と比較しても長い。咬耗の状態は、舌側咬頭の咬耗が激しく、象牙質が点状に露出している。咬耗度より、死亡年齢は、約40歳代と推定される。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。

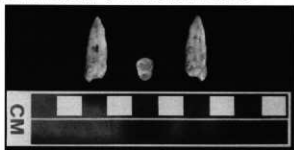


写真1. HC-1983SC-1 (上顎左第2小白歯)

[左から、近心面観・咬合面観・遠心面観]

表2. HC-1983SC-1 (上顎第2小白歯)の計測値

計測項目	本資料	上顎現代人*				下顎現代人*				現代日本人**			
		♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
歯冠断面直径	6.8mm	7.15mm	6.93mm	6.87mm	6.69mm	7.00mm	6.82mm	7.82mm	6.91mm				
歯冠断面径	9.1mm	9.60mm	9.36mm	9.30mm	8.80mm	9.50mm	9.25mm	9.41mm	9.22mm				
全長	26.0mm	---	---	---	---	---	---	21.01mm	19.80mm				
歯根長	6.5mm	---	---	---	---	---	---	7.63mm	7.31mm				
歯根径	19.5mm	---	---	---	---	---	---	13.26mm	12.34mm				

注1: *は、MATSUMURA (1966)より引用【平均値】

注2: **は、藤田(1959)より引用【平均値】

- ② 脊椎骨椎体(小児)【HC-1983SC-2】(写真2・表3参照)

[採集者記載: 第2地点, 1999年の発掘地点: 第10区]
小児脊椎骨椎体である。胸椎と推定される。骨化及び椎弓との癒合は完了していない。性別は小児であるので不明である。脊椎骨の場合、一般的に椎体と椎弓が癒合するのは約3歳~6歳であるが、胸椎の場合は約4歳~5歳であるので死亡年齢も同様に約4歳~5歳と推定される。化石化の程度は低い。重量は、約3gである。

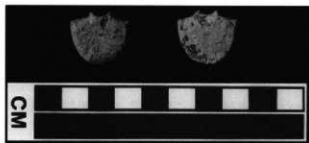
写真2. HC-1983SC-2 (小児脊椎骨椎体)
[左から、上面観・下面観]

表3. HC-1983SC-2 (小児脊椎骨椎体)計測値

計測項目 (MARTIN No.)	計測値
1 椎体断面直径	10.5mm
2 椎体背側断面直径	11.0mm
3 椎体中央断面直径	11.0mm
4 椎体前側断面直径	17.0mm
5 椎体後側断面直径	17.0mm
6 椎体中央矢状径	17.5mm
7 椎体前側断面径	20.0mm
8 椎体後側断面径	21.0mm
9 椎体中央断面径	20.0mm
2 : 1 椎体前直前矢数	104.8
3 : 6 椎体矢状直前矢数	62.9
1 : 9 椎体断面直前矢数	52.5
6 : 9 椎体断面矢数	87.5

- ③ 下顎骨と左犬歯(C)【HC-1983SC-3】(図2と3・写真3・表4参照)

[採集者記載: 第3地点, 1999年の発掘地点: 第9区]

下顎骨の右犬歯~左犬歯までの歯槽部と左犬歯である。但し、頤部は欠けている。右犬歯・右第2切歯・右第1切歯・左第1切歯・左第2切歯部の歯槽は開放している。したがって、右犬歯~左第2切歯の5本は生前脱落ではなく死後脱落である。左犬歯は、植立している。この犬歯には、歯石が付着していた痕跡が認められた。しかし、現状では、ほとんどの歯石は脱落している。歯の歯冠計測値より、性別は男性であると推定される。また、下顎左犬歯の咬耗度は、点状に象牙質がみえるもので、死亡年齢は約30歳代と推定される。エナメル質減形成は認められなかった。化石化の程度は低い。重量は、約4gである。

写真3. HC-1983SC-3 (下顎骨と左犬歯)
[左から、前面観・後面観]

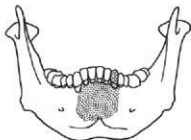


図3. HC-1983SC-3 (下顎骨と左犬歯) 残存図

表4. HC-1983SC-3 (下顎左犬歯) 歯冠計測値

計測項目	本資料	古墳時代人*		鎌倉時代人*		江戸時代人*		現代日本人**	
		♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
歯冠遠心径	7.2mm	7.25mm	6.85mm	6.55mm	7.05mm	6.60mm	7.67mm	7.67mm	6.55mm
歯冠唇径	7.5mm	8.17mm	7.53mm	7.82mm	7.33mm	8.04mm	7.38mm	8.14mm	7.55mm
全長	24.0mm	—	—	—	—	—	—	24.51mm	22.25mm
歯冠高	19.0mm	—	—	—	—	—	—	19.19mm	9.55mm
歯根長	14.0mm	—	—	—	—	—	—	14.11mm	13.25mm

注1: *は、MATSUMURA (1995) より引用 [平均値]

注2: **は、藤田 (1959) より引用 [平均値]

④ 下顎左第1小臼歯(P1) [HC-1983SC-4] (図2・写真4・表5参照)

[採集者記載: 第3地点、1999年の発掘地点: 第9区]

下顎左第1小臼歯の遊離歯である。歯冠部から歯根部まで残存している。歯石が付着していた痕跡が認められるが、現状では、遠心部にのみ残存している。歯冠計測値より、性別は女性であると推定される。咬耗度は、頰側咬頭が象牙質が点状に露出する程度である。

咬耗度より、死亡年齢は、約30歳代と推定される。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。HC-1983SC-3と同一地点で発見されていることから、同一個体かどうか問題となるが、歯槽骨遠心部が破損しており確かめることは困難である。しかしながら、歯槽骨近心面にあてはめると、うまく合致するようである。その場合、性別が異なるが、変異があるので、両方の歯を女性と考えると良いかもしれない。

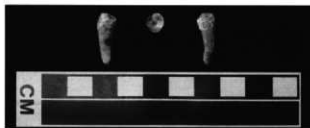


写真4. HC-1983SC-4 (下顎左第1小臼歯)

[左から、遠心面観・咬合面観・近心面観]

表5. HC-1983SC-4 (下顎左第1小臼歯) 歯冠計測値

計測項目	本資料	古墳時代人*		鎌倉時代人*		江戸時代人*		現代日本人**	
		♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
歯冠遠心径	7.2mm	7.41mm	7.32mm	7.67mm	6.96mm	7.32mm	7.65mm	7.31mm	7.19mm
歯冠唇径	7.4mm	8.52mm	8.01mm	8.16mm	7.72mm	8.14mm	7.89mm	8.96mm	7.77mm
全長	20.5mm	—	—	—	—	—	—	21.42mm	20.60mm
歯冠高	7.5mm	—	—	—	—	—	—	8.24mm	8.05mm
歯根長	13.0mm	—	—	—	—	—	—	13.61mm	12.40mm

注1: *は、MATSUMURA (1995) より引用 [平均値]

注2: **は、藤田 (1959) より引用 [平均値]

⑤ 左距骨 [HC-1983SC-5] (図4・写真5・表6参照)

[採集者記載: 第3地点、1999年の発掘地点: 第9区] 聖嶽洞窟の1983年表面採集人骨としては、この距骨のみ詳細な報告が、北川賢一・安井金也・池田次郎により報告されている(北川・安井・池田, 2001)。同報告によると、この距骨の化石化の程度は高く、重量は30.2gである。性別は男性であり、死亡年齢は記載されていないが、骨化完了に近い段階である。形態的には、比較検討の結果、旧石器時代人である港川I号[沖縄県]とは異なり、縄文時代人である津雲縄文人[岡山県]や吉胡縄文人[愛知県]と近いという結果が報告された。この距骨に関しては、フッ素分析が松浦秀治によりなされており、その結果、0.95%と高いフッ素含有量であることが判明している(MATSU'URA, 1984)。将来的に、放射性炭素14年代の測定が望まれる。化石化の程度は、1999年の発掘調査による出土人骨及び本稿で報告する表面採集人骨すべての中で、一番高いことが確認された。

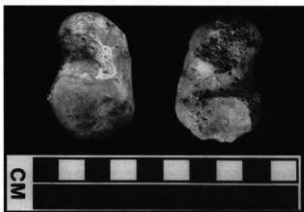


写真5. HC-1983SC-5 (左距骨)

[左から、上面観・下面観]



図4. HC-1983SC-5 (左距骨) 残存図

表6. HC-1983SC-5 (左距骨) の計測値

計測項目 (MARTIN No.)	計測値
1 距骨長	(49) mm
4 距骨帯束長	(29) mm
5 距骨帯束幅	27 mm
5 (2) 距骨帯幅	(28) mm
6 距骨高	(7) mm
8 頭頸長	(26) mm
9 距骨底長	(32) mm
11 椎孔横径	21.80 mm
13 後脛骨関節面最大幅	(17) mm
15 後脛骨関節面偏向角	50°
16 距骨頸面角	25°
17 頭枕恥角(嚮車)	(35)°
4:1 嚮車示数	(59.2)
5:4 嚮車長示数	(32.1)
6:4 嚮車短示数	(24.1)
8:1 頭頸長示数	(53.1)

註: 北川・安井・池田 (2001) より引用

⑥ 長骨片【HC-1983SC-6】(写真6参照)

【採集者記載：第3地点、1999年の発掘地点：第9区】
最大長約27mm、最大幅約13mm、最大厚約3mmの長骨片である。小さな破片であるため、その計測及び形態記載をすることはできない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。フッ素分析が、松浦秀治により行われており、その結果は、0.40%と低い値が得られている(北川・安井・池田、2001)。

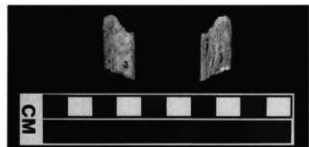


写真6, HC-1983SC-6 (長骨片)
【左から、外面観・内面観】

⑦ 長骨片【HC-1983SC-7】(写真7参照)

【採集者記載：第3地点、1999年の発掘地点：第9区】
最大長約15mm、最大幅約6mm、最大厚約2.5mmの長骨片である。小さな破片であるため、その計測及び形態記載をすることはできない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。化石化の程度は低い。重量は、約0.5gである。



写真7, HC-1983SC-7 (長骨片)
【左から、外面観・内面観】

⑧ 長骨片(獣骨)【HC-1983SC-8】(写真8参照)

【採集者記載：第4地点、1999年の発掘地点：第5区近辺】

最大長約60mm、幅約12mm~15mm、厚さ約2.5mm~3mmの長骨片である。一見すると、人骨の尺骨に似ているが、人骨の形態と本標本の形態とで一致する部位は無い。従って、獣骨の長骨片と考えられるが、現時点ではその種名や部位の同定には到らなかった。

聖嶽洞窟発見の獣骨は、1962年発掘調査時に金子浩昌の同定によりツキノワグマ左尺骨が唯一、1点出土している(小片、1967)。また、1999年発掘調査時には愛知教育大学の河村善也等の同定で、哺乳類はニホンズネズミ(1点)・モグラ属(2点)・コキクガシラコウモリ(327

点)・キクガシラコウモリ(1点)・モモジロコウモリ?(2点)・スミスズネズミに近似的類(3点)・アカネズミ(1点)・ヒメネズミ(6点)・ネズミ類(27点)が、鳥類は種同定無し(1点)が、爬虫類はヘビ類(26点)が、両生類はカエル類(45点)が発見されている(河村他、2001)。さらに、1999年発掘時の人骨を筆者が整理している段階で、非常に良く化石化した獣骨が1点発見されたが、河村善也等の同定によりアナグマの右肩甲骨と判明している(河村他、2001)。お茶の水女子大学の松浦秀治等によるこのアナグマの放射性炭素14年代は、9,600 BC~9,280 BC という古い年代を示した(松浦・近藤、2001)。

1999年発掘調査時に、本匠村歴史民俗資料館所蔵標本に聖嶽洞窟出土とされる人骨10点が展示されているという情報を得て、これらを借用して筆者等が報告したが、その中に、1点人骨では無く獣骨が混じっていることが判明した(橋崎・藤田、2001)。この標本は、河村善也及び大阪市立自然史博物館の榎野博幸の同定によりウマの第4中足骨と判明している(河村他、2001)。

このように、聖嶽洞窟出土獣骨で、コウモリやネズミ等の小型哺乳類を除いた哺乳類は、1962年発見のツキノワグマ左尺骨・1999年発見のアナグマ右肩甲骨・本匠村歴史民俗資料館所蔵標本のウマ第4中足骨の3点のみである。本1983年表面採集獣骨の大きさを見ると、ある程度大きいので、ニホンザル・タヌキ・キツネ・アナグマを除いてシカ・クマ・イノシシ・ウマ等が考えられる。化石化の程度はやや高く、重量は約9gである。将来的に、古生物学者や動物学者に再鑑定を依頼する必要がある。同様に、フッ素分析及び放射性炭素年代測定を実施する必要がある。



写真8, HC-1983SC-8
(獣骨の長骨片)

3. 1984年4月採集人骨

[10点：HC-1984SC-1～HC-1984SC-10]

この表面採集は、当時、京都大学理学部の安井金也(現熊本大学発生病学研究センター)により採集が行われた。全部で、10点採集されている。この内、第6地点[1999年発掘地点での第8区近辺]で1点・第6b地点[1999年発掘地点での第8区]で5点・第7b地点[1999年発掘地点での第5区]で4点が採集されている。以下に、採集人骨の形態を記載する。

① 第1頸椎【HC-1984SC-1】(図5・写真9・表7参照)

[採集者記載：第6地点、1999年の発掘地点：第8区近辺]

第1頸椎である。後弓部及び左右の横突起部は、破損している。二分上関節窩は認められない。性別は不明であるが、大きさが小さいので女性の可能性が高い。死亡

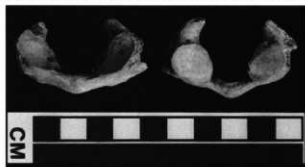


写真9, HC-1984SC-1 (第1頸椎)
[左から、上面観・下面観]



図5, HC-1984SC-1 (第1頸椎) 残存図

年齢も不明であるが、前弓部は癒合が完了しており、この癒合は約6歳～7歳で生じるので、8歳以上～成人と推定できる。恐らく、成人であろう。化石化の程度は低い。重量は、約6gである。

② 頭骨片【HC-1984SC-2】(図6・写真10参照)

[採集者記載：第6b地点、1999年の発掘地点：第8区] 最大長約23mm、最大幅約13mmの頭骨片である。頬骨の

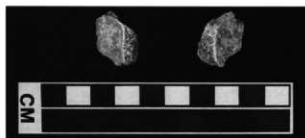


写真10, HC-1984SC-2 (頭骨片)
[左から、外面観・内面観]

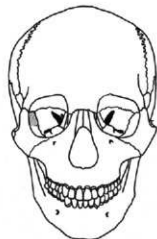


図6, HC-1984SC-2 (頬骨片) 残存図

一部と推定される。眼窩面及び側頭面は残存しているが、外側面は破損している。小さな破片であるため、その計測及び形態記載をすることはできない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。しかし、前頭頬骨縫合が一部残存しており、まだ癒合が完了していないがこの癒合は顔面部では一番遅く癒合するので死亡年齢推定の参考にはならない。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。

③ 右側頭骨岩様部【HC-1984SC-3】(図7・写真11参照)

[採集者記載：第6b地点、1999年の発掘地点：第8区] 最大長約44mm、最大幅約21.5mmの右側頭骨鼓室部及び岩様部である。破片であるため、計測できる項目はない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。外耳道骨腫は認められない。化石化の程度は低い。重量は、約6gである。

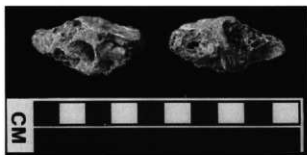


写真11, HC-1984SC-3 (右側頭骨岩様部)
[左から、外面観・内面観]



図7, HC-1984SC-3 (右側頭骨) 残存図

④ 左尺骨(小児)【HC-1984SC-4】(図8・写真12参照)

【採集者記載：第6b地点、1999年の発掘地点：第8区】
最大長約56mm、最大幅約19mmの小児左尺骨の上部である。肘頭部は破損している。また、内側部も一部破損し



写真12, HC-1984SC-4 (小児左尺骨)
[左から、外側面視・内側面視]



図8, HC-1984-4 (左尺骨) 残存図
が小さいため、比較標本との比較では約4歳前後と推定される。化石化の程度は低い。重量は、約3gである。

⑤ 脊椎骨椎体部【HC-1984SC-5】(図9・写真13・表7参照)

【採集者記載：第6b地点、1999年の発掘地点：第8区】
脊椎骨の椎体部である。恐らく、第7胸椎と思われる。椎弓部は、破損している。性別は、不明である。死亡年齢の推定は難しく、成人としか推定できない。椎体辺縁部には、棘形成は見られない。従って、あまり高齢では無いと推定されるが、研究者によってはこの棘形成と年齢との相関関係は低いと考える者もいるので注意を要する。化石化の程度は低い。重量は、約8gである。

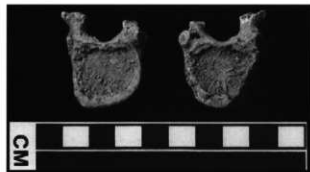


写真13, HC-1984SC-5 (第7胸椎)
[左から、上面視・下面視]



図9, HC-1984SC-5
(第7胸椎) 残存図

表7, HC-1984SC-5 (第7胸椎) 計測値

計測項目 (MARTIN No.)	計測値
1 椎体前面直径	17.5mm
2 椎体背面直径	17 mm
3 椎体中央直径	13 mm
4 椎体頭状直径	23.5mm
5 椎体尾状直径	24 mm
6 椎体中央矢状径	22 mm
7 椎体頭状直径 (26 mm)	97.4
8 椎体尾状直径 (27 mm)	24 mm
9 椎体中央直径	24 mm
2 : 1 椎体前面直径示数	59.1
3 : 6 椎体中央直径示数	72.9
1 : 9 椎体尾状直径示数	91.7
6 : 9 椎体中央直径示数	91.7

註：() 内は、推定値

⑥ 右第5中足骨【HC-1984SC-6】(図10・写真14・表8参照)

【採集者記載：第6b地点、1999年の発掘地点：第8区】

右第5中足骨である。頭部及び底部の一部は、破損している。性別は、大きさが比較的小さいため女性と推定される。死亡年齢は、不明である。中足骨の頭部は癒合が完了しており、この癒合が生じるのは約16歳～18歳であるので、死亡年齢は19歳以上となる。しかし、恐らく、成人であろう。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。



図10, HC-1984SC-6
(右第5中足骨) 残存図

表8, HC-1984SC-6 (右第5中足骨) 計測値

計測項目 (MARTIN No.)	計測値
1 b 中足骨長	(50mm)
2 中足骨長	(51mm)
3 中足骨体幅	5mm
4 中足骨体高	7mm
6 b 近位関節面幅	7mm
7 b 近位端関節面高	8mm
9 b 遠位端高	(9mm)
4 : 3 中足骨幅高示数	140.0

註：() 内は、推定値



写真14, HC-1984SC-6 (右第5中足骨)
[左から、内側面観・外側面観]

⑦ 頭骨片【HC-1984SC-7】(写真15参照)

[採集者記載：第7b地点、1999年の発掘地点：第5区]
長短径約20mm、厚さ約6mmの頭骨片である。恐らく、後頭骨と推定される。縫合部が残存しているが、ラムダ(人字)縫合部であろう。破片であるため、その性別及び死亡年齢は不明である。但し、ラムダ縫合は外板及び内板共に癒合しておらず開放している。この癒合の場合、男性で完全に癒合が癒合する最低年齢は約52歳であり、全く癒合しない最高年齢は約65歳であるので死亡年齢の指標としては難しい。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。

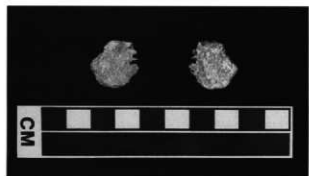


写真15, HC-1984SC-7 (頭骨片)
[左から、外面観・内面観]

⑧ 脊椎骨椎弓(小児)【HC-1984SC-8】(写真16・表9参照)

[採集者記載：第7b地点、1999年の発掘地点：第5区]
小児脊椎骨の椎弓部である。第1胸椎か第2胸椎と推定される。骨化及び椎体との癒合は完了していない。脊椎骨の場合、一般的に椎体と椎弓が癒合するのは約3歳～6歳であるが、胸椎の場合は約4歳～5歳なので、死

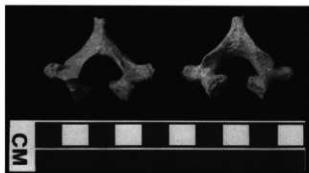


写真16, HC-1984SC-8 (小児脊椎骨椎弓)
[左から、上面観・下面観]

亡年齢も約4歳～5歳と推定される。HC-1984SC-9の小児脊椎骨椎体と同一個体かどうかはわからない。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。

計測項目 (MARTIN No)	計測値
10 椎孔矢状径	(14mm)
10-01 投影椎孔矢状径	(12mm)
11 椎孔横径	17mm
13 棘突起長	25mm
10 : 11 椎孔横矢状径	62.4
10-01 : 11 椎孔横矢状径	116.7

注：() 内は、推定値

⑨ 脊椎骨椎体(小児)【HC-1984SC-9】(写真17・表10参照)

[採集者記載：第7b地点、1999年の発掘地点：第5区]
小児脊椎骨の椎体部である。胸椎と推定される。骨化及び椎弓との癒合は完了していない。脊椎骨の場合、一般的に椎体と椎弓が癒合するのは約3歳～6歳であるが、胸椎の場合は約4歳～5歳なので、死亡年齢も約4歳～5歳と推定される。HC-1984SC-8の小児脊椎骨椎弓と同一個体かどうかはわからない。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。

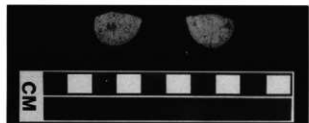


写真17, HC-1984SC-9 (小児脊椎骨椎体)
[左から、上面観・下面観]

表10, HC-1984SC-9 (小児脊椎骨椎体) 計測値

計測項目 (MARTIN No)	計測値
1 椎体腹側垂直径	9.5mm
2 椎体背側垂直径	8.5mm
3 椎体中央垂直径	9.0mm
4 椎体頭側矢状径	13.5mm
5 椎体尾側矢状径	13.0mm
6 椎体中央矢状径	13.0mm
7 椎体頭側横径	17.0mm
8 椎体尾側横径	17.5mm
9 椎体中央横径	19.0mm
3 : 6 椎体矢状垂直径	69.2
1 : 9 椎体腹垂直径	50.0
6 : 9 椎体横矢状径	68.4

⑩ 基節骨(足)【HC-1984SC-10】(図11・写真18・表11参照)

【採集者記載：第7b地点、1999年の発掘地点：第5区】

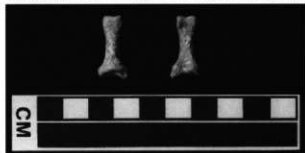


写真18, HC-1984SC-10 (足の基節骨)
[左から、上面観・下面観]



図11, HC-1984SC-10
(右第5基節骨) 残存図

表11, HC-1984SC-10 (右第5基節骨) 計測値

計測項目 (MARTIN No.)	計測値
1 指節骨長	21 mm
1 a 指節骨関節間長	22 mm
2 指節骨体幅	5.5 mm
2 a 近位端幅	12 mm
2 b 遠位端幅	8 mm
3 指節骨体高	4.5 mm
3 a 近位端高	9.5 mm
3 b 遠位端高	5 mm
2 : 1 指節骨長幅示数	26.2
3 : 2 指節骨幅高示数	81.8

右第5基節骨と推定される。ほぼ完全に残存している。性別及び死亡年齢は、不明である。この基節骨は癒合が完了しているが、近位端が癒合するのは約15歳~20歳なので、死亡年齢は21歳以上ということになる。化石化の程度は低い。重量は、約0.5gである。

4. 1985年4月5日採集人骨

【8点：HC-1985SC-1~HC-1985SC-8】

この表面採集は、当時、兵庫医科大学の和田 洋(現大阪医専)と京都大学理学部の北川賢一(現長崎大学歯学部)により採集が行われた。人骨は、全部で8点採集されている。この内、E地点[1999年発掘地点での第13区]で1点・A地点[1999年発掘地点での第12区]で5点・C地点[1999年発掘地点での第5区]で1点・D地点[1999年発掘地点での第1区]で1点が採集されている。以下に、採集人骨の形態を記載する。

⑪ 左尺骨【HC-1985SC-1】(図12・写真19・表12参照)

【採集者記載：E地点、1999年発掘地点：第13区】



写真19, HC-1985SC-1 (左尺骨)
[上・内側面観、下・外側面観]



図12, HC-1985SC-1
(左尺骨) 残存図

最大長約146mmの左尺骨上部1/2である。計測可能な部位での計測値の比較からは、性別は男性と推定される。死亡年齢は、まず、癒合が完了しているので、成人と推定できる。次に、関節面に年齢的变化が認められるため、30歳~40歳代と推定できる。化石化の程度は低い。重量は、約27gである。フッ素分析が、松浦秀治により行われており、その結果は、0.32%と低い値が得られている(北川・安井・池田, 2001)。

表12, HC-1985SC-1 (左尺骨) 計測値

計測項目 (MARTIN No.)	本標本	江戸時代人*		現代人**	
		♂	♀	♂	♀
5 (1) 上腕節面高	(38mm)	37.7mm	32.9mm	—	—
5 (2) 上腕節面高	(27mm)	28.5mm	24.7mm	—	—
6 肘頭幅	25.5mm	25.5mm	21.4mm	25.7mm	22.0mm
7 肘頭深	20mm	24.1mm	21.2mm	24.7mm	22.1mm
8 肘頭高	(22mm)	22.2mm	19.1mm	20.6mm	18.0mm
10 橈骨切面後幅	11mm	11.6mm	11.7mm	12.5mm	11.3mm
11 体矢状径	13mm	12.8mm	10.5mm	13.2mm	10.7mm
12 体横径	15mm	16.2mm	14.1mm	16.3mm	13.9mm
13 上腕径	21mm	21.2mm	18.5mm	20.5mm	17.2mm
14 上矢状径	26mm	26.2mm	22.5mm	25.2mm	21.9mm
7 : 6 肘頭深示数	78.4	94.5	98.4	95.6	100.7
8 : 6 肘頭高示数	86.3	87.2	86.8	80.0	82.2
11 : 12 体頭面示数	86.7	79.0	75.1	80.9	76.9
13 : 14 プラトローニ=示数	80.1	81.1	82.2	82.2	78.4

註1 : *は、遠藤・北條・木村(1967)より引用

註2 : **は、梶名(1951)より引用

② 頭骨片【HC-1985SC-2】(写真20参照)

[採集者記載：A地点、1999年発掘地点：第12区]

最大長及び最大幅共に約19mm、厚さ約4mmの頭骨片である。恐らく、前頭骨の一部と推定される。破片であるため、計測できる項目はない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。

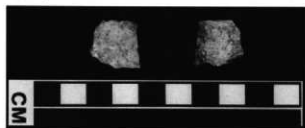


写真20, HC-1985SC-2 (頭骨片)

[左から、外面観・内面観]

③ 右有頭骨【HC-1985SC-3】(図13・写真21・表13参照)

[採集者記載：A地点、1999年発掘地点：第12区]



写真21, HC-1985SC-3 (右有頭骨)

[左から、外側面観・内側面観]

手根骨の右有頭骨である。ほぼ、完全に残存している。恐らく、成人のものであろう。性別は不明である。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。



図13, HC-1985SC-3 (右有頭骨) 残存図

表13, HC-1985SC-3 (右有頭骨) 計測値

項目No.	MARTIN No.	計測値 (mm)
1	有頭骨最大長	15.0
2	有頭骨最大幅	13.0
3	有頭骨骨高	16.5
4	近位関節最大長	9.0
5	近位関節最大幅	12.5
6	近位関節骨高	14.0
7	遠位関節最大長	15.0
8	遠位関節最大幅	12.0
9	尺側関節最大長	13.0
10	尺側関節最大幅	9.0
11	腕骨関節最大長	9.5
12	腕骨関節最大幅	8.5
2	1 長幅示数	68.4
3	1 長高示数	97.4
2	3 高幅示数	70.3
4	1 面積対長	47.4
5	2 面積対幅	96.2
6	3 縦対幅	75.7
8	7 遠位高幅示数	66.7
10	9 尺側面高幅示数	69.2

④ 四肢骨片【HC-1985SC-4】(写真22参照)

[採集者記載：A地点、1999年発掘地点：第12区]

最大長約34mm、最大幅約12mm、厚さ約3mm～5mmの四肢骨片である。恐らく、尺骨片あるいは上腕骨片と推定される。破片であるため、計測できる項目はない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。



写真22, HC-1985SC-4 (四肢骨片)

[左から、外面観・内面観]

⑤ 寛骨片【HC-1985SC-5】(写真23参照)

[採集者記載：A地点、1999年発掘地点：第12区]

最大長約30mm、最大幅約13mmの寛骨の腸骨後部破片である。破片であるため、計測はできなかった。性別及び死亡年齢は不明である。但し、この腸骨後部は、細く比較的平滑であるため、性別は女性である可能性が高い。また、この腸骨後部は破片であるが、明らかに癒合が完了している。この腸骨後部の癒合が完了するのは、早期癒合及び癒合遅延を考慮に入ると約17歳～25歳となるので、死亡年齢は26歳以上ということになる。化石化の程度は低い。重量は、約2gである。

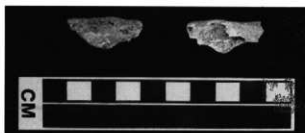


写真23, HC-1985SC-5 (寛骨片)

[左から、外面観・内面観]

⑥ 中足骨の頭【HC-1985SC-6】(図14・写真24・表14参照)

[採集者記載：A地点、1999年発掘地点：第12区]

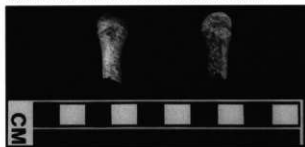


写真24, HC-1985SC-6 (左第2中足骨)
[左から、内側面観・外側面観]



図14, HC-1985SC-6
(左第2中足骨の頭) 残存図

中足骨の頭部である。恐らく、左第2中足骨と推定される。成人のものであろう。性別は不明である。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。

表14, HC-1985SC-6
(右第2中足骨の頭) 計測値

計測項目 (MARTIN No)	計測値
8 a 遠位端最大幅	11mm
8 b 遠位関節面幅	9mm
9 a 遠位端高	12mm

⑧ 右外側楔状骨【HC-1985SC-8】(図15・写真26・表15参照)

[採集者記載：D地点、1999年発掘地点：第1区]

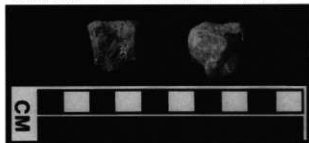


写真26, HC-1985SC-8 (右外側楔状骨)
[左から、内側面観・外側面観]



図15, HC-1985SC-8
(右外側楔状骨) 残存図

足根骨の右外側楔状骨である。遠位端は、一部破損している。恐らく、成人のものであろう。性別は不明である。化石化の程度は低い。重量は、約3gである。

表15, HC-1985SC-8
(右外側楔状骨) 計測値

計測項目 (MARTIN No)	計測値
1 上部長	(20mm)
2 中央上幅	14mm
3 遠位幅	(12mm)
4 近位幅	13mm
5-01 最大高	21mm
2 : 1 尖幅示数	70.0
4 : 3 幅示数	106.3

⑦ 頭骨片【HC-1985SC-7】(写真25参照)

[採集者記載：C地点、1999年発掘地点：第5区]

最大長約29mm、最大幅約17mm、厚さ約6mm~6.5mmの頭骨破片である。恐らく、頭頂骨の一部と推定される。破片であるため、計測できる項目はない。同様に、性別及び死亡年齢も不明である。化石化の程度は低い。重量は、約1gである。

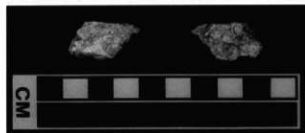


写真25, HC-1985SC-7 (頭骨片)
[左から、外面観・内面観]

5. 1999年発見人骨との比較

1999年の発掘調査では、人骨96点及び人歯47本が出土した(橋崎・藤田, 2001)。以下に、今回の表面採集人骨と比較する。

(1) 人骨

① 未成人

未成人の人骨は、1983年表面採集で1点[HC-1983SC-2 (脊椎骨椎体)], 1984年表面採集で3点[HC-1984SC-4 (左尺骨)、HC-1984SC-8 (脊椎骨椎体)、HC-1984SC-9 (脊椎骨椎体)]の合計4点が発見されている。これらの4点を観察すると、大きさから、死亡年齢約4歳の子供のもので推定される。これは、1999年発掘調査で出土した、未成人人骨10点[B 8・11・12・13・21・30・42・58・93・95]や歯13本[乳歯7本：T 3・5・6・11・13・18・34、永久歯6本：T 7・8・12・16・17・37]と同一個体であると推定される。

② 成人男性

成人男性と推定されたものは、1983年表面採集の左距骨 [HC-1983SC-5] と1985年表面採集の左尺骨 [HC-1985SC-1] の2点である。1999年出土人骨には、左距骨が2点 [HC-B54-55] 発見されているが、左尺骨は見られていない。

③ 成人女性

成人女性と推定されたものは、1984年表面採集の第1頸椎 [HC-1984SC-1] と右第5中足骨 [HC-1984SC-6]、1985年表面採集の寛骨片 [HC-1985SC-5] の3点である。1999年出土人骨には、右第5中足骨 [HC-B94] のみ発見されている。

② 歯

歯は、3本表面採集されているが、いずれも1983年に採集されたものであり、1984年と1985年には採集されていない。

① 1983年表面採集の上顎左第2小臼歯 [HC-1983SC-1] は、1999年出土歯では同歯種が3本出土

[HC-T15・T28・T32] しており、形態的には、右側のT-15と似ている。

② 1983年表面採集の下顎左犬歯 [HC-1983SC-3] は、1999年出土歯では同歯種右側が1本 [HC-T1] と同歯種同側が1本出土している [HC-T36]。

③ 1983年表面採集の下顎左第1小臼歯 [HC-1983SC-4] は、1999年出土歯では同歯種が2本出土している [HC-T17、HC-T46] もの左側は出土していない。しかも、1999年出土歯の内、HC-T17は歯根形成が完了していない未成人のものである。

以上の結果をふまえると、1999年出土人骨では、約4歳の子供1体（性別不明）・約50歳の成人男性1体・40歳の成人女性2体の合計4体が埋葬されていたと推定されたが（橋崎・藤田、2001）、今回の表面採集人骨には重複する部位があるものの、これらの一部と推定して矛盾しない。但し、1983年採集の左距骨については、化石化の程度が高くしかもフッ素含有量も多いため（北川他、2001）、時代も古い時代であろう。

6. おわりに

聖嶽洞窟で、1983年3月・1984年4月・1985年4月に表面採集された人骨を記載した。骨は、それぞれ8点・10点・8点の合計26点採集されているが、この内、25点は人骨か人歯であるが、1983年に採集された1点は獣骨であることが判明した。化石化の程度は、1983年採集の左距骨が一番高く、次いで、1983年採集の獣骨が高い。その他の人骨は、どれも化石化の程度は低い。また、一部に1999年出土人骨と重複部位が認められるものの、これらの表面採集人骨は、約4歳の子供1体・約50歳の成人男性1体・40歳の成人女性2体の合計4体のものと推定される。これらは、化石化の程度も低く、時代は中近世のものであると推定される。しかしながら、1983年採集の左距骨については、化石化の程度も高くフッ素含有量も高いため（北川他、2001）、時代が異なる別個体と推定される。従って、1999年出土人骨及び表面採集人骨から判断する限り、聖嶽洞窟には、旧石器時代人骨は認められず、縄文時代（1983年表面採集の左距骨）と中近世の人骨群との2群が埋葬あるいは放置されていたと考えられる。将来的に、1983年表面採集の獣骨 [HC-1983SC-8] の種同定及び部位同定を古生物学者に依頼して行うことと、同獣骨及び同年採集の左距骨 [HC-1983SC-5] の放射性炭素年代測定を行うことが必要と考えられる。合わせて、これら表面採集人骨の放射性炭素年代測定及びフッ素分析が必要であろう。

謝辞

本稿を発表するにあたり、聖嶽洞窟表面採集人骨コレクションの研究を許可していただいた京都文化博物館の鈴木忠司氏に感謝いたします。また、人骨を表面採集され、本研究を行う許可をいただいた熊本大学発生医学研究センターの安井金也氏・大阪医専の和田 洋氏・長崎大学歯学部北川賀一氏・京都文化博物館の山下秀樹氏・大分県文化課の繪實俊一氏の皆様に感謝いたします。さらに、本稿を発表するきっかけとなった岩宿文化資料館での展示で、本標本の借用を行っていただいた同館の小菅将夫学芸員に感謝いたします。貴重なコメントをいただいた、@群馬県埋蔵文化財調査事業団の麻生敏隆氏に感謝いたします。

引用文献及び参考文献

- (和文)
- 馬場悠男 2001 a 「11章 1962年発掘調査の再検討」『大分県聖塚遺跡の発掘調査』(春成秀爾編)、国立歴史民俗博物館(考古学資料集14)、p.83-87.
- 馬場悠男 2001 b 「前期旧石器と日本の更新世人間問題」『検証日本の前期旧石器』(春成秀爾編)、学生社、p.37-47.
- 馬場悠男 2001 c 「5. 旧石器遺跡問題の批判と更新世人間問題の現状」『検証日本の前期旧石器』(春成秀爾編)、学生社、p.63-78.
- 馬場悠男 2001 d 「話題コーナー-3. 疑問化石人骨の検証」『日本人はるか昔展図録』(小田静夫・馬場悠男監修)、国立科学博物館、p.104-107.
- 姥名忠次郎 1951 「日本人前腕骨の人類学的研究、其二尺骨」『慈恵解剖学雑誌』、第5巻
- 遠藤萬里・北條 幸・木村 賢 1967 「VII 四肢骨」『増上寺徳川村軍墓とその遺品・遺体』(鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行編)、東京大学出版会
- 藤田恒太郎 1949 「歯の計測標準について」『人類学雑誌』、61: 1-6.
- 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』、67: 151-163.
- 春成秀爾編 2001 a 「大分県聖塚遺跡の発掘調査」国立歴史民俗博物館(考古学資料集14)
- 春成秀爾 2001 b 「聖塚遺跡問題」『旧石器考古学』、(62): 77-89
- 今村家雄・春成秀爾 2001 「10章 木炭の炭素14年代」『大分県聖塚遺跡の発掘調査』(春成秀爾編)、国立歴史民俗博物館(考古学資料集14)、p.79-82.
- 賀川光夫 1962 「大分県聖塚遺跡の調査」『洞穴遺跡調査会報』4、p.1-2
- 賀川光夫 1967 a 「大分県南海部郡聖塚遺跡」『日本考古学年報』15、p.75
- 賀川光夫 1967 b 「4. 大分県聖塚遺跡」『日本の洞穴遺跡』、平凡社、p.278-283
- 賀川光夫 1971 「聖塚遺跡と旧石器人骨の発見」『大分県の考古学』(賀川光夫著)、吉川弘文館
- 賀川光夫 1983 「聖塚遺跡」『本匠村史』、本匠村史編纂委員会、p.45-53.
- 笠懸野岩文化資料館編 2001 「日本人のルーツを探る図録」、44p.
- 河村善也・丹羽良平・若松明希・村瀬安和 2001 「8章 脊椎動物遺体」『大分県聖塚遺跡の発掘調査』(春成秀爾編)、国立歴史民俗博物館(考古学資料集14)、p.63-70.
- 北川賢一・安井金也・池田次郎 2001 「大分県聖塚遺跡で採集された断骨について」、『人類学雑誌』、109: 1-8.
- 栗田勝弘 2001 「聖塚遺跡の疑惑と真相」『考古学ジャーナル』、(478): 32-35
- 松浦秀治・近藤 恵 2001 「9章 骨遺存体の年代分析」『大分県聖塚遺跡の発掘調査』(春成秀爾編)、国立歴史民俗博物館(考古学資料集14)、p.71-78.
- 横崎修一郎・藤田 尚 2001 「7章 人骨」『大分県聖塚遺跡の発掘調査』(春成秀爾編)、国立歴史民俗博物館(考古学資料集14)
- 横崎修一郎・馬場悠男・松浦秀治・近藤 恵 2000 「日本の旧石器時代人骨」『群馬県立自然史博物館研究報告』、4: 23-46
- 小片 保 1967 「洞穴遺跡出土の人骨所見序説」『日本の洞穴遺跡』、平凡社、p.382-392
- 小片 保 1981 「13. 聖塚遺跡」『人類学講座 5. 日本人I』(小片 保編)、雄山閣出版、p.14-25
- 小片彦彦 1981 「VI. 旧石器時代人骨」『季刊 人類学』、講談社、p.50-58
- 岡村道雄・松藤和生・木村英明・辻 誠一郎・馬場悠男 1998 「シンポジウム日本の考古学1. 旧石器時代の考古学」、学生社

(英文)

- GESCHICKTER, Charles F. & COPELAND, Murray M. 1931 "Bone Tumor", J. B. Lippincott Company
- JANSSENS, Paul A. 1970 "Palaeopathology", John Baker Publishers
- ORTNER, Donald J. & PUTSCHAR, Walter G. 1981 "Identification of Pathological Conditions in Human Skeletal Remains", Smithsonian Institution Press.
- POLEDNAK, Anthony P. 1989 "Racial and Ethnic Differences in Disease", Oxford University Press.
- STEINBOCK, R. Ted 1976 "Palaeopathological Diagnosis and Interpretation", Charles C. Thomas
- WEINMANN, Joseph P. & SICHER, Harry 1947 "Bone and Bones", The C. V. Mosby Company
- ZIMMERMAN, Michael R. & KELLEY, Marc A. 1982 "Atlas of Human Paleopathology", Prager Publishers
- ZIVANOVIC, Sreboljub 1982 "Ancient Diseases", Methuen & Co.

アーネスト・サトウが大室古墳に来たわけ

— 国際理解・郷土理解の教材開発 —

能 登 健・長 沼 孝 則

はじめに

I アーネスト・サトウの生涯

II 幕末から明治初期の列強外交をどう扱っているのか

III アーネスト・サトウが大室に来たわけ

IV アーネスト・サトウの日本研究

V 教材化に向けて

おわりに

アーネスト・サトウについて学ぶためのホームページ

アーネスト・サトウに近づくための本

アーネスト・サトウを知るための論文

明治期の大室古墳群について書かれたもの

アーネスト・サトウの「上野地方の古墳群」を原文で読んでみよう

アーネスト・サトウの旅

アーネスト・サトウ関係年表

要 旨

平成14年度から、小中学校では「総合的な学習の時間」が創設されます。この時間の中では横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うことが求められています。この授業の中で使える教材を開発、提案することを目的としてその主題となるものを探しました。そこで目を付けたのが、明治13年に前橋の大室古墳群を訪れた、イギリス外交官のアーネスト・サトウです。サトウは4泊5日の日程で東京から大室を目指しました。

サトウが大室古墳群を訪れたのは、日本を知りたいという好奇心に突き動かされたからです。サトウは仕事上、日本について詳しく分析する必要がありましたが、彼の分析の仕方は当時の政治や経済活動にばかり目を奪われていませんでした。サトウは日本を理解するために、その歴史や風土を理解することに努めたのです。

こうしたサトウの方法は、私たちが国際理解をしていく上にも大変重要な視点を明らかにしてくれます。国際理解するにはその前提として、自分たちの文化や歴史を理解していなくてはなりません。彼の方法は私たちが、自分たちの歴史を解き明かすその方法を教えてくれます。さらにその方法は、私たちが外国を理解するとき取るべき方法でもあるのです。ここでは、サトウがしたように大室を訪れ、調査し、その成果についても学ぶことで、私たちの郷土理解から国際理解へと広がる学習を提案します。

キーワード

対象時代	古墳時代、幕末・明治時代、現代
対象地域	大室古墳（群）
研究対象	アーネスト・サトウ、国際理解、郷土理解、教材開発

はじめに

アーネスト・メイスン・サトウ (Ernest Mason Satow) は、幕末から明治にかけての日本の歴史が激しく動いた時期を、イギリス政府から派遣された外交官という立場で体験しました。そして明治維新に多くの影響を与えた人物として歴史上に名前を残しているイギリス人です。

サトウは外交官としての姿の他に、開国間もない日本を歴史、地理、言語、宗教など様々な分野で研究したジャパノロジスト (Japanologist)、いわゆる日本学者としても知られています。日本の節目となった時期に大きな足跡を残し、当時欧米ではまだおとぎの国だった日本を、確かな研究を通じた情報として欧米に紹介しました。しかし、現在小中高校のどの教科書を見ても彼の名前は出てきません。

そのサトウが1880年 (明治13) 3月、群馬県前橋市の大室古墳群を訪れています。サトウは何を目的にここに来たのか。それを探りながら、サトウの目指す日本研究と、それを背景にしたサトウの外交に対する姿勢をここでは見ていきます。

さらに、このサトウの外交姿勢から本当の国際理解とは何かを探っていき、グローバリゼーションの中で、新しい国際理解教育の情報を抽出してみたいと思います。

1 アーネスト・サトウの生涯

1 「エルギン卿遣日使節録」との出会い

サトウは1843年6月30日、ロンドン北東部のクリプトンで11人兄弟の3男として生まれました。父はスウェーデン人で金融業を営み、母はイギリス人でした。イギリスではイギリス国教徒が多いのですが、サトウ家はプロテスタントのルーアル派という非国教徒でした。しかし、若いころのサトウはあまり信仰心は厚くなく、45歳の時に両親とは違うイギリス国教会に入信しました。

『アーネスト・サトウ伝』によると、サトウはベスタロッナの教育を実践する私立学校に通った後、1856年13歳でミル・ヒル・スクール (Mill Hill School) で寄宿舎生活を始めました。しかし、後にこの学校を「退屈で古くさい場所」とサトウは表現しています。この学校を3年で主席に上りつめたサトウは奨学金を貰うことになり、それによって1859年、16歳という若さでロンドンのユニバーシティ・カレッジへと進学を果たしました。

彼が大学時代に何を学んでいたのかは明らかになっていませんが、当時はハーバート・スペンサーやダーウインなどが活躍していた時代でした。こうした環境からサトウが実証主義的に人生をとらえ始めたのはこの時期だったと考えられています。

さて大学に通い始めて2年がたった頃、1冊の本との出会いが持っていました。兄の一人が図書館から、東ア



1869年当時のアーネスト・サトウ (横浜開港資料館蔵)

ジアの生活を、彩色された挿し絵で紹介した『エルギン卿遣日使節録』という本を借りてきたのです。この本はローレンス・オリファントという、日本と日英修好通商条約を結ぶために来日したエルギン卿に随行してきた人が書いたものでした。サトウが晩年書いた「一外交官の見た明治維新」という、滞日体験を描いた本の書き出し部分では、この本との出会いが次のように描かれています。

「ほんの思いがけないことから、私は日本に心をひかれはじめたのである。私が十八歳のとき、兄がミュージー図書館からローレンス・オリファントの書いた『エルギン卿のシナ、日本への使節記』というおもしろい本を借りてきた。やがて私のところへも回覧されたが、絵草紙ふうのこの本が私の空想をかりたてたのである。」

こうしてサトウはこの本を通して日本と出会い、彼の人生は大きく動き出したのです。



『エルギン勲遣日使節録』の挿絵
「江戸のイギリス使節団滞在所」

2 日本への道のり

オリファントの本によって日本への思いが芽生えたところに、サトウは大学の図書館で、外務省がシナと日本に行く通訳生を3人募集しているという告示を目にしました。これは日本に行ける絶好のチャンスでした。そこでサトウは、学位を取得した後はケンブリッジのトリニティー・カレッジへの進学を希望していた両親を説き伏せたのです。しかしこの通訳生になるには公開試験を受験しなくてはなりません。この試験には年齢制限がありました。サトウは数時間早く生まれたことでこの条件を満たせたのです。そして最年少ながらこの試験をトップで合格しました。

当時の東アジアはイギリスと清朝の間でアヘン戦争やアロー戦争が起こり、太平天国の乱の真っ只中という状態でした。当然イギリスの目は清朝に注がれていました。サトウが日本と出会った本に登場するエルギン卿ですが、彼も実は日本訪問は主な目的ではなかったのです。そもそも彼はアロー号事件の特派使節として清に赴いていました。事件の講和条約である天津条約の最終的な確認と、同意の手続きを取るために、交渉相手である清朝側の委員が上海に到着するのを待っていたのですが、その間に2、3週間の余暇が出来る。そこでこの休みを利用して、日英修好通商条約を結ぶ交渉を行うこと、イギリス女王から日本に贈られた豪華快足船エンペラー号を日本に届けることを目的にエルギン卿は来日したのです。このことから、当時の欧米の外交では、清朝に比べ日本への興味は経かたことがわかります。ですから、外交官としては清朝との交渉にかかわる方が、活躍する機会は多いと思われていたのですが、サトウは最初からの希望通り、日本行きを選んだのです。

1861年8月、サトウは自分が半生を過ごすことになる日本の領事館の通訳生という辞令を外務省から受けました。そして10月に行われるユニバーシティ・カレッジの最終試験を受ける必要があったため、出発を延期してもらい、ついに11月サトウは日本に向けて出発したので

す。しかし、サトウが初めて土を踏んだ東アジアは清でした。当時の駐日イギリス公使だった、オールコックは自分の体験から、日本語を学ぶにはその基礎として中国語を学んでおくこと近道だと思っていたので、自分の所に配属されてくるサトウたちに中国語を北京で学ばせようとしたのです。そのため、1862年4月から数ヶ月を北京で中国語の習得に費やさなければならないことになったのです。しかし、オールコックが休暇で帰国している間代理公使を勤めたニール中佐は、サトウたちをすぐに日本に呼び寄せたのです。そしてついにこの年の9月8日、あこがれの日本にサトウは第一歩を踏出したのです。サトウはこのとき19歳になっていました。

3 外交官サトウ

サトウが日本にたどり着いたときの国内の様子はどうか。サトウが横浜に到着してからまだ2週間というときに一つの大きな事件が起きました。薩摩藩主の前をイギリス商人リチャードソンが乗馬で横切ったために、藩士に殺害されたのです。生麦事件として知られる事件ですが、こうした攘夷の風が吹き荒れる中にサトウはやって来たのです。

こうした環境の中でも、サトウは通訳生のやるべき事として、日本語の習得が最優先であることを分かっていました。その努力の甲斐あって、来日して1年と経たない、1863年6月には幕府の閣老から届いた短い書簡を訳す機会がありました。そしてこの翻訳を行ったイギリス公使館員3人の中で一番良い翻訳ができたという自負を持てるまでに、サトウは成長したのです。そしてその2ヶ月後の8月には薩英戦争に従軍しました。そこでこの日本語の能力を通訳として発揮したのです。翌年7月には下関戦争を避けるためにイギリス留学から急ぎ帰国した、長州藩士の伊藤博文と井上聞多を、長州に届けるために横浜から軍艦で長州に向いました。この船上で、後の討幕運動の中心となる伊藤や井上たちとの個人的な交流が始まったのです。そうした交流が出来るまでにサトウの日本語能力は上達していたのです。こうして、まさに日本の激動の中心地でサトウはその日本語能力を活かして活躍しはじめました。

サトウは1866年3月から5月にかけて、こうした外交の場面や友人らとの交流の中で芽生えてきた考えをまとめて、横浜の英字新聞に発表しました。これを日本語訳したものは『英國策論』と名付けられました。最初英字新聞に載ったサトウの論文は無署名でした。なぜかというところ、当時オールコックから変わって駐日公使になっていたパークスの考えはサトウとは違っていたのです。パークスはまだ徳川幕府への期待感が強かったために、サトウは公使館員として、そのことに配慮したのかもしれませんが。その後、サトウの思惑以上に、日本の歴史は



下関戦争で前田村砲台を占領したイギリス軍
(横浜開港資料館蔵)

大きく動き、徳川家は大政を奉還しただけでなく、大名の座を手放すことになったのです。こうした動きを見届けた1869年2月24日、休暇をとって初めての帰国を果たしました。この1回目の日本滞在がサトウにはとても思い出深かったようで、後に友人に宛てた手紙では、「1862年から1869年までは私の人生の中でももっとも興超あふれる時期であった」と語っています。

帰国から1年半が過ぎた、1870年11月には2度目の来日を果たしました。翌年には日本人で10歳年下の武田兼と結婚し、二人は2男1女をもうけました。この中でも次男の武田久吉は植物学を志し、ロンドンのキュー植物園にサトウの薦めで留学もしています。そしてその後尾瀬などをフィールドとして活躍する植物学者になるのです。

この2回目の来日からは、サトウは外交官としての顔の他に日本学者としての活躍が目立ってきます。1872年に横浜の英米人が中心となって日本アジア協会という研究者団体が出来ました。サトウはその第1回の例会の時に「琉球についての覚書」を報告しています。この論文はイギリスでも、琉球がどこの国に属するのかという、領土問題に絡んで、重要な資料を提供したのです。そして後々サトウは協会の中心人物となっていきました。1874年に父が亡くなったのを機会に2度目の帰国をしますが、この帰国中も広くヨーロッパを回り、日本学者との交友を深めています。1874年再来日するときには、帰国途中で受けたバークスの命令で、西南戦争が起る直前の鹿児島の様子を視察するために、鹿児島へと赴き、西郷隆盛と面会を果たしています。

また、2回目と3回目の来日ではその期間中に35回の国内旅行をして、その延べ日数は450日にも達しています。その様子は1880年に前橋の大室古墳群を訪ねた時のことも含めて、日本アジア協会の例会で発表しています。そしてその集大成は1881年3月にアルバート・ジョージ・シドニー・ホーズとの共著で「中部・北部日本旅行案内」

「中部・北部日本旅行案内」序論のテーマと執筆者

テ	マ	執	筆	者
日本語	—	—	—	—
遊歩規定	—	—	—	—
内国旅券	—	—	—	—
狩猟免許	—	—	—	—
通貨	—	—	—	—
度量衡	—	—	—	—
地区と参考書	—	—	—	—
手荷物	—	—	—	—
服装	—	—	—	—
食糧など	—	—	—	—
旅宿	—	—	—	—
道路、乗り物、料金など	—	—	—	—
日本の入浴と温泉	—	エル	ヴィン	・ベルツ
旅行心得	—	—	—	—
主要ルート一覧表	—	—	—	—
電信局全覧	—	—	—	—
地理	J・J	・	ライン	—
天候と気象	J・J	・	ライン	—
動物学	F・V	・	ディキンズ	—
植物学	F・V	・	ディキンズ	—
神道	E・M	・	サトウ	—
仏教	E・M	・	サトウ	—
絵画美術	W	・	アンダーソン	—
彫刻美術	W	・	アンダーソン	—

として出版されました。この本も第3版からは編著者がバジル・ホール・チェンバレンとウィリアム・ベンジャミン・メイスンに変わりましたが、1922年の第9版まで版を重ねられた、息の長いガイドブックになりました。サトウらの編集による最後の版となった第2版を見ると、この本には64の国内旅行のルートが紹介されています。さらに特徴的なのが、序論として表1の24のテーマについて詳しい解説が加えられている点です。これらはサトウとホーズの二人が当時の在日外国人を中心に原稿を集めたものでした。

このガイドブックは、当時ヨーロッパで発行されていたマレー社の人気のガイドブックの書式に合わせて編集されたものでしたが、当時日本にいた外国人の日本研究がいかに広い範囲に及んでいたかを知ることが出来るでしょう。

1882年12月再びサトウは帰国します。サトウの通訳官としての在日は、この時で終わります。初めて日本の地を踏んでから実に20年の月日が経っていました。1884年にバンコク駐在代表兼総領事に任命されるまでの間も、ヨーロッパ各地を旅行しています。また、駐英大使となっていた森有礼の紹介でハーバート・スペンサーとの面識が生れたのもこの時でした。サトウも実証主義的な思想を持っていたので興味深い出会いだったことでしょう。さて、初めて総領事として赴任したバンコクでしたが、その気候はサトウには合わなかったようで、半年も経たずに休暇を取って再来日してしまいます。

若いころから日記を書き続けていたサトウですが、この時の日記に初めて、妻の兼の待つ家に立ち寄ったことが書かれたのです。休暇で来日するという気安さが、家族への思いを日記に残させたのかも知れません。この休暇を利用した来日は2ヶ月弱にも及んでいます。さらに2年後にも3ヶ月に渡ってこうした休暇を日本で過ごしています。1887年6月にはバンコク勤務を終えて英国に戻り、再び日本へ派遣されることを希望しますが、その夢はかないままでした。この帰国中はイタリア、スペイン、ポルトガルを回って、日本におけるイエズス会の活動を調べるために、彼らが本国に送った書誌を調べています。この旅の成果は『日本耶穌会刊行書誌』としてまとめられました。この本は日本の書誌学の先鞭をつけるものとして評価されています。

1889年からは4年間南米ウルグアイの弁理公使、その後はアフリカモロッコの駐劄特命全權公使を2年勤めました。その頃日本は日清戦争を経験し、日本を見る外国の目も変化してきました。着実に力を付けて、世界に登場してきた日本に派遣する日本駐劄特命全權公使として、日本に精通したサトウに白羽の矢が立ったのです。そして1895年5月、実に12年ぶりにサトウは駐日公使として日本に着任したのです。東アジアをめぐる政局が大きく変わりつつある難しい時期でしたが、忙しい公使としての仕事の合間に日光に別荘を建てたり、日本研究を深めたりと若い頃と変わらない精力的な活動をしました。そして57歳になった1900年、清の駐劄特命全權公使へと任命されました。初めて通訳生として東洋に赴くとき、日本を選んだサトウでしたが、今度は日本勤務から清へと活躍の舞台を移すことにしたのです。当時イギリスを含む列強と清朝の間には義和団事案をめぐる賠償問題があり、自国の利益を追い求める各国の代表の中で、サトウはこの交渉を進める必要がありました。1906年、清での任務を終えて帰国する途中、日本に立ち寄りました。この時の3週間の滞在がサトウにとって最後の日本となったのです。この時のサトウは次男の久吉と日光へ旅行しています。さらに日本を離れてからは、体が弱かったためにアメリカで農場を経営していた長男の元にも立ち寄っています。こうして63歳の時、実に45年に及ぶ外交官生活にピリオドを打ちました。それからのサトウはオランダ、ハーグの国際仲裁裁判所の英国代表に任命され、またオタリー・セント・メリーというイギリス南西部に家を構えました。ここでの生活は若い頃に過ごした日本の公使館で一緒だった、アストンが近くに住んでいたため、彼との往来が多い生活を送りました。晩年のサトウは日本で買い集めた書籍を売ったり寄付してしまい、西洋文学や西洋美術へと帰っていきました。しかしこうした中で『一外交官の見た明治維新』(A Diplomat in Japan)を出版しています。これは初来日をして、

江戸幕府が崩壊するのを目の当たりにした時の日本での経験を、書き続けていた日記を元に書き起こしたものでした。

1929年8月に、サトウはオタリー・セント・メリーで86年に及ぶ生涯を閉じました。外交官を引退してからも実に22年の歳月が流れていました。サトウの最期は、サトウに伴って渡英していた本間三郎が見とり、東京にいるサトウの妻、兼に訃報を知らせています。

II 幕末から明治初期の列強外交をどう扱っているのか

1 教室での開国理解

近年の教科書までは、アーネスト・サトウという名前やサトウの著作『英蘭策論』という言葉や、ごく少ない教科書の中ですが、見ることが出来ました。しかし現在使われている教科書の中では、サトウについて書かれているものは見あたりません。

ここでは、平成14年度から使われ始める小中学校の教科書の中や、現在高校で使われている教科書の中で、サトウが活躍した幕末から明治維新の時代が、どのように載っているのかを見ていきます。特に世界の歴史の中で、日本の立場がどうだったのか、欧米列強は日本にどのような接触をしたのかという外交を中心とした部分に着目してみます。

小学校と中学校では平成14年度からは、新学習指導要領に基づいた新しい教科書が使用されることになっています。今回の指導要領の改訂の目玉は、「総合的な学習の時間」の創設と、それに伴う学習内容の実に3割という大幅な削減にあります。そこで、それぞれの学校における扱われ方を、学習指導要領の該当部分を見た上で、実際の教科書での取り扱いを見ていきます。

まず、小学校です。小学校では初めて歴史なことを学びますが、そのことについて新学習指導要領では、社会科の6学年の内容として、

我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。

と掲げられています。さらに幕末、明治維新の事については、「黒船の来航、明治維新、文明開化などについて調べ、廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことが分かること」が求められています。さらに「歴史的事象を網羅的に扱わないこと」も求められているのです。人物についてはペリー、勝海舟、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、

明治天皇、福沢諭吉、大隈重信、板垣退助、伊藤博文といった人々がこの時代の人物として取り上げられています。人物の働きや代表的な文化遺産を中心に扱っています。目指している今回の小学校社会科の学習指導要領では、具体的に名前を挙げている歴史上の人物42人の中で、実に10人がこの時期の人々なのです。これは歴史学習の中でも、この時期を特に重点をおいて扱っていることを物語っています。

さて、では教科書の中での扱いはどのようになっていくのでしょうか。平成14年度から群馬県内の小学校で使われる社会科の教科書は、すべて東京書籍の「新しい社会」です。ここではその教科書の中身を見てみます。この時期は「明治維新をつくりあげた人々」という章になっています。写真入りでペリーの紹介がなされ、浦賀上陸の様子も半ページを割いて写真を紹介しています。また西郷や木戸などによって討幕運動が大きくなったので、徳川慶喜が政権を朝廷に返したことが紹介されています。このように社会全体のダイナミックな動きよりは、人物について学ぶようになっています。外国との交渉はペリーの来航と日米和親条約の締結、岩倉使節団が出発したことなどが挙げられており、外圧と日本側の自発的な西洋研究を同列に取り上げています。

さて、続いて中学校の新学習指導要領です。社会科の歴史的な分野では、その内容として掲げられていることの中で、注目すべき点があります。「近現代の日本と世界」の中の最初の2項目です。次に挙げてみましょう。

- ア 市民革命や産業革命を経た欧米諸国のアジアへの進出を背景に、開国とその影響について理解させる。
イ 明治維新の経緯のあらましを理解させ、新政府の諸改革により近代国家の基礎が整えられたことに気付かせるとともに、人々の生活の大きな変化について考えさせる。

このように中学校では、開国の背景に外圧があることを学ぶのです。この取り扱いについては、「欧米諸国のアジアへの進出については、近代社会の成立の下、新たな市場や原料、植民地を求めてアジアにも進出したものであることを欧米諸国の事例を選んで取り上げるようにすること。ただし、これらは我が国の歴史を理解するための背景として取り扱うにとどめ、各事象の詳細にわたらないようにすること。」が求められています。また、「明治維新については、複雑な国際情勢の中で独立を保ち、近代国家を形成していった政府や人々の努力に気付かせるようにすること。」をも求めているのです。これらを見ると、中学校で学ぶことは、日本を中心にした歴史的な事象の学習が中心である事が分かります。欧米列強の動きは、背景として捉えるようになっていきます。

続いて実際の教科書ではどうでしょうか。県内の中学校で平成14年度からもっとも使われる東京書籍の教科書「新しい社会 歴史」を見てみます。ここでは「開国と不平等条約」という節の中で日米和親条約、日米修好通商条約が扱われ、それが日本経済に大きな影響を与えたことについてや、それにより武士や庶民は幕府に対する変換を強めていったことが書かれています。特にイギリスとの関係で見ると、この両方の条約をイギリスなど他の国と結んだとして登場します。さらに学習が進んでからイギリスが出てくるのは、薩摩藩がイギリスと結んで軍備を強化したとや、写真付きで下関砲台の占領を挙げられています。

「日本史」という授業が始まる高校での扱いを覗いてみましょう。平成15年度からは高等学校も学習指導要領が改訂されます。その中の扱いを見ていきます。新学習指導要領の地理歴史の日本史Bでは、

「欧米諸国のアジアへの進出、学問・思想及び産業の新たな展開に着目して、幕藩体制の動揺と近代化の基盤の形成について理解させる。」

「開国、幕府の滅亡と新政府の成立からの明治時代の近代日本の歩みについて、アジアにおける国際環境と関連付けて考察させる。」

ということが内容としてあげられています。高校でも欧米列強のアジア進出が、幕府に動揺を加えたことについては扱うことを求めています。その動揺がどういった質のもので、どういった影響を与えたかについては触れられていません。また、明治維新の原動力の一つとして欧米の在日外交官の動きがあったことについても触れられてはいないのです。

高校の教科書の中では学習内容が豊富な山川出版社のものを見てみましょう。ここでは日米和親条約、日米修好通商条約に続いて、イギリスとの間でも同様の条約が結ばれたことは書かれています。高校になると「生麦事件」「薩英戦争」「四国艦隊下関砲撃事件」「改訂約書」などの単語を学びます。イギリスのこととしては、公使であったパークスの名前が出てきており、彼が1866年当時、「幕府の国内統治力に疑問をいだき、対日貿易発展のために、天皇を中心とする薩摩藩などの雄藩連合政権の実現に期待をかけるようになった」と書かれています。一方幕府はフランス公使のロッシュに援助を受けていたことも書かれています。この次に検定を受ける教科書では、内容が厳選されてしまったため、こうした扱いもさらに概説化してしまいかも知れません。

2 条約交渉の経緯

1853年アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが4隻

の黒船を従えて、浦賀に来日したときから、日本の近代化への歩みが始まったと言ってよいでしょう。日本は外圧によって鎖国を開き、世界とのつながりが強化されていきました。ここではその開国したばかりの日本に、欧米列強がどのような接近をしていたのかを見ていきます。

初来日の翌年1854年、7隻の艦隊で現れたペリーは、その圧倒的な武力を見つけた砲艦外交を行いました。そして3月には日米和親条約を調印し、下田と箱館の開港を取り付けたのです。8月にはイギリス東インド艦隊のスターリングと日英和親条約を結び、長崎と箱館の開港を幕府は認めました。その年は他にロシアとも日露和親条約を結んだので、あわせて3港を開港することになったのです。翌年にはオランダとも日蘭和親条約を結びました。日米和親条約によって来日したハリスと幕府との間で、通商に向けた交渉が繰り返されました。そして大老に就任した井伊直弼によって1858年6月、朝廷の勅許をえられぬままに、日米修好通商条約が締結されたのです。これに引き続いてオランダ、ロシア、イギリス、フランスの順に同様の通商条約が結ばれていきました。これが安政の五カ国条約と呼ばれるものです。1859年5月に来日した、イギリス駐日総領事のオールコックをはじめ、8月にはフランスの総領事バルクールも来日して、いよいよ日本を舞台にした本格的な外交が始まったのです。

当初各国の対日交渉は、条約を結んだ幕府との間で行われていました。しかし、国内情勢を見ると、日米和親条約の時に老中だった阿部正弘が、慣例を破って朝廷に報告したことなどから、幕府の権力に対する諸大名の発言権が強まってきている時代でした。こうした中で各国の公使は、交渉相手として幕府は本当にふさわしいのか、また条約を履行出来るだけの力を備えているのか、それを互に疑念を抱く必要があることに気付いてきたのです。

イギリスはこうした環境の中で、サトウたち公使館員やグラバーなどの商人の情報によって、幕府の権力が弱りつつあることや、逆に旗本不可能を知った西南雄藩が力を持ちつつあることを知ったのです。それに加え、西南雄藩も外国との通商に熱い希望を持っていることを感じ取ったのでした。こうしたことが明治維新後の明治政府と、イギリス政府との強いつながりを築く礎になっていったのです。

III アーネスト・サトウが大室に来たわけ

1 どうして知ったのか・なにを見たのか

群馬県勢多郡西大室村（現群馬県前橋市西大室町）に大室古墳群があります。ここには前二子、中二子、後二子古墳をはじめ、いくつかの古墳が集まっていて、現在国指定史跡になっています。1878年（明治11）3月、こ

の中の中二子、前二子の岡古墳が発掘されました。これらの古墳は当時、豊城入彦命や御諸分命の墓ではないかと言われていました。そのため、発掘の報告は宮内省に届けられました。このことは5月27日の東京日々新聞にも報道されています。発掘されたときの様子を、群馬県令だった攝政素彦から宮内卿の徳大寺実則にあてた報告から見てみましょう。

本年三月村民南北二陵上ニ於テテ狐ノ巢穴ヲ穿テ偶然石窟ヲ掘出セリ

とあります。つまりキツネ、ムジナの巣穴を掘っていたら偶然見つかった、偶然の発見であると報告されているのです。しかし、西大室に住んでいた井上真弓から菅政友にあてた手紙の中では、

村吏稟の許可を得て二月下旬彼山を開発せむとす。時に参集するもの又増して毎日数百人。三月廿一より四月一日まで三山を開発す。

とあります。県令が宮内省に送った報告とは違う発掘の様子が見えてきます。これによるとこの古墳の発掘は偶然と言うより、かなり計画的に行われたものだったことが見えてきそうです。

1871年（明治4）2月に、后妃、皇子、皇女などの墓の存在の調査を促すために、各府藩県管内に「太政官布告」が出されました。これの一つのきっかけとして、天皇陵などの陵墓の決定に向けて、明治政府による調査が全国で行われました。これを受けた前橋藩では同じ年の6月に、これにこたえるために、総社二子山の取調書が作成されました。この取調書の中では「太政官布告」が陵墓として要求する、図面・石碑・祭日・守護・古文書といったものを総社二子山古墳が満たしていることが報告されました。そして、総社二子山は豊城入彦命の墓であると、前橋藩の見解を伝えたのです。そして明治8年3月、管理人が置かれ、明治9年3月には「官有地第一種山積之部」に編入されたのです。しかし、地元で起こったトラブルなどが原因になって、総社二子山古墳は陵墓としての管理を解かれました。一度決まった豊城入彦命の墓はどこのか、決まった場所はなくなってしまったのです。こうして豊城入彦命の墓は本当はどこなのか探されている中で、西大室の古墳は発掘されたのです。

サトウが大室を訪れるのは、発掘から2年経った1880年（明治13）の3月のはじめです。サトウは発掘調査や出土品の具体的な情報を、親しくなっていた群馬在住の知人から知ったのです。ここでは『日本旅行日記』の中から該当部分を抜き出し、当時の様子を見ていきます。

3月6日

加藤竹斎という画家と私の従者ととも江戸を発ち、熊谷から三里二十九町の中瀬で宿をとった。宿の主人は大変礼儀正しい。

3月7日

十二時二十分前前橋に着き裏手から赤城山がよく見える油屋という旅宿に立ち寄った。若狭の小浜出身の太つて小柄な沖という黒役人が訪ねてきた。その人とは九年まえから知り合いだ。その後長谷川清美という名の書記が私を古墳のある大室まで連れて行く任務を受けてやって来た。徒歩で出発した。今日はよく晴れた暑い日だった。村の役人が道案内に現れ、土地の住人がかたまっでじっと見守っていた。大屋にある鹿堂神社は木花咲耶見売命を祀っており、本殿の中には優れた彫刻がある。この建物はすべて屋根を厚く葺いており、裏手には巨大な岩塊が転がっていたがおそらくこれが神社発祥の由来であろう。狸登真道という名の神官が神社の南方に近いある古墳から出た埴輪類をいくつか持っていたが、中でも最も興味深いのは帽子を被った人間の大きな胸像だ。更に歩いてその種のもを保管してある根岸重次郎の家まで向かった。この男は村の庶務掛である。一通り目を通してから古墳へ行ってみた。全部で三つあるうち二つは既に開口されていた。たくさんの静謐な見物人が群がり二人の警官がいる。宿に戻って夕食をとったがそこでは大いに話がはずみ何もしまま床についた。



明治43年当時の油屋旅館 サトウもここに立ち寄った
〔写真集 明治大正昭和 前橋〕より

3月8日

絵をスケッチしたり、測定したり、みがいたりして一日を過ごし、私のノートブックはスケッチでいっぱいになった。その後狸登のコレクションを見に出かけた。

3月9日

鈴木某という医者が近くの上武士で発掘した古い品物

212

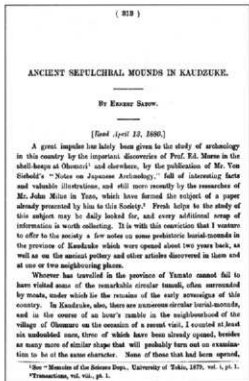
を一つ二つ持っているというので、彼の住む保泉村を經由して帰りの道についた。熊谷の近くにあるさきざぎ茶屋で遅い昼飯を食べ更に先へ進み、鴻ノ巣にある塚本という良好な旅館に宿をとった。

3月10日

早朝出発し十一時には板橋について昼食をとり、その後古墳があるといわれている白山権現に立ち寄った。しかし塚本があったが墓らしき様子には見えなかった。掘ってみなければわからない。最後の三日間は神経痛に悩まされた。

忙しい公使館員としての仕事の合間をぬって、東京から4泊5日をかけて前橋の大室を訪れたのです。旅行中の日記の記載はとても短いのですが、ここからはサトウの旅の概要をつかむことが出来ます。

サトウは大室で調査してからおよそ1ヶ月が過ぎた、1880年4月13日に日本アジア協会在会においてその模様を講演しています。その時の講演内容は紀要のvol.8 part3に「上野地方の古墳群」(Ancient Sepulchral Mounds in Kaudzuke)として収録されました。



〔日本アジア協会紀要〕vol.8に掲載されたサトウの論文

2 何を考えたのか

この紀要に掲載されている論文は英文ですが、加部二生氏の「アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」の学史的立場」の中で翻訳されていますので、これを通してサトウが発表した内容を見ていきましょう。



Fig. 1



Fig. 2

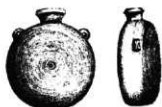


Fig. 3 SDEVIEW OF Fig. 3



Fig. 4



Fig. 5



Fig. 6



Fig. 18



Fig. 17

Fig. 16



Fig. 15



Fig. 14

「上野地方の古墳群」のイラスト(1)

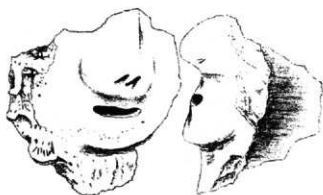


Fig.19

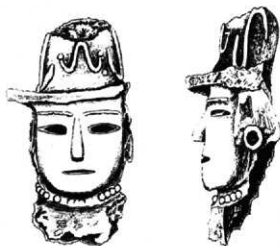


Fig.36

「上野地方の古墳群」のイラスト(2)

まず、文頭でエドワード・モースやフォン・シーボルト、ジョン・ミルンたちによる、日本の考古学についての先行論文を挙げ「これらの課題は従来の研究に新しい指針を与えるもので、次々発表される断片的な資料を蓄積することにより、この国の歴史が見えてくるといえる。本稿でとりあげる、約2年まえに発掘された上野地方の古墳や、付近の出土遺物について報告することも、こうした確信に基づいている」と述べて、サトウが大室の古墳の報告で目指した方向が語られます。

続いて大室村の散策では「6基の確実な古墳と、おそらく古墳と思われる塚を6ヶ所確認」していると、周辺の環境について語っています。そして前方後円墳の形や大室の各古墳の詳しい大きさを報告しています。また「絵をスケッチしたり、測定したり、みがいたりして一日を過ごし」た成果として、34点の遺物の重さ、大きさなどを発表しています。これらは前二子古墳の出土遺物だったようです。またこの時のスケッチが清書されたものも日本アジヤ協会の紀要に掲載されました。さらに友人に頼んで、ガラス小玉やペンガラを化学分析にかけた成果も報告もしています。

こうした客観的な事実が語られた後、これらの古墳に埋葬された人物について考察がされていきます。サトウは「日本書紀」に注目します。この中で崇神天皇が、二人の息子が見た夢をもとに、皇位をどちらに継がせるか、占ったという話があります。その夢の中で、兄である豊城入彦命は武器を使ったために東国経営に向かい、弟が皇位を継ぐことになったことに注目したのです。

そして豊城入彦命の子孫の御室別皇子が埋葬されたのが中二子古墳であるという地方伝説が確かであるとするならば前二子古墳が「おそらく豊城入彦命の墓であろう」という日本の考古学者の推測は容認の価値があると考えたのです。

しかし一方で「私は、日本の年代の正しさを支持するとは出来ない。こうした古墳の正しい年代観は、考古学者によって決定されねばなるまい」とも報告しています。歴史を見ていくには、文献だけではなく、考古学にも期待を寄せているのです。

また埴輪の起源についても、殉死の問題と織りまぜて、「日本書紀」の中から考察しているのです。

こうした報告からは、サトウが実証主義的な考えに立って書かれていることが見えてきます。サトウは大室において、積極的にフィールドワークを行い、実物に触れています。そして堪能な日本語を活かして、当時まだ英訳されていなかった「日本書紀」を読みこなし、その中から大室の古墳の起源や埴輪の由来などを抽出したのです。こうした総合的な研究によって、大室の前二子古墳が豊城入彦命の墓であると評価していったのです。

3 大室で何が知りたかったのか

サトウは大室の前二子古墳を豊城入彦命の墓として認めることで、「日本書紀」の内容の信憑性について考えようという思惑があったようです。「古事記」や「日本書紀」では、神武天皇の登場から神話でなくなり、歴史が始まります。しかし、サトウは「古事記」や「日本書紀」の「記述に従うにしてもその趣旨は日本の歴史的事実を理解する上で便利であるからでしかないものであって、かの太陽の女神と須佐之男命の両者を歴史上の人物として把握してもよいように考えられる」と述べているのです。つまり天照大神や須佐之男命のモデルになった人物が実在した可能性を認めているのです。

しかし一方で「今日の日本人のいうところによれば、現存する記録類は歴史開始時よりもかなり後代になってから作成されたもので、歴史は神武天皇が即位した西暦前660年にはじまるとしている。ところが著名な年代記における四世紀末までの歴史は明らかに架空であり、最も初期の実録でもせいぜい八世紀の初頭のものである。しかし先述のように日本人にとっては神話も歴史も区別がなく、この問題を研究している西欧の多くの著述家ですら考えられない年代や信じられない伝説、そしてその他のつづまのあわい矛盾を疑いのない真実として固く認めている」と当時の人々の歴史に対する年代観については疑問を投げかけているのです。

サトウは「日本書紀」をこうして資料批判をした上で、その資料の価値を認め、それを明らかにするために、関係のある場所に赴いているのです。サトウの前二子古墳の調査の手法は、現在の考古学に深く通じていますが、サトウが目指したものは、文献を通して天皇を見ていく日本の歴史研究でした。

IV アーネスト・サトウの日本研究

1 イギリス外交と『英国策論』の影響

アーネスト・サトウは1866年（慶応2）3月から5月にかけて、「ジャパン タイムズ」(Japan Times)という新聞に、3回に分けてイギリスを寄せています。この新聞は、当時横浜の外国人居留地で読まれていたものです。この文章にはサトウの名前は書かれていませんでした。しかし、その後翻訳されたものが出回った時には、『英国策論』とタイトルが付けられ、『英国士官サトウ著』と、著者名もつけられていたのです。この『英国策論』によって、サトウは西南雄藩や倒幕の志士に、同志として認識されました。宇和島藩を訪れた折には、前藩主の伊達宗城に『英国策論』を読んだことを伝えられているのです。

さて、では『英国策論』の中でサトウはどのような主張をしているのでしょうか。ジャパン・タイムズに載った原文と、和訳された『英国策論』から見てみましょう。

We must give up the worn-out pretense of acknowledging the Tycoon to be sole ruler of Japan, and take into consideration the existence of the other coordinate powers.

「今我レ大君ハ日本ノ君主ト言シ偽リヲ知レリ其故ハ外ニモ彼ト権勢ノ同キ者数多アルヲ以テ也」

ここでサトウは大君つまり将軍を、一大名として見ることで、大君が日本の君主であるということを否定しようとしていたのです。

このように、倒幕を目指す西南雄藩にとって、サトウの書いた「英国策論」は、とても魅力的なものでした。「英国策論」という名前からもわかるとおり、これが市中に出回ったときには、イギリス公使館を代表する意見として、勤王・佐幕の両側から思われました。

「遠い崖」で萩原延壽氏が指摘しているとおり、この論文を書く数ヶ月前には、サトウのところに多くの人が訪ねていました。「訪問者の多くは大名の家来であった。わたしはかれらのなはなから、外国人は将軍を日本の元首と見なすべきではなく、いずれ天皇との直接の関係をもつようにならなければならない、という確信を日ごとにつらよめた。これらの人々を通して入手した公文書の写しからみても、将軍自身が、自分は天皇の第一の家臣以上の何者でもないとかんがえていることは、あきらかであった。」と日記に書いていて、サトウが討幕派の人々と深く関わっていたことが表れています。

この論文が掲載されたときに、署名がなかったことは、英国領事館員であるという身分を、サトウが隠しておきたい理由があったからではないかと思われる。それはサトウがこの論文の中で語る意見と、当時のイギリス公使館を代表する意見、つまり公使であるパークスの意見には大きな違いがあったからです。このことはサトウも分かっていたようですが、「そんなことは、もちろん私の関知するところではなかった」、と当時の心境を振り返っています。さて、では当時のパークスの意見とはどのようなものだったのでしょうか。「英国策論」が掲載されるおよそ一ヶ月前、1866年2月28日付で、パークスがイギリスにいるハモンド外相へ送った半公信に、その意見がよく表れています。

「現在、将軍はわれわれにたいして誠意をもって行動しているとわたしは思う。その理由は、おそらく、こうである。将軍は大名たちと対立関係にあり、さらに、天皇を味方につける努力もしなければならぬが、それを考えると、諸外国のあいだに友人をつつこと、すくなくとも敵をもたないこと、その利点を将軍が知っているからである。」

「さらに、わたしは、大名たちを通してよりも、将軍を通して、はるかに多くのことを成就できると考えている。

大名たちの力は、彼らが広範な協力関係を結ぶ場合のみ巨大であるが、相互のあいだの嫉妬心と不和のために、その実現は容易ではない。」この半公信からは、この当時パークスは西南雄藩よりは幕府への期待が大きかったことが見てとれるのです。

サトウは「英国策論」がイギリス公使館の意見であると、世間ではきこえられていることに対して、上司パークスの耳には入らなかったようだと振り返っています。また、その一方で「1868年の初めに樹立された新政府とイギリス公使館との関係に、その影響がないでもなかったことは十分に想像されよう。同時に、大君の政府が存続していた間は、政府が多かれ少なかれ「疑惑」の目をもって私たちを見ていたことは、疑いもない事実」であったとも振り返っています。サトウは、自分の書いた文章の意見が上司の意見とは違うことを分かっていたが、自分が日本人の友人知人を通して集めた情報に基づいて、正しいことを強く信じていました。また、結果としてイギリス政府が明治新政府との間で、より良い関係を築けたことも自負していたようです。一方、こうした意見を持つサトウの有能さを見抜いて、重用していく上司としての能力を、パークスにも評価するべきでしょう。

一方、フランス公使であったロッシュは、徳川慶喜の能力を高く買い、あくまで、幕府を中心とした体制を強化していこうと、心を砕いていました。ロッシュがこうした行動を取るようになった原因としては、サトウのように日本語を巧みに操って、勤王・佐幕両方の意見を聞き、分析できるような部下を持てなかったことが挙げられます。

ちなみにイギリス公使館で様々な政局観察がなされている中の1866年3月7日、薩長連合ができました。

2 神道研究

サトウの言論活動は主に日本アジア協会において行われていました。1872年（明治5）から1899年（明治32）の間に、サトウの論文は、22本も日本アジア協会紀要に納められています。それは多くの分野を対象とした研究の成果であり、サトウの日本研究の幅の広さ、奥行きを物語るに足ります。この中には2本の神道研究の論文が含まれています。一つは1874年（明治7）に口頭発表した「伊勢神宮」(The Shinto Temples of Ise)、もう一つは「純粋神道の復活」(The Revival of Pure Shinto)です。「伊勢神宮」の中では、内宮、外宮の由来、場所、建物の解説の他、「大祓」など神道自体についても多少触れています。この発表の後、この発表を聞いていた日本アジア協会会員による神道への様々な発言があったようです。サトウはこれに応えるべく翌年一つの論文を仕上げました。それが2本目の論文「純粋神道の復活」です。これは98ページにも及ぶ大作です。この中でサト

アーネスト・サトウの「日本アジア協会紀要」(The Transactions of the Asiatic Society of Japan) 掲載の論文

掲載年	タイトル	
1	'Notes on Loochoo'	「琉球の覚え書き」
1874	'The Geography of Japan'	「日本地理」
3	'The Shinto Temples of Ise'	「伊勢の神宮」
4 1875	'The Revival of Pure Shinto'	「純粹神道の復活」
5	'Observations upon the Causes Which Led to the Downfall of the Christian Mission in Japan'	「日本におけるキリスト教布教の急激な没落の原因の観察」
6	'The Introduction of Tobacco into Japan'	「日本への煙草の導入」
7	'The Korean Potters in Satsuma'	「薩摩での朝鮮陶工」
8 1878	'The Use of the Fire-Drill in Japan'	「日本での火鋸臼の使用」
9	'Notes of a Visit to Hachijo in 1878'	「1878年の八丈島訪問の覚え書き」
10	'The Climate of Japan by Dr. J. J. Rein, Professor of Geography at the University of Marburg, Germany'	「日本の気候 J. J. Rein 博士(ドイツ・マールブルク大学地理学教授)の翻訳」
11	'Ancient Japanese Rituals'	「古代日本の儀式」
12	'Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586'	「1550年から1586年の山口での教会の移り変わり」
13	'On the Transliteration of the Japanese Syllabary'	「音訳する上での日本語の音節」
14	'Ancient Japanese Rituals.—Part II. (Nos. 2, 3 and 4)'	「古代日本の儀式 2」
15	'Reply to Dr. Edkins on "Chi" and "Tsu"'	「[チ] と [ツ] のディキンズ博士への返答」
16	'Ancient Sepulchral Mounds in Kaudruek'	「上野地方の古墳群」
17 1881	'Ancient Japanese Rituals.—Part III. (Nos. 5, 6, 7, 8 & 9)'	「古代日本の儀式 3」
18	'Notes on Dr. Edkins' Paper "A Chinese-Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century"'	「ディキンズ博士の論文『15世紀の中日用語』についての注釈」
19 1882	'On the Early History of Printing in Japan'	「日本の出版の初期の歴史」
20	'Further Notes on Movable Types in Korea and Early Japanese Printed Books'	「韓国と古代日本の印刷本の活字の更なる覚え書き」
21 1885	'Notes on the Intercourse between Japan and Siam in the Seventeenth Century'	「17世紀の日本とシャムの交際の覚え書き」
22 1890	'The Origin of Spanish and Portuguese Rivalry in Japan'	「日本におけるスペイン、ポルトガル競争の起源」
23	'The Jesuit Mission Press in Japan'	「耶穌会士日本通信」
24 1899	'The Cultivation of Bamboos in Japan'	「日本での竹栽培」

参考文献

横浜開港資料館 2001 『図説アーネスト・サトウ』 有隣堂

Edition Synapse 1998-2001 'Collected Works of Ernest Mason Satow Part 1, 2 "Collected Works of Japonologists"'

アーネスト・サトウ (坂田肇一訳) 1960 『一外交官の見た明治維新』上下 岩波書店

B. M. アレン (庄田元男訳) 1999 『アーネスト・サトウ伝』 平凡社

ウは神道の由来、「古事記」、「日本書紀」などについて触れています。そして神道研究を盛んに行った国学者の契沖、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤などの経歴と著作、考え方などについて、正確な日本語能力を持って解説したのです。

これらの論文を書いた目的は「神道について近代の作家の学風によって考えられた意見をいくつか説明することなので、いずれが神道の本質なのかを決定しようとするものではない」としています。そして、「古記録の絶対真実性、不可思議、超自然を基礎としているような彼等の理論は信頼がおけない」とも語っています。神道の本質や起源は普通の歴史研究の基準で決めるべきかどうかというのがサトウの意見だったのです。サトウの神道研究は、科学的な解釈によって神の国と言われてきた、日本の古代を明らかにしていく必要を説いたものでした。

3 国内旅行による風土と歴史の理解

1858年(安政5)の安政五カ国条約では、居留地から10里四方の「遊歩」以外は、外国人が日本内地へ旅行する自由が認められていませんでした。

これを不満として、欧米諸国の外交団は日本側との交渉を行っていきます。そしてようやく1874年(明治7)、「病氣療養」と「研究調査」という条件付きで、外国人の日本内地の旅行権を獲得したのです。こうして日本の奥深くまでわけいる外国人が増えってきました。

サトウはそれ以前から外交官という立場で、様々な機会に日本国内を公務で旅行していました。1回目の来日時の国内旅行のほとんどは、そうした公務による情報収集の旅でした。

2度目の来日以降の旅は、もちろん仕事に活かす意味もあったでしょうが、そればかりではなく、日本を理解するため、また余暇のために旅行を繰り返していたよう

です。

彼のこうした旅行で得た、風土や土地の歴史への認識は「伊勢神宮」(Shinto Temples of Ise)や「1878年の八丈島訪問の覚え書き」(Notes of a Visit to Hachijo in 1878)などのように、「日本アジア協会紀要」などで紹介されたものもありました。しかし、サトウのこうした旅行は、第1節でも述べた1881年に出版された「中部・北部日本旅行案内」(A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan)に集大成されました。

この本が出版されたとき、横浜の英字新聞では「ヘボン博士の『和英語林集成』が日本研究の基部に位置するとすれば本書はまさにその頂点に立つ」と評価しています。さらに「本書は日本に関する百科事典といえよう。今後は本書を持たずに国内旅行に向かうことはないであろう。そんなことは富士山に裸足で登山するようなものだ」とも評価され、このガイドブックの評価がとても高かったことが分かります。この本を翻訳した庄田元男氏は「内容は各地の地理的案内にとどまらず当該地域の歴史と伝説や民話を豊かに加えて自然と人文の両面から地域を分析した「地誌」として有用な説明となっているとともに、さらに幕末から明治にかけての日本各地の変遷、すなわち例えば神仏分離と鹿弘脱釈、武家社会の崩壊、新しい産業の勃興と近代化、新道・架橋の建設など交通事情の飛躍的發展一などが正確に描写され、現在から見て誠に貴重な歴史的資料として評価」しています。実際、数字の上から見ても「日本アジア協会紀要」の最初の10巻には146本の論文が収められていましたが、その内の25本が日本国内の紀行文でした。それが次の10巻になると107本の論文中、4本のみと激減してしまうのです。これはサトウの「中央部・北部日本旅行案内」が出たことの影響が大きかったことを物語るのかもしれない。

サトウは、日本を理解する手だてを、歴史書や政府から入ってくる情報だけに頼るのではありませんでした。自らの健脚を活かして、まだ外国人を見たこともない人々がほとんだった、日本の奥地へ分け入ることによって求めていったのです。こうしたフィールドワークの積み重ねが、サトウの日本理解の横糸として働いていきました。そして、第2版ではその序論として、「神道」や「仏教」などサトウの神道研究や、歴史研究の成果が縦糸として加わりました。このガイドブックは、こうしたサトウの日本研究の縦糸と横糸が編み合わされた、日本理解の集大成と考えても良いものに仕上がっているのです。

4 サトウの周辺のジャパノロジスト

サトウのいたイギリス公使館はパークスの元で様々な日本研究が行われていました。当時の日本アジア協会の会員は、公使館員と牧師が中心であったこともこれを裏

付けています。サトウと並んで日本研究者(ジャパノロジスト)として有名なのはウィリアム・ジョージ・アストン(William George Aston)とバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)が挙げられます。アストンはサトウと同様に公使館に通訳官として勤務していて、「日本書紀」の英訳で知られています。一方のチェンバレンは来日後、お雇い外国人として、海軍兵学寮に語学教師として入り、帝国大学文科大学の博言学、日本語学の教授となった人です。彼は「古事記」を英訳し、また、「日本事物誌」(Things Japanese)の作者としても知られています。この本はサトウの「中央部・北部日本旅行案内」が質的に発展したものです。それというのも、サトウのガイドブックは、サトウが日本を去ってしまったため、第3版以降はチェンバレンに引き継がれたのです。チェンバレンはこのガイドブックの序論を「日本事物誌」として「話題」の案内書に仕立てました。そしてガイドブックは「日本旅行案内」(A Handbook for Travellers in Japan)として「場所」の案内書へと発展させていったのです。

こうした人々を中心となって、日本の理解を促すために横浜で始まった日本アジア協会による、居留地の人々への啓蒙活動は、活動場所を東京に移すころから、より純粋に日本理解のための研究がなされるように変化していったそうです。こうした人々を総称して、ジャパノロジストという言葉が確立しているのです。



バジル・ホール・チェンバレン (横浜開港資料館蔵)

V 教材化に向けて

1 サトウの教材としての価値

平成14年度から小中学校では新学習指導要領に基づく授業が始まります。その中で特に注目されているのは「総合的な学習の時間」であることは、前にも触れました。この時間の中、各学校では「例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする」ことを小学校、中学校の学習指導要領では求められています。

その中でも、国際理解については、小学校から英語の授業をするのかといった議論にまで発展しました。もちろんAET(英語指導助手)を交えて、英語に直接触れていくことも大切な国際理解のための体験になるでしょう。しかし、私たちが国際社会に飛び出たときに求められる国際理解とは、語学力だけでよいか、それだけではなく、私たちが日本人として、自分の言葉で自分たちの国の歴史や文化を語るこそが求められていることは、周知の事実でしょう。私たちが郷土の学習を大事にしないといけないことは、国際理解をしていく、その土台としての役割もあるのです。

では、私たちはどういった見方で、私たちの郷土について学ぶべきでしょうか。外国人が外国を理解しようとしたときには、どういった見方で、文化や歴史を学び理解しようとしているのでしょうか。私たちがそうした理解の仕方を知っておくことが大切でしょう。そこでサトウが大室を通して理解しようとした、歴史認識の方法が大きな参考になるのです。私たちの郷土をフィールドに、その方法を実践しているのですから、サトウが見たかったものについて私たちはすでに郷土の一部としての親しみがあります。また、学習の場に設定しようとしたときに、郷土という行きやすい行動圏内にあるということも、魅力的です。それにも増して、郷土の理解につながる、郷土を愛する心を育むことにもつながっていくということは、最近の状況からは大切なことになってきているでしょう。このようにサトウの方法を学ぶことによって、私たちがグローバル・スタンダードな郷土理解を体験し、国際理解へと広がっていくのです。

2 教材としての活用

サトウの大室訪問を通して、授業を行おうとした場合、小中高校によって、その教材としての活用の仕方は変えていく必要があります。ここでは小中高校ごとに、どういった学習活動が、サトウの理解につながっていくのかを具体的に提案していきます。

小学校においては、特に実物に触れるという、体験学習を中心に据えることが、サトウに近づくための第一歩

になります。そこでまずは遠足などでサトウの訪れた大室を訪れてみるのが大切です。現在、大室古墳群は大室公園としての整備が進められている途中ですが、それぞれの古墳については、その外観を見ることが出来ます。また、中二子、後二子古墳には埴輪が並べられています。そこでサトウと同じように、古墳の外観や、並んで立っている埴輪をスケッチしながら、その特徴を観察することが出来ます。その観察の観点が大切です。サトウと同様に正確に大きさを計ったりしながらその観察を行うのです。その上でどうしてそういう形なのか、こうした古墳や埴輪が必要なのかも想像するのです。こうした時にサトウも論文で引用した「日本書紀」に載っている、埴輪が作られるようになったエピソードを紹介するのも効果的な支援となるはずですが。総合的な学習としてこれらを展開すると、児童の学習の広がり、大室を中心にして多方面に広がっていき、郷土理解へとつながっていくでしょう。そしてさらに国際理解教育としての、自分たちの歴史、文化の学習へと発展していくことができると考えられます。

中学校ではさらに、サトウが訪れた前橋の油屋旅館から大室公園までを、サトウと同じように歩いてみます。歩く前にはサトウの日記を紹介して、サトウが東京からたどった4泊5日の旅をトレースしてみる必要があります。そして自分たちが歩くのはサトウの旅のほんの一部であることを理解しておかないと、大室までの道のりはただただ長いものになってしまう。油屋旅館から大室公園まではおよそ12キロメートルの道のりです。日頃の生徒の徒歩による活動範囲の実体からすると、やや長い距離ですが、途中休憩を入れながら行っても、3時間半ほどで到着できます。

JR前橋駅を8時30分に出発し、油屋旅館前を経由して、三俣から前橋大間々桐生線で大胡方面に向かいます。上泉からは、前橋赤堀線も赤堀方面に向かっていきます。途中で産奈神社を経由して大室を目指します。大室公園で昼食後、古墳群を観察します。帰りは路線バスを利用して、県庁前まで行き、前橋の中央公民館で大室で出土した遺物を見学します。1880年にこうした手間をかけて、東京から群馬まで日本の歴史を知るために訪れた外国人がいるということ、歩いていくという手間を通して体験します。こうしてよりサトウに近い旅を追体験することで、サトウの歴史理解へ向けた情熱の一端に触れることができるでしょう。このことは私たちが外国の文化を理解していくときに、かけなければならない手間はとて大きいことを体験できるはずですが。とかく、文化の表面だけをなぞってその国を理解した気もしになりがちですが、その奥深さを知るためには、真摯な態度をもって取り組まなければならないということも気づかせてくれるはずですが。



前二子古墳



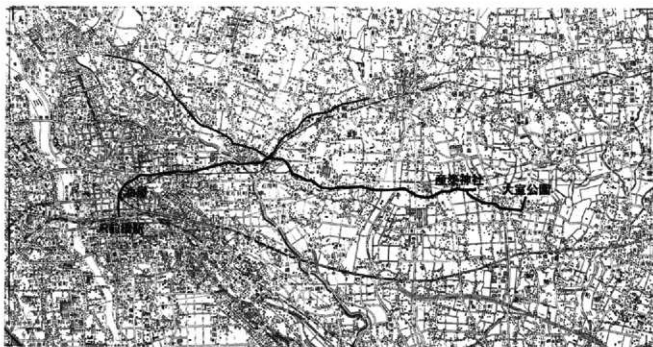
中二子古墳の周りに立っている埴輪群



大室古墳群の案内図



前二子古墳出土の土器（前橋中央公民館）



サトウが歩いた道をたどってみよう

(S = 1 : 50,000)

なお、この論文は平成12年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の職員自主研究活動の成果の一部です。

高校では、出来れば中学校のように歩いて前橋の町中から大室公園を訪れることもしたい所です。さらにこの事前学習として、サトウが大室を報告した「日本アジア協会紀要」の論文「上野地方の古墳群」について学ぶことも加えられます。全体を利用するには長すぎ、また専門性も高くなってしまいうため、一部を利用します。それはサトウが「日本書紀」の記述を使いながら、大室の古墳に葬られた人物を考察していく場面です。専門的な言葉もこの中に多少含まれていますが、それらは註を付けておくことによって学習のつまずきを生むようなものにはならない範囲です。こうした論文を読むことは、生徒の英語読解力の自信につながります。さらに英文の論文の読解を通して、サトウの論理的な考察の進め方を学びながら、さらに様々な分野の学問を通して学際的に実証していく、異文化理解の方法も見えてくることでしょう。その論文の抜粋部分を最後にあげておきます。また、英語では取り扱わない論文の部分についても、国語の古文の時間などを通して、サトウの引用した古典に触れたり、現代文の時間でサトウの考えに迫ることが出来ます。こうした事前学習を踏まえた上で、大室を訪れたときには、サトウと同じ観察の仕方で大室古墳群を観察し、理解を深めることにつながるでしょう。

小中高校それぞれの段階で、それぞれにあった材料を提供できるのが、サトウの大室を通しての歴史研究なのです。幕末に活躍した歴史上の人物が、私たちの郷土を通して日本の歴史を理解しようとしていました。こうした事実子どもたちが出会ったとき、子どもたちには郷土への誇りと、国際理解への道筋が見えてくることを願ってやみません。

おわりに

この中では、サトウという人物像に触れ、サトウの目指した異文化理解の方法について書いてきました。そして最後に、そうした見方を持った学習についての提案もさせていただきます。最近でも国同士お互いの文化や歴史を尊重をおろそかにしているために、多くの悲しい出来事が起こっています。私たちも自分たちの理解している日本を、そのまま世界に当てはめて考えていこうとすれば、そこに異文化である世界との軋轢が生まれてきてしまうことは目に見えています。こうしたときにサトウの日本研究の仕方は、多くの示唆を私たちに与えてくれるのです。そしてそれを教材として活用していくことは、今の教育が目指す生きる力を育むことに大いに役立つものとなるでしょう。

最後にアーネスト・サトウや当時の日本と西欧列強との関係について学ぶ、いくつかの参考図書や、インターネットサイトを、これを書くにあたって参考にした書物などと交えてご紹介します。

アーネスト・サトウについて学ぶためのホームページ

○横浜開港資料館

http://www.kaikou.city.yokohama.jp/

サトウの日記を元にしたサトウ研究の基礎資料がそろっている資料館です。

○「開港の冒険」イギリス外交官アーネスト・サトウの生涯

http://www.02.u-page-so-net.ne.jp/wf6/piccolini/

中学生がまとめたサトウ研究です。資料調査がしっかりされているページです。今後の発展が楽しみです。

アーネスト・サトウに近づくための本

この論文を書くに当たり、ここに挙げた本を参考、引用しました。

アーネスト・サトウ (坂田糖一訳) 1960 『一外交官の見た明治維新』上下 岩波書店

1862年から1869年間の1回目の滞日の時の様子を、晩年サトウが自分の日記を元にした本です。部分が人物像を知る入門書です。

アーネスト・サトウ (庄田元男訳) 1992 『日本旅行日記』1, 2 平凡社

サトウの日記の中で旅行中のものを集めたものです。サトウが旅行中に何を興味を持ったかや、当時の日本の風景も見えてきます。

アーネスト・サトウ (庄田元男訳) 1996 『明治日本旅行案内』上下 平凡社

【中部・北部日本旅行案内】(A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan)第2版の翻訳です。

E サトウ (長岡祥三訳) 1989, 1991 『アーネスト・サトウ公使日記』I II 新人物往來社

1895年から1900年以及サトウの駐日公使としての時代の日記を翻訳したものです。

アーネスト・サトウ 1991 『策論』【日本近代思想大系】1 岩波書店

サトウの『英園策論』の全文と『The Japan Times』に掲載されたその原文を照らし合わせて見る事が出来ます。

筑摩書房 1998～2001 『遠い崖』1～4 朝日新聞社

朝日新聞に連載されたサトウ研究の集大成です。サトウの日記を元に幕末、明治の日本が生きてきたと描かれています。資料的価値はもちろんのこと、読み物としてもとても面白い作品です。

B M アレン (庄田元男訳) 1999 『アーネスト・サトウ伝』平凡社

サトウの死から間もない1833年に、サトウの遺言執行者に依頼されて、法学博士である伝記作家のアレンが、サトウの一生を時間を追って紹介しています。

横浜開港資料館 2001 『開港アーネスト・サトウ』有隣堂

写真資料が多く、視覚的にサトウを捉えることが出来ます。またサトウについての様々なデータが良く集計されています。

庶民堂 1984 『アーネスト・サトウ』『青い日の旅人たち』みやま文庫

「上野地方の古墳群」の主要部分が翻訳されています。群馬県内の大きな図書館であれば手に取ることが出来ます。

A B ミットフォード (長岡祥三訳) 1998 『英園外交官の見た明治維新』講談社

サトウの同僚だったミットフォードが晩年書いた回顧録です。彼はこの本を書くに当たってサトウの日記を書いたそうです。

B H チェンバレン (橋本重敏訳) 1988 『チェンバレンの明治旅行案内』新人物往來社

「日本旅行案内」の翻訳本です。「日本事物誌」とセットでチェンバレンの日本研究が見えてきます。

チェンバレン (高梨健吉訳) 1969 『日本事物誌』1, 2 平凡社

「Things Japanese」の翻訳本です。アルファベット順に日本を知るための物事が並んでいます。

E S モース (近藤義典・佐原真司) 1983 『大森貝塚』岩波書店

1878年に「Shell Mounds of Omori」として発表された論文の謝礼本です。サトウの大家古墳の論文の冒頭で触れられています。

F ディンズ (高梨健吉訳) 【論文】平凡社

サトウの上司、イギリス公使のバークスの日本駐在中の伝記です。

J R ブラック (おぼろさし他訳) 1970 『ヤング・ジャパン』平凡社

1880年に出版された本の翻訳本です。サトウの時代に横浜で『ジャパングゼット』という新聞を作った人物による当時の記録です。

イザベラ・バード (高梨健吉訳) 『日本奥地紀行』平凡社

1878年を来日して、北海道、東北地方を旅しました。この旅行の時にサトウから日本についての情報をもらったことが書かれています。

オルコック (山口光太郎) 『大君の都』上下 中下 岩波書店

絶版です。英国初代駐日総領事だった彼が帰国後記した日本滞在の記録です。豊富な挿絵が特徴です。

ハリス (坂田糖一訳) 1953 『日本滞在記』上下 岩波書店

絶版です。開国後初めて日本に赴任した外交官の下田の日記をつづった日記です。

ヒュー・コータツヴィー・ゴードン・ダニエルズ (大山瑞代訳) 1998 『英国と日本』思文閣出版

イギリスの日本協会の創立100周年を記念して作られた本の翻訳本です。21人の日英の交際となった人々を紹介しています。

ヒューズトン (青木枝則訳) 1989 『ヒューズトン日記』岩波書店

ハリスとともに来日した彼は、日本人に殺害されてしまいました。殺害されるまでの彼の日本の日々が描かれています。

ヘルベルト・ブルジョウ 1999 『ニッポン通』の眼 談文社

この四世紀の間の異文化交流を27人の外国人の目を通して語っています。外国人の日本研究がどういったものが見えてきます

ロレンス・オリファント (岡田章雄訳) 1968 『エルゲン御道日記節録』雄松堂出版

サトウが日本に来るきっかけとなった本の日本について書かれた部分の翻訳本です。

石井孝 『増訂明治維新の国際的場域』吉川弘文館

現在本館には並んでいませんが、サトウの時代の日本を取り巻く環境を調べるには必読の本です。

磯野直秀 1987 『モースのその日 あるいは開港教師と近代日本』有隣堂

サトウが大家古墳の論文の冒頭で触れた、モースの発展について書かれています。

市川清波 (橋本重敏訳) 1992 『幕末欧州見聞録』新人物往來社

サトウが英訳して、海外で紹介した本『尾崎行状録』の現代語訳本です。

加藤祐三 1999 『幕末開港と明治維新期の日英関係』『明治維新と西洋国際社会』吉川弘文館

幕末から明治維新にかけて、日本とイギリスが外交を通して築いてきた親近感が分かります。

川崎晴司 1988 『幕末の駐日外交官・領事官』雄松堂出版

外交、領事関係の歴史とともに、幕末日本を舞台に活躍した外交官、領事官を年を追って整理してあります。

橋本重敏 1886 『オズミはまき生きている』雄松堂出版

絶版です。チェンバレンについて多方面からの研究書です。面白い本のタイトルは彼の回想録の書名から付けられています。

橋本重敏 1998 『イギリス人ジャーナリストの肖像』日本図書刊行会

サトウの書評誌についての論文とオズミとサトウ、アストン、チェンバレンについて著者が書いた論文集です。

佐伯彰一 芳賀徹 1987 『外国人による日本論の名著』中央公論社

1858年から1904年の間に外国人が書いた日本論4編を紹介されています。サトウの「一外交官の見た明治維新」も紹介されています。

杉山伸也 1993 『明治維新とイギリス商人』岩波書店

商人として幕末・明治の政情に大きな影響を与えたトマス・グラバーの生涯が描かれています。

田中彰 1993 『明治維新と天皇制』吉川弘文館

『明治維新と世界史的場域』や『外国人の見た明治維新』など著者の論文集です。

嶋岩宗三 1997 『幕末日本とフランス外交』創元社

ロッシュのフランス外交がどういったものだったのかを徳川慶喜との関係などを交えながら描かれています。

林堂 1995 『愛書家サトウの肖像』『ホルムへの謎』文藝春秋

日本で古書を買収したサトウのエッセイです。

- 野村武一 1998 『ザ・タイムズ』に見る幕末維新 中央公論社
- 薩英戦争が起ったとき、英国議会ではその是非について多くの議論がありました。新聞を通してそれを見たいきます。
- 宮澤真一 1997 『幕末に殺された男』 新潮社
- 生実事件で薩摩藩士によって殺害されたイギリス商人のリチャードソン研究の本です。この事件に触れた来日蘭もないサトウが「不安な気持ちを抑えなかったはずだ」と考察しています。
- 宮永孝 2000 『日本とイギリス』 山川出版社
- 日英の外交史や経済文化の交流を通して400年間の両国の関係が書かれています。
- 横浜開港資料館・横浜居留地研究会 編 1996 『横浜居留地と異文化交流』 山川出版社
- 19世紀後半から横浜は漁港から国際都市へと大きく変化します。そこで繰り広げられた事象の論文集です。
- アーネスト・サトウを知るための論文**
この論文を書くに当たり、ここに挙げた論文を参考にしました。
- 安藤義郎 1982 『日本字の祖アーネスト・サトウの生涯』『経済集志』52(別号2) 日本大学経済学研究会
- 安藤義郎 1983 『アーネスト・サトウの「英蘭策論」』『経済集志』53(別号2) 日本大学経済学研究会
- 安藤義郎 1984 『アーネスト・サトウの「地球に関する覚え書」』『経済集志』54(別号1・2) 日本大学経済学研究会
- 安藤義郎 1985 『アーネスト・サトウの神道研究 『純粋神道の復活』について』『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育第2号 日本大学経済学部
- 安藤義郎 1987 『アーネスト・サトウの平田篤胤研究』『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育 第5号 日本大学経済学部
- 安藤義郎 1988 『アーネスト・サトウの日本研究 『龍摩における朝鮮陶工』』『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育 第8号

- 日本大学経済学部
- 安藤義郎 1990 『アーネスト・サトウの日本研究』『日本における印刷の歴史』『日本大学経済学部研究紀要』一般教育・外国語・保健体育 第11号 日本大学経済学部
- 加藤祐三 2000 『幕末開国と明治維新期の日英関係』『日英交流史』1 東京大学出版会
- 加部二生 1998 『アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳群」の学史的位 置』『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集
- 橋本重敏 1989～1994 『日本アジア協会研究(1)～(7)』『武蔵野女子大学紀要』第23号～第29号 武蔵野女子大学
- 橋本重敏 1990～1994 『日本アジア協会関係年譜・1874～1875, 1877, 1878～1879, 1880～1881, 1881～1882, 1883』『武蔵野英米文学』第22号～27号 武蔵野女子大学英米文学会
- 橋本重敏 1990～1992 『日本アジア協会のこと(1)～(7)』『明治村通信』第240, 241, 251, 253, 254, 260号 明治村東京事務所
- 橋本重敏 1992 『日本アジア協会成立の諸問題』『国際関係研究』国際文化編第12巻第3号 日本大学国際関係学部国際関係研究所
- 橋本重敏 1995 『日本アジア協会の知的波及』『杏林大学外国語学部 紀要』第7号 杏林大学外国語学部

明治期の大室古墳群について書かれたもの

- 斎藤忠 1979 『日本考古学資料集成』2 吉川弘文館
- 斎藤忠 1980 『年表で見る日本の発掘・発見史』奈良時代～大正篇 NHK ブックス
- 斎藤忠 1993 『日本考古学史年表』学生社
- 外池昇 1995 『豊城入部命墓の指定運動』『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館

"ANCIENT SEPULCHRAL MOUNDS IN KAUDZUKE."

By Ernest Satow.

In the "Catalogue of Families," there is abundant evidence to show that at a very early period an offshoot of the imperial family had received the eastern part of Japan for its appanage, and this house seems to have afterwards divided into two branches called Princes (kimi) of Kaudzuke and Shimotsuke, from which sprang many other families. The first ancestor of them all was Toyo-ki-iri hiko, elder brother of the Iku-me-iri hiko, who afterwards became Mikado, and is known in history as Suwi-nin Ten-wau. A legend narrated in the Ni-hon-gi tells how their father loved both in such equal measure that he could not decide which of them to make his heir, and he resolved therefore to let each tell him a dream, from which he would obtain auguries to guide his choice. The two princes, having received his instructions, bathed themselves and said their prayers, and then going to sleep dreamed each a dream. At daybreak the elder reported to his father that in his dream he had ascended a certain hill, and turning to the east, eight times brandished his spear and eight times dealt a blow with his sword. The younger then told his dream in turn. He had ascended the same hill, and spreading a rope on all sides of him, had hunted the sparrows that devoured the corn. From these two dreams it was naturally inferred that the gods intended the elder to be governor of the Eastern Provinces and the younger to be monarch of the whole empire. The latter was therefore recognized as heir to the throne, and the former appointed ruler of the Eastern Provinces. These events took place in the 48th year of Su-zhin Ten-wau, which, according to popular chronology, corresponds to the year 50 B.C., but this date cannot be accepted with any more confidence than, let us say, the year 1184 B. C. for the fall of Troy. The son of Toyo-ki-iri hiko was Ya-tsun-da, who was in turn succeeded in the governorship of the east by his son Hiko-sa-shima no miko, but the latter died on the way, just after setting out from the capital to take possession of his office. The Easterners (some of whom may perhaps have come up to Yamato to meet him) secretly carried off his body and buried it in the province of Kaudzuke. The Ni-hon-gi (from which these notices are taken) goes on to say that Mi-moro-wake no miko, son of Hiko-sa-shima, was appointed in the following year to take his father's place. This event is ascribed to the 56th year of Kei-kau Ten-wau or 126 A.D., according to the same fabulous chronology, and it adds that "the descendants of this prince, who was a wise and benevolent ruler, exist in the eastern provinces to this day" (i.e. some time in the 8th century).

If it be admitted that the local tradition which identifies the central tumulus with the burial-place of Mi-moro-wake no miko is authentic, then the conjecture of Japanese archaeologists that the tumulus in which so much pottery was found is probably that of Toyo-ki-iri hiko, seems worthy of acceptance. On the west of Mahebashii, at the village of Uheno, there was formerly a sepulchral mound said to be that of Toyo-ki-iri hiko, and in Vol. I. of the Kuwan-ko Dzu-setsu Mr. Ninagaha has figured a beautifully shaped vase found in it about the end of the 18th century. The ornamentation of this vase so closely resembles that of the pottery dug up at Ohomuro, that it is impossible not to conclude that the two mounds were constructed about the same period by people of the same race. The burial place of Hiko-sa-shima, whose body was carried off by the inhabitants of this

province, still remains to be discovered. The large number of sepulchral tumuli in this part of the province seems to indicate the site of a town of considerable size, and on the north of the village of Ohomuro in a commanding situation is a piece of ground, where it would not be unreasonable to suppose that the great man of the locality had a fortified residence. It is raised above the fields on the south, west and east sides, and surrounded entirely by what was once a moat. Even in those portions of the moat which have been converted into paddy-fields, the outer bank can still be traced with unbroken completeness. In adopting the view that these tumuli are really the burial places of the above-named heroes of antiquity, I do not at all mean to support the correctness of the Japanese dates, and the true age of the mounds must be determined by archaeologists who can give a well-based opinion as to the probable date of the pottery which they have been found to contain.

"ANCIENT SEPULCHRAL MOUNDS IN KAUDZUKE." : 1880年3月、群馬を訪れたイギリス外交官アーネスト・サトウが書いた古墳調査の論文です。群馬を訪れた翌月「日本アジア協会」で発表しました。これはその一部を抜粋したものです。

Kaudzuke : 上野。群馬県の旧名です。

"Catalogue of Families." : 『姓氏録』と原典には脚注されていますが『新撰姓氏録』のこと。814年(弘仁元)に成立しました。平安左右京、山城、大和、摂津、河内、和泉の1182の氏族の系譜が書かれています。30巻目録1巻で構成されていましたが、現存しているのは抄録本です。

two branches called Princes (kimi) of Kaudzuke and Shimotsuke : 上野君と下野君と呼ばれる2家。サトウは「こうざけ」と発音していたようですが、本当は「かみつけのきみ」という発音です。

Toyo-ki-iri hiko : 豊城入彦命

Iku-me-iri hiko : 活目尊

Suwi-nin Ten-wau : 垂仁天皇『古事記』『日本書紀』で第11代と伝えられる天皇です。

Ni-hon-gi : 『日本書紀』

the 48th year of Su-zhin Ten-wau : 崇神天皇の48年。平成14年のように元号が使われる前の年代表記です。

Ya-tsun-da : 八綱田

Hiko-sa-shima no miko : 彦狭島王

Mi-moro-wake no miko : 御諸別王

Kei-kau Ten-wau : 景行天皇。『古事記』『日本書紀』で第12代と伝えられる天皇です。

On the west of Mahebashii, at the village of Uheno : 前橋の西、植野村。現在の前橋市総社町植野。ここにある総社二子山古墳が豊城入彦命の墓だと言われていました。

Kuwan-ko Dzu-setsu : 『観古図説』は蜷川式胤によってまとめられた図録です。陶芸の名著として知られています。

Mr. Ninagaha : 蜷川式胤(にながわのりたね)。1835~1882。明治の初期に活躍した考古学者です。国立博物館の設置などに尽力しました。東大寺の正倉院の宝物の学術調査をしたことでも知られています。

Ohomuro : 大室。群馬県前橋市西大室町にある大室古墳群のことです。

アーネスト・サトウの旅

西暦	和暦	旅行期間	日数	同行者	行程
1862	文久2	9/8 初来日			
		12/2 12/13	12	ニール他	川崎 江戸 御殿山 愛宕山 王子 十二社の池 洗足の池 目黒不動 浅草観音 神田明神 不忍池 芝神明前
1863	文久3	8/6 8/21	16	パークス	鹿児島 薩英戦争
1864	元治元	7/21 8/10	21	伊藤俊輔、井上聞多、他	那島 伊美 竹田津 那島
		8/29 10/10	43	オールコック他、四カ国艦隊	那島 下関海峡 田野浦 前田村砲台 門司 下関 小倉
1865	慶応元	10/2 10/22	21	パークス	箱船 釜野辺 落部 箱船
		11/1 11/27	27	パークス	兵庫 神戸 摩耶山 大坂 市岡新田 春日出新田 京橋 布引滝 岩屋村 摩耶山
1866	慶応2	12/12 1/16	36		長崎 鹿児島 集成館 宇和島 神野浦 兵庫
1867	慶応3	2/7 2/25	19	ミットフォード	兵庫 神戸 尾崎 大坂 住吉神社 心齋橋 兵庫 横浜
		3/21 3/29	9	ロコック夫妻、マーシャル、アシビノール	横浜 熱海 伊豆山 石橋山 箱根 煙宿
		4/11 5/18	38	ミットフォード	小田原 平塚 戸塚
		5/18 6/3	17	ワグマン	大坂 大坂城
		7/23 8/22	31	パークス、ミットフォード	藤津 土山 庄野 桑名 宮(熱田) 岡崎 吉田 浜松 掛川 島田 舟中(静岡) 蒲原 三島 戸塚 江戸
		8/30 10/16	48	パークス	南都 箱船 新潟 佐渡・夷 相川 七尾 志摩 津幡 金沢 小松 金津 舟中(武生) 中河内 長浜 武佐 草津 伏見 大坂
		11/30 2/16	79	ミットフォード	阿波 土佐 下関 長崎 江戸
		2/16 2/23	8	ウイリス	大坂 大坂城 兵庫 大坂
1868	明治元	3/21 3/31	11	パークス、他	伏見 京都
		1/5	1	パークス	京都 知恩院 御所
1869	明治2	2/24 船報帰国			江戸城
1870	明治3	11/ 船報帰国を終え来日			
1871	明治4	8/22 8/31	10	アダムズ、ヒューブナー	藤沢 小田原 湯本 川越 畑 箱根 沼根神社 總子 大橋谷 芦之湯 船越峠 三島 山中 箱根 経井沢 熱海 江ノ島 藤沢 境本 保土ヶ谷 神奈川
		11/19 11/23	5	佐野、遠山、小次郎	板橋 藤折 大井 川越 松山 湯葉 柳川 上尾 大宮 浦和 蕨 板橋
1872	明治5	1/17 1/25	9	アダムズ	八王子 駒木野 小仏峠 吉野 上野原 猿橋 大月 谷村 吉田 山中 小善地 宮ヶ瀬 保ヶ谷 飯山 厚木 鶴間 長津田 二子
		3/13 3/22	10	アダムズ、ワグマン	大沢 古河 宇都宮 今市 馬渡 中禅寺 東照宮 小栗川 古峰神社 石段 口野野 出渡 葛生 佐野 館林 行田 桶川
		7/12 7/14	3	ハネン、アトキンソン	金沢 横須賀 鎌倉 戸塚 境本 横浜
		9/3 9/6	4	ハネン	神奈川 戸塚 鎌倉 福村ヶ崎 極楽寺 葛西谷 材木座 小坪 寿福寺 頼朝の墓 扇ヶ谷 若宮八幡 江ノ島 竜口寺 江ノ島 岩本院
		11/29 1/14	46	大隈重信夫妻、山尾庸三夫妻、ポイル	横浜 下田 島羽 古市 伊勢宮 宮の矢 大島 友ヶ島 明石 神戸 多度津 金比羅宮 御手洗 釣島 田野浦 下関 六連島 長崎 門司 小田 三田尻 富市 山口 宮島 尾道 神戸 大隈 横本 石清水八幡 京都 大津 石山寺 草津 米原 長浜 新幹線 関ヶ原 瀬井 赤坂 岐阜 輪沼 船久手 馬籠 妻籠 木曾福島 洗馬 塩尻 下諏訪 和田峠 笠取峠 岩村田 道分 経井沢 横川 妙義山 松井田 安中 板鼻 高崎 深谷 熊谷 浦和 東京
		4/11 4/16	6	ハネン夫妻	新宿 田無 小川 船根ヶ崎 青梅 氷川 大菩薩峠 妻坂峠 上野原 吉野 小仏

1873	明治6	11/23	11/27	5	ハネン、アトキンソン	藤沢 一ノ宮 相模川 伊勢原 大山 阿夫狗神社 大山頂上 賢毛 八町ノ台 布川 丹沢 山中 山ノ丸付近 遠見場 大門坂 宮ヶ瀬 鳥屋 関 長竹 根小屋 小倉 馬入川下り 厚木 幸手 宇都宮 大沢 日光 東叡宮 華嚴の滝 中禅寺湖 竜頭滝 戦場ヶ原 湯の滝 湯の窟 中禅寺 日光 野木
1875	明治8	2 / 第2回目の帰朝帰国				
1876	明治9	英国に滞在、暮れに日本に向け出発				
1877	明治10	1/26 34歳で3回目の来日				
		1/28	2/22	26	吉川 (イギリス長崎領事館使用人)	長崎 茂木 阿久根 西方 川内 串木野 市来 壺屋 伊集院 鹿見島 唐代川 重富 加治木 横川 吉田 人吉 球磨川下り 八代 口之津 茂木 長崎 神戸 大飯 横浜 小川 箱根ヶ崎 二俣尾 小菅 大宮磯砂 塩山 甲府 石和 静岡 大月 八王子 府中 新宿 小田原 箱根ヶ崎 箱根峠 佐野 須山 富士山頂 9/12 10/3 22 ディキンズ
		4/17	4/24	8	ディキンズ、ローレンス・チン	熊谷 伊勢崎 前橋 伊香保 藤名神社 浅間山 必桑 赤津温泉 四方 中之条 伊香保 渡川 溝呂木 草城山 日影南郷 白根温泉 白根山 金精峠 湯元 大真名子山 戦場ヶ原 中禅寺湖 日光 鹿沼 古河 市川
1878	明治11	2/10	2/10	1	ディキンズ	横須賀 浦賀
		3/4	3/17	14	ディキンズ、ブラキストン	八丈島 八丈富士 三宅島
		7/17	8/13	28	ホーズ	鴻巣 安中 磯木峠 軽井沢 小諸 上田 田沢 池田 大町 野口 針ノ木峠 黒部 立山下 室堂 吉野 碓谷 船津 大坂峠 高山 幸生谷 野史 日和田 西野 木曾福島 御蔵 本智福島 松本 和田 軽井沢 熊谷 本所 遊井 園府台 神戸 大阪 京都 奈良 三輪 長谷 多武峠 上野 忍谷 高野山 熊野神社 新宮 那智 吉野 上野 奈良 上野 上杉橋 石塚部 桑名 熱田 岡崎 浜松 掛川 三島 横浜 7/26 7/27 2 プライアー 10/18 10/25 8 井上喜久三郎 江ノ島 千住 松戸 小金 利根川下り 津宮 香取神宮 伊能 成田 大綱 笠森 大多喜 小湊 館山麓 金谷 清賀水道 横浜 四日市 津 松坂 山田 伊勢神宮 長島 尾鷲 林 勝浦 周参見 田辺 紀三井寺 和歌山 旗尾 堺 大阪 京都 奈良 大坂 神戸 京都 大津 彦根 宮 瀬戸 多治見 飯田 松本 善光寺 上田 小諸 畑 甲府 樂橋 高尾山 八王子 府中
1879	明治12	5/4	5/4	1	チェンバレン、アトキンソン	熊谷 中瀬 前橋 大屋 大室 伊勢崎 鴻巣 横橋 白山権現 3/21 3/21 1 チェンバレン、ホーズ 弘法大師 梅原敷 3/25 3/31 7 井上喜久三郎 金沢 鎌倉 長谷 榑村ヶ崎 江ノ島 小田原 木賀 大地原 木賀谷 小田原 平塚 横浜 4/25 4/25 1 チェンバレン、ホーズ 矢ノ口 府中 5/2 5/2 1 チェンバレン、ホーズ 鶴見 神奈川 5/24 6/15 23 田無 飯館 大宮 志賀坂峠 十石峠 大日向 板橋 野里 小諸 善光寺 戸部神社 野尻 赤倉温泉 妙高山 新井 船崎 弥彦 新宮 長岡 小千谷 六日町 三國峠 渡川 熊谷 岩槻 古河 栃木 永野 足尾 庚申山 足尾銅山 神子内 日光 裏見滝 中禅寺湖 日光 今市 鹿沼 小山 野渡 中川 磯崎町
1880	明治13	3/6	3/10	5	加藤竹斎	熊谷 中瀬 前橋 大屋 大室 伊勢崎 鴻巣 横橋 白山権現 3/21 3/21 1 チェンバレン、ホーズ 弘法大師 梅原敷 3/25 3/31 7 井上喜久三郎 金沢 鎌倉 長谷 榑村ヶ崎 江ノ島 小田原 木賀 大地原 木賀谷 小田原 平塚 横浜 4/25 4/25 1 チェンバレン、ホーズ 矢ノ口 府中 5/2 5/2 1 チェンバレン、ホーズ 鶴見 神奈川 5/24 6/15 23 田無 飯館 大宮 志賀坂峠 十石峠 大日向 板橋 野里 小諸 善光寺 戸部神社 野尻 赤倉温泉 妙高山 新井 船崎 弥彦 新宮 長岡 小千谷 六日町 三國峠 渡川 熊谷 岩槻 古河 栃木 永野 足尾 庚申山 足尾銅山 神子内 日光 裏見滝 中禅寺湖 日光 今市 鹿沼 小山 野渡 中川 磯崎町

1880	明治13	12/24	12/30	7	ホーズ	行徳 船橋 幕張 千葉 五井 久留里 厩池 天津 江見 布良 館山 勝山 浦賀 横須賀 横浜
1881	明治14	1/15	1/17	3	ホーズ	浦賀 勝山 竹園 水更津 結ヶ崎 五井 船橋 市川
		4/3	4/8	6		川越 富岡 松井田 高崎
		7/14	8/21	39	ホーズ	田無 水川 丹波山 柳沢峠 西保 御岳 馬平 木崎峠 長沢 櫻現岳 敷来石 芝平峠 高遠 伊那 飯田 小川踏峠 和田 青嶺峠 秋葉神社 千瀬 静岡 瀬原 白糸の滝 吉田五合目 浪走 十里木 入穴 身延山 殿沢 奈良田 甲府 富士川下り 三島 箱根
		11/1	11/17	17	葉皇太子子息、ターンブル、アストン	神戸 京都 奈良 飛鳥 大阪 京都
		【中央部・北部日本旅行案内】初版 この年発行				
1882	明治15	2/23	3/1	8	2人の朝鮮人、本岡三郎	小田原 早川 石橋 米神 赤沢山 根府川 江之浦 吉浜 門川 福村 熱海 網代 松原 穴戸温泉 萩 十足 吉田 熱海 日金山 墨本 小田原 藤沢
		5/17	5/24	8	呉鑑	根府八丁 所沢 飯能 赤工 原市場 名郷 妻坂峠 横瀬 秩父 費川 栃木 羅坂峠 釜川 恵林寺 差出 甲府 殿沢 富士川下り 南部 岩間 吉原 沼津 箱根 湯本 神奈川
		8/9	9/6	29	パークス、その娘2人、ウィルキンソン、レヤード他	神戸 大阪 伊勢 名古屋 岩間 三島 箱根 蒲況 深良峠 須山 箱根山頂 須山 深良峠 箱根 二子山 箱根 三島 吉原 大宮 浅間神社 村山 馬返 富士山登頂 小田原 横浜
		11/18	11/30	13		聖橋 勝木 伊勢崎 沼田 中山 大岩 白根登山 香掛 磯水峠 橋名神社 伊香保 水沢 前橋 大岡々 羽生 渡良瀬川
1883	明治16	1月、3回目的職転のため帰国の途に付く				
1884	明治17	1月にシャム総領事に任命される				
		10月、休暇を過ごすため1ヶ月来日				
		10/10	10/14	5	ブランケット夫妻、ガビンス他	宮ノ下 芦之湯 二子山 富士屋 木賀 富士屋 乙女峠 仙石原 東京
		11/8	11/15	8	ハネン	本庄 伊勢崎 大岡々 足尾 赤倉 中禅寺湖 日光 行者堂 女峰山 日光 宇都宮 古河 幸手 岩間 川口
【中央部・北部日本旅行案内】第2版 この年発行						
1906	明治39	10月、北京からの帰国の途上来日				
		10月末	11月初		武田久吉	日光 中禅寺

参考文献

- 新原経典 1998～2001 『遠い旅』 1～14 朝日新聞社
 アーネスト・サトウ (畑田精一訳) 1960 『一外交官の見た明治維新』 上下 岩波書店
 アーネスト・サトウ (庄田元男訳) 1992 『日本旅行日記』 1.2 平凡社
 横浜開港資料館 2001 『図説アーネスト・サトウ』 有隣堂
 B M アレン (庄田元男訳) 1999 『アーネスト・サトウ伝』 平凡社

アーネスト・サトウ関係年表

和暦	西暦	国内主要事項	外 交	サ ト ウ	考 古
天保14	1843			ロンドン、クラプトンに誕生(6/30)	
安政3	1856			ミル・ヒル・スクール入学	
安政5	1858		日米修好通商条約締結、日英修好通商条約締結(8)		尾張国桑春日井郡神領村(現愛知郡春日井市)で、銅鐸1口発見。
安政6	1859		オルコック来日、高輪東禅寺を仮館に決定(6)	ロンドン、ユニバーシティ・カレッジへ進学	
万延元	1860	板田門外の変(3)			
文久元	1861		水戸浪士、英国公使館を襲撃(7)	【エルギン卿遊日使節録】と出会う。日本領事館通訳生の辞令(8)。日本に向け出発(11)	丹波国桑田郡下弓削村(現京都府京北町)で銅鐸1口発見
文久2	1862	板下門外の変(2)、和宮降嫁(公武合体)(3)、島津元元、幕政改革の意見を奉呈。寺田屋騒動(5)、幕府、攘夷の動使奉承を決定(12)	外国奉行竹内保徳、江戸・大阪開市、兵庫開港延期を申し入れるため渡英。オルコック一時帰国(3)、米田前公使ハリス帰国。英国公使館書記官(代理公使)ニール着任(5)、英国公使館守衛、公使の英兵2名を殺害して自刃(6)、生妻事件(9)	北京で中国語学習(4〜)。英国公使館通訳生として横浜着(9)	丹波国多紀郡藤山町古墳群(京都府藤山町)で古墳発見。鏡など土器(3)、宇都宮藩越前守戸田忠恕が山鹿古墳を墓府に献言、翌9月から行い、1865(慶應元年)10月終了した。
文久3	1863	将軍徳川家茂、京都に向け江戸を出発(3)、家茂、文久3年5月10日を攘夷の期限と定めることを奉告(6)、八月十八日の京都政変(9)、七藩落首(10)	長州藩士12名、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼く(1)、老中林小左衛門、3艦(横濱、長崎、函館)の閉鎖を諸外国代表に通告し、在留外国人の退去を要求。長州藩、攘夷の先鋒として、アメリカ商船を砲撃(6)、長州藩、フランス軍艦を砲撃、長州藩、オランダ軍艦を砲撃、長州藩、アメリカ軍艦ワイオミングと交戦して砲北、フランス東洋艦隊の2艦、下関の砲台を攻撃して守兵を擄獲(7)、イギリス代理公使ニール、軍艦2隻とともに鹿児島に向け横浜を出発、薩長戦争(薩摩藩の砲台、イギリス軍艦と交戦し、砲撃翌日に及ぶ(8)、フランス陸軍中尉カミュス、井戸が武(薩摩久良岐郡)で殺害される(10)、薩摩藩、生妻事件の賠償金10万ドルを代理公使ニールに渡す(12)	英国代理公使ニールに従い、交渉補佐のため軍艦で鹿児島に向け航行(8)	伊賀国土土村(現三重県上野市)で銅鐸1口が発見された
元治元	1864	家茂、再び京都に向けて品川を出発(2)水戸藩の勤王攘夷派、筑波山にて奉兵(5)、池田屋騒動、井上聞多と伊勢屋の和平説、幕の会議で不採用となる(7)、蛤御門の変。長州藩主征討の朝命下る(8)	オルコック、帰省(3)、長州藩士、井上聞多、伊勢屋、清英中に幕府の意旨を知り帰国。横濱でオルコックに依頼し長州へ送ってもらう(7)、横濱遊学使節池田長見、外より帰国、鎖港の不可を幕府に通告、英兵来朝4カ国艦隊、下関に向け出発(8)、4カ国連合艦隊、下関の砲台を陥落させる。長州藩、連合艦隊に和議を請う連合艦隊司令官キューパーと議和条約5ヶ条を協定(9)、若年寄酒井忠暉(タダマズ)横濱で4カ国使臣と会見して、下関事件につき賠償金300万ドルの支払い、下関、瀬戸内海他の一帯を開くことを協定(10)、英国陸軍ボールドウィンとバード、織倉八幡宮前で殺害される(11)、オルコック解任帰国。ボールドウィンとバードの殺害者、清水清次を処刑(12)。	オルコックに日本語習得を認められる(3)、井上聞多、伊勢屋と軍艦に同乗し、長州へ向かい、伊勢屋と交友が生まれる(7)、下関回撃のための軍艦で下関に向かう(8)、下関上陸部隊に従軍(9)、横濱帰郷後で日英両軍の合同演習を見る(10)	信濃国川路邑(現長野県伊那市)の古墳付近で土中に1条の朱を発見、近くくろく老人は必ず異物があると云く、朱5数千粒、銅鐸・銅環、刀剣、矛、鏃などが出土した。
慶応元	1865	家茂、長州藩再征討のため、陸路江戸を出发(6)、幕府、攘夷の動使奉承を決定、長州藩再征討のため諸藩に出兵を命令(12)	日本人がヴィクトリア女王の誕生日を祝して台場に英国旗をあげ、祝砲を撃つ(5)、パークス、横濱に着く(7)、パークス、ロッシュ、アメリカ代理公使ゴートマン、オランダ総領事ファン・ボルスブルック、条約締結と兵庫先期開港を要求するため、軍艦9隻を持って兵庫沖に至る。朝議、条約締結、兵庫の先期開港不締結に決定、幕府4カ国使臣に条約締結、兵庫先期開港不締結を告げ、下関賠償金の全額支払いと税関改訂を約束(11)	横濱領事館付「日本語通訳官」就任(4)、箱館へパークスの随行、アイメの村で過ごす(10)、軍艦で兵庫沖へ行く。幕府の条約締結、兵庫先期開港不締結を翻訳(11)	

慶応2	1866	薩長同盟(3)。将軍家茂、大坂城で死去(8)。幕府、将軍の喪を理由に、長州征討軍の休兵を布告(10)。横浜大火(11)	幕府、英米仏蘭4カ国使臣と、輸出の改訂約書を締結(6)。パークス、キング提督と鹿児島で薩摩藩の款待を受ける(7)。老中板倉静(カヅキ)、ロッシュに東艦、大仏館の購入経費を依頼(8)。パークス品川で暗殺未遂に会うが無事(12)	『ジャパン タイムズ』に「英国策論」の1回目掲載(3)。「英国策論」の3回目掲載(5)。横浜大火(8)。日本議の本牧野を焼失(11)。江戸公使館へ転航。パークスの命により日本南部沿岸を回って瀬戸内海経由で戻り各地の情報を収集するために出港。長崎で宇和島藩士井岡と会見(12)	陸前国三本木(宮城県三本木村)で横穴が発見され、珠玉145粒、土壘4個、土器4、50出土。栗田寛「葬礼私考」を記す
慶応3	1867	徳川慶喜、征夷大将軍になる。孝明天皇、崩御(1)。幕府、孝明天皇の崩御により、長州征討軍の解兵を布告(2)。後藤象二郎、坂本龍馬ら、京都で薩摩藩士小松帯刀、西郷吉之助、大久保一藏と会合、王政復古の密約を結ぶ(7)。薩長、倒幕軍兵の順序を約定。薩長芸三藩連盟形成。前土佐藩主山内容堂、後藤象二郎と福岡藩次に命じ、幕府に大政奉還を建議させる(11)。薩長芸三藩と岩倉具視ら、倒幕の勅命降下を賛助。大政奉還(11)。坂本龍馬、中岡慎太郎京都の旅館で殺害される(12)	パークスの横濱邸原因不明の焼失(1)。長州藩士、毛利敬親、三田尻で英国のキング提督と会見。透欧特使徳川昭武派、シーボルト同行(2)。慶喜大坂城でロッシュを引見。ロッシュ薩長二藩と英国の策謀を慶喜に警告する(3/25)。慶喜パークスを引見(4/29)。慶喜オランダ総領事ファン・ボルスブルックを引見(4/30)。慶喜ロッシュを引見(5/1)。慶喜パークス、ロッシュ、ボルスブルックを公式引見(5/2)。慶喜アメリカ代理公使ポートマンを引見(5/3)。英国軍艦イカラス号の水兵2名、長崎で殺害される(8/5)。慶喜、大坂城でロッシュを引見(8/24)。慶喜パークスを引見(8/26)。パークス、ケッペル提督と艦高で、阿波藩主榎重吉を招く(8/31)。パークス、大坂で老中板倉静勝と会見。不祥事をさけるため軍兵の大坂付近搬送を要求(12)	鹿児島で島津久光次男因書、室家新納州郎らと会見。宇和島で宇和島藩前藩主伊達宗隆と会見。宗城から「英国策論」に同調する意見を聞く。兵庫の薩摩藩本陣で西郷と会見(1)。将軍の外国公使謁見の日程確認などのためミットフォードと大坂へ。ミットフォードと薩摩藩小松帯刀と会見。英国が天皇と条約を結んでくれるよう依頼されるが、英国は内政不干渉を表明。会津藩家老親原らと会談して交友を結ぶ(2)。パークスらと軍艦で熱海に向かう(3)。ミットフォードらと大坂に将軍謁見のため向かう。謁見に立ち会い退職(4)。宇和島藩主伊達宗城と大坂で会見。フーズマンとともに、東海道を江戸に向け発つ。掛川で凶徒に襲われる(6)。パークスらと函館に向け江戸を免つ(7)。パークスの命によりミットフォードと七尾から陸路大坂へ。西郷と会見後、将軍の謁見に随行。西郷と再び会見。パークスに随行し阿波藩主との会見を通訳(8)。後藤象二郎とイカラス号事件の話し合いを進め、友好関係を誓い合う。前土佐藩主山内容堂、高知城下の開成館でサトウを引見。長崎で木戸孝允、伊藤博文らと会食。この後イカラス号事件の究明のため長崎に残留。グラバー邸でジョセフ・ヒコから大政奉還の建白書構想を聞くが重要視しない(9)。大坂開港。兵庫開港の準備のため大坂へ出航(11)。薩長の大坂開港協定と会見して、在阪藩兵の大坂付近搬送を要求(12)	北海道小樽港付近で、手宮前洞窟から文字状の鏡面割が発見される
明治元	1868	兵庫開港、大坂開港。王政復古。慶喜、京都より大坂に下る。江戸城二の丸、焼失。三条実美ら5公卿、入京し参内。伏見・鳥羽の戦い勃発。慶喜大坂城を退去(1)。開陽丸で江戸に向かう(1)。五箇書のご誓文。天皇、親政のため京都を出発(4)。慶喜、水戸に向かう。これにより、天皇京都に還幸(5)。浦上村の天主教徒4000余名を、34藩に均置。官制を改定三層を分掌。東久世通暲(ミナトミ)、英米仏蘭伊普の各国使臣に局外中立の解除を要求。奥州列藩同盟(6)。官軍、上野の彰義隊を攻撃。江戸を東京と改称(9)。官軍、会津若松城へ砲撃を開始。明治天皇即位の礼(10)。天皇、京都から東京に向かう。会津藩、官軍に降伏。榎本武揚ら、五後部を奪取(12)	徳川慶喜、大坂城でフランス公使ロッシュ、イギリス公使パークスと会見。下坂の事情を告げる。慶喜、大坂城で仏英米伊普の諸公使及びオランダ総領事と会見。イギリス公使(1)。備前事件(備前藩兵、神戸駅で外国人と闘争)、新政府、外国との和親を布告。フランス公使ロッシュ、江戸城に慶喜を伺い、再参を勧告。慶喜これを拒否。英米仏蘭伊普の6カ国使臣、局外中立を布告(2)。備前事件の責任者、滝野三郎を処刑。堺事件勃発。堺事件により土佐藩士を処刑。パークス参内途中に刺客に襲われる。天皇、ロッシュ、ボルスブルックを常設謁見。パークス慶喜の三枝、林田を乗船に、鹿児島3名を遠島。天皇、大坂東本願寺に参幸し、パークスとケッペル提督らを見送る。パークス前江州を帰る。三条実美、岩倉具視、島田玄。パークスと大坂東本願寺に引見。新面の開港延期とキリスト教禁制の件で論議(5)。大坂督府、艦士平治衛のため医官ウィリスを雇う(6)。浦上村の天主教徒絶分に関する各国領事の抗議に対し、因法により絶分の旨を回答(7)。	日本通商記官就任。パークスに随同して開港との会見を通訳。薩長英米の来訪を受け、幕府と新政府の外交権奪回問題について会見(1)	越前国大石村(現福井県若狭市)で銅鑄2口が発見された。該江国芳川村(現福井県浜松市)で銅鑄2口が発見された。

			大阪を開港(9)、イカス号水兵殺害事件の関係者を処罰、英仏普伊4カ国公使、横浜駐屯外国兵の撤去を日本政府に通告(12)		
明治2	1869	天皇、京都に向け、東京を出発(4)。五稜郭開城、戊辰戦争終結(6)。版権奉還(7)。	東京開市。新潟開港。伊仏蘭語公使、東京で天皇に謁見。英米普露公使、天皇に謁見(1)。英米仏蘭伊普6カ国公使、局外中立の解除を宣言。東久世通暲(ミチト)ら、北独逸邦代理公使フォン・プラントと会い、修好通商航海条約締結(2)	船頓帰国(2)	
明治3	1870	平民の姓を許す(9)。兵制統一、英式陸軍、仏式海軍(10)。新律綱領布告(12)		英国から戻る(11)	備中国大品村津貫貝塚(現岡山県笠岡市)で、土器、人骨発見
明治4	1871	鹿島置島(8)。	パークス帰国(5)。岩倉使節団出発(12)	箱根、熱海、江ノ島へ旅行(8)	横山由清「函古図録」を記す。古器物保存のための大政官布告発布。文部省に博物館設置。
明治5	1872	学制制定(8)。新橋-横浜間鉄道開業(10)。富岡製糸場開業(11)。太湖崩へ(12)	岩倉具視来米団で大統領と会見(3)。マリア・ルーズ号事件(7)。岩倉ら英国ピクトリア女王に謁見、仏大統領と会見(12)	甲州街道の旅(1)。日光へ初めて旅行(3)。樺太買、金沢へ旅行(7)。日本アジア協会第1回例会で「琉球についての覚え書き」発表(10)。伊勢神宮のぞきまわり西園を旅行(11)	仁徳天皇陵が台風で崩壊し長持形石棺発見。奈良県生駒市(現生駒市)で美努連岡瓦の墓発見。富島新板出土
明治6	1873	徴兵令制定(1)。地租改正条例制定(7)。在韓論争、板垣退助ら参議を辞職(10)		中山道経由で東京へ戻る(1)。甲州へ旅行(4)。丹沢へ旅行(11)。	香川津田村(現津田町)の岩岡山古墳発掘(6)。熊本県江田村(現津水町)の船山古墳発掘
明治7	1874	愛国公党結成。「民権議院設立白」提出(1)。佐賀の乱(2)	台湾出兵(5)	日光旅行(9)	大政官達で古墳発掘の際の届出方が発布(5)
明治8	1875	護国律。新聞紙条例公布(6)	英国公使館東京へ移転(4)。江華島事件(9)	船頓帰国(2)。スイス、イタリア旅行(7~1876/1)	遺失物取扱ひ規則発布
明治9	1876	秋月の乱、萩の乱勃発(10)	日朝修好条約調印(2)	日本公使館の2等書記官業務を命じられる(7)	徳川式風「関古図録」刊行開始(3)
明治10	1877	地租軽減(1)。西南戦争(2~9)		鹿児島省、状況視察、西郷と会談(2)。横濱着(3)。甲府旅行(4)。富士登山(7)。群馬、日光へ旅行(9)	モース大森貝塚発見(6/17)。大森貝塚発掘(9~11)
明治11	1878	大久保利通暗殺(5)	関税自主権回復の条約改正方針決定(2)。	横濱買、浦賀へ旅行(2)。八丈島へ旅行(3)。立山、飛騨を旅行(7~8)。英国商船救助の善札のため、済州島、釜山へ(11)	群馬県西大室の古墳群が発掘される(3)。モース大森貝塚について講演(6)
明治12	1879	沖縄草創置(4)	前米大統領グラント来日(6)	大和地方旅行(5~6)。房総半島へ旅行(10)。関西旅行(11)	シーボルト「Notes on Japanese Archaeology」発表(6)
明治13	1880	愛国社、国会期成同盟に(3)	条約改正案を各国公使に交付(7)	長男榮太郎誕生(1)。	
				大室古墳群の調査(3/6~10)。日本アジア協会で「上野地方の古墳群発表(4/13)。	
				長野、新潟旅行(5~6)。朝鮮僧侶から朝鮮語を学ぶ(5~12)。日光旅行(9)。房総半島へ旅行(12)	モース「大森貝塚」邦文発表
明治14	1881	大隈ら参議罷免(明治14年の政変)、自由党結成(10)		木更津旅行(1)。「中部-北部日本旅行案内」出版(3)。南アルプス旅行(7~8)。英国皇太子と関西旅行(11)。発熱発作で寝込む(12)	上野で内閣勸業博覧会開催(3)。ミルン「最近における地質学変化と日本における石器時代」を英国人類学雑誌に発表
明治15	1882	立憲改進黨結成(3)。福島事件(11)		熱海旅行(2)。秩父、甲府、箱根旅行(5)。神戸から東海道を通り、2度目の富士登山(8~9)。伊香保、草津旅行(11)。船頓帰国(12)	
				次男久吉誕生(1883/3)。バンコクへ駐在代表兼総領事として出発(1884/1)。休暇でバンコクから東京の妻、妻を訪ねる(1884/10)。日光旅行(1884/11)。休暇で再び日本へ。箱根日光旅行(1886/6~8)。英国国教会で聖信札を受ける。ウレグアイ代理公使に任命される(1888/10)。モロッコの駐劄特命全權公使として着任(1893/8)。ローの船号を得る(1895/6)。日本に着任(1895/12)。日本勤務終了(1900/	
		以降			

				5)。清国駐劄特命全權大使として 着任(1900/10)。聯軍爆団(1903/1 ～6)。清国勤務終了で帰国途中日 本に立ち寄り久吉と日光旅行 (1906/5)。外交官引退。ハーグの 国際仲裁裁判所の英国代表に任命 される(1906/10)。久吉が植物研究 のため英国滞在(1910/4～1916)。 手元のすべての日本関係蔵書を売却 (1913/1・6)。『一外交官の見た 明治維新』出版(1921)。榮太郎 死去(1925/6)。心不全、脳血栓の ためオタリー・セント・メリーで 死去(1929/8/26)	
--	--	--	--	--	--

参考文献

- アーネスト・サトウ (坂田精一訳) 1960 『一外交官の見た明治維新』上下 岩波書店
- 加藤友康 他 2001 『日本史総合年表』 吉川弘文館
- 高藤忠 1993 『日本考古学史年表』 学生社
- 高藤忠 1980 『年表で見る日本の発展・発見史』奈良時代～大正期 NHK ブックス
- 対外関係史総合年表編集委員会 1999 『対外関係史総合年表』 吉川弘文館
- 横浜開港資料館 2001 『図説アーネスト・サトウ』 有隣堂

高床建物の組立式構造模型の製作と教材化

— 縄文人の木材建築技術から接合方法を学ぶ —

関 俊 明・山 口 邦 弘*

・群馬県太田市立西中学校 教諭

- | | |
|-----------------------|-------------|
| 1 はじめに | 6 教材の活用 |
| 2 考古内容の教材化 | 7 授業実践 |
| 3 桜町遺跡の出土建築部材と復原の取り組み | 8 まとめと今後の課題 |
| 4 指専用資料「縄文人の建築技術」の作成 | 9 おわりに |
| 5 構造模型の製作と周辺資料 | |

— 要 旨 —

これまで、世界最古の木造建築として知られる法隆寺が、古代日本人の技術と知恵が結集された例として、技術教育の面から注目されてきた。技術史とのかね合い中で学校教育で取り上げるにふさわしい題材とされている。法隆寺の例を遙かに遡り、縄文時代に伝統的な建築技法が既に存在していたことを示す遺物が見つかりだしている。縄文の建築部材が、ものづくりをささえる題材として中学校の技術・家庭科教科書にも登場するようになった。埋蔵文化財を学校教育の中で活用することがいわれる中で、「考古学で教える教材」の一つの提案として本取り組みに臨んだ。

本稿の教材開発において、その具体的な開発作業は、遺跡出土の加工痕のある部材を分析集約することで小矢部市に復原された縄文高床建物の組立式構造模型の製作であるが、併せて技術史に関する考古学的な資料を収集し指専用補助資料等を作成し、中学校の技術・家庭科技術分野における教材化を試みた。授業実践をおこなうことを検証手段とした結果、「ものづくりの技術」として授業の中で、生徒は高い興味・関心を示し、技術史・歴史学習の分野で取り上げるのにふさわしい多くの要素を含んでいることを確認できた。構造模型に触れるのは、中学生にとっては社会科の歴史学習の中で学んだ縄文人の暮らしぶりを改めてうかがい知る機会でもある。教材開発の段階において、研究課題の明確化から、構想・計画、研究・開発、試行までの取り組みと活用を本稿では検討することとした。

なお、模型製作から指専案の素案作成とまとめを関がおこない、山口が中学校第1学年技術・家庭科技術分野の教科学習の導入として研究授業を平成13年9月17日に実施した。

キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 日本

研究対象 技術教育、教材模型、古代技術

1 はじめに

日本人くらい木の好きな民族は少なく、木を扱う技術にかけても世界一流であるといわれる。古代日本人の技術と知恵が世界最古の木造建築として知られる法隆寺の例に結果されていることは、広く知られている。それを遙かに遡り、今から4000年前の縄文時代に伝統的な建築技術が既に存在していたことが、今日発掘調査で明らかになってきた。そして、その技術がメカトロニクスやエレクトロニクスに代表されるコンピュータ技術の現代になっても生き続けていることは素直な驚きを感じる。同時にその技術は、材料を接合することで木材を使いこなし生活の中で生かしてきた「ものづくりの技術」として学校教育の中で取り上げるのにふさわしい多くの要素を含んでいる。題材として取り上げるには、中学生にとっては社会科の歴史学習の中で学んだ縄文人の暮らしぶりに加え、当時の建築技術を知る機会になる。縄文時代の建築部材が大量に出土した富山県小矢部市にある桜町遺跡出土の部材加工痕を分析集約することで復原¹⁾され、小矢部市に建てられた復原高床建物をもとに本模型の製作と教材化をおこなうこととした。近年、縄文時代の建築技術については、溝の刻まれた柱痕が見つかった群馬県の矢野遺跡、晩期の草壁が出土した新潟県青田遺跡、加工部材が早期まで遡った大分県横尾遺跡など新しい発見が相次いでいて、考古学的な時代検証も確立されつつあるテーマでもある。

本取り組みの教材としての有効性を検証するために、授業実践の中で検証を試みることにした。模型製作から指導案の素案作成とまとめを関がおこない、研究授業は中学校第1学年技術・家庭科技術分野の教科学習の導入として扱う試みで、平成13年9月17日第4校時太田市立東中学校1年3組において山口が実施した。本稿は、模型の製作と作成準備した資料及び授業に使用した指導案等について掲載するものである。

2 考古内容の教材化

教育実践において、教材開発研究は研究成果の実用化や普及を目指すものである。研究課題の明確化から、構想・計画・研究・開発・試行・改良などの手順を経て開発したものを実用化し、普及するまでの一連の過程を指す。中学校技術・家庭科の技術分野「技術とものづくり」の履修内容には「生活や産業の中での技術の役割」が項目としてあげられている。その技術が生活の向上に大きな役割を果たしてきたことを知らせよう取り扱われている。

今回取り上げる桜町遺跡の縄文高床建物に関しては、中学校社会科歴史学習資料集（読教育図書編集部1998）の巻頭特集に掲載され、また平成14年度版中学校技術・家庭科技術分野教科書（東京書籍2001）に、ものづくり

をさきえる材料として口絵写真に「加工したあとがある縄文時代の出土品」の見出しで桜町遺跡の渡部仕口の出土部材が掲載されている。このことからみて、今日解明されつつある縄文時代の建築技術が学校教育の面からも注目される内容であるといえる。縄文人は豊富な木材資源を駆使して木材を継ぎあわせ、部材を組み合わせる接合の方法で構造物を建てる技術を駆使してきた。このことを中学校技術・家庭科技術分野において、技術史を学ぶことのみならず、改めて今日知られている木材の接合の方法を知り製作品の設計や製作に生かしていけるようにするための直接経験を促すことができる教材の開発研究として本題に取り組むこととした。教材開発においてその具体的な開発作業は、小矢部市に復原された縄文高床建物の組立構造模型の製作であるが、併せて技術史に関する考古学的な資料を収集し、指導用補助資料を作成した。

技術史や埋蔵文化財を授業に取り入れるにあたっては、それらを「教育内容」とするののか、「教育方法」として扱うのか、の議論がある。もちろん、授業における内容と方法は密接に関連しており両者を明確に区別できない場合は多い。技術史や埋蔵文化財を一教材として扱うことに視点をおくことで、埋蔵文化財の活用が授業の中で導入やまとめに有効な題材となりうるわけである。具体的な題材の指導過程の一部に教材として挿入する方法をとる活用方法の一例として、本実践に臨んだ。技術史を取り入れる類型でいえば、「教育方法としての取り上げ」に類別され、技術史上の発見を教材用に集約し、模型製作と「木材の接合」を扱うための活用を本稿では検討した。

3 桜町遺跡の出土建築部材と復原の取り組み

桜町遺跡²⁾では写真1に見るような「渡部仕口」をはじめとする大量の建築部材が出土している。

出土した柱・梁・桁などから建物の軸組の構造が明らかになり、小矢部市では、市内のクロスランドおやべに復原高床建物（写真2、図1）が建てられた。桜町遺跡からは、17種類に分類された古代・中世の継手仕口の「突付」「相欠」「ほぞ」「欠込」「大入」「輪蓮込」「渡部」の仕口と「襖布倉」の短ぎに該当する技法が施されていることが確認されている（伊藤2001）。

建設にあたっては復原実験がおこなわれ、当時使われた磨製石斧の複製品を準備しそれを用いて部材加工が行われた。実験には現代の工具や機械を用いることなく取り組まれた。まず、蛇紋岩の両刃・片刃の磨製石斧の製作、縦斧・横斧の柄の製作、石盤の製作、砥石の準備などが行われた。作業の概要は以下の通りであった。

直径30cmのクリ原木を伐り倒すには5時間の労力を要した³⁾。床板は斧身や木製の楔を使い、打ち割り製材法が



写真1



写真2

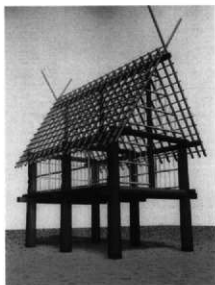


図1 高床建物復元CG/資料提供 上野幸夫

とられた。材の皮むきは製作した木のへらと石盤によった。墨付けは、木炭や赤土や炭を浸した縄を用いた。単位の基準は、縄丈尺とされる35cmを単位とした。道具の効率的な使用法を模索することにも心掛け、特に出土例のない石盤の存在が示唆された。学生40人が取り組み、大型斧の使用は一人3〜5分が限度であったことなども現代人の苦勞といつて良いだろう。150人の市民も参加して「H」型に組み立てた部材は縄を使って建てあげることになった。3本で3トンの重量を大人30人で建てあげた。ほぞ穴を焦がしてあげようと試みるが、効果はなかった。そして、最後に携わった人たちの感想は、「人数だけで出来る仕事ではなかった。棟梁格のリーダーなくしては、これだけの大仕事は為し得なかった。」という。これらの様子は、復原作業のダイジェスト映像などが盛り込まれた映画(22分)「縄文の技―復元石器によって高床建築をつくる―」(財団法人竹中大工道具館2001a)に詳しい。

4 指導用資料「縄文人の建築技術」の作成

(1) 作成のねらい

中学校社会科歴史的分野で、生徒は縄文時代の人々の暮らしについて学習している。また、歴史教科書では高床建物は弥生時代米作りとともに伝わったとされてきたため、生徒のレベルで桜町遺跡の建築部材について、事前に学習されている場合は稀であると考えられる。また、縄文人の建築技術を扱う内容の資料は限られ、専門的で学術的なものが多い。そこで、縄文時代の木材加工や建築技術の概要を把握するのに適した情報をまとめ、指導用の参考となる資料を作成した。

作成にあたっては、中学校社会科歴史的分野で学習する内容を確認できること、縄文時代の技術と現代の暮らしの中で見つけた技術と対比させることで技術教育に内容を繋げられるようにすることなどに留意した。

(2) 作成方法

- ・文中に挿入する写真や図は、提示用資料として別途デジタル化しておく。
- ・生徒用資料へも活用できるように文章は平易な表記とする。
- ・身近な例として受け止められるよう、県内の事例を取り上げるよう努める。
- ・体裁：B5判、ワープロ横書き、11ページ。

(3) 内容

以下に「縄文人の建築技術」の項目を示す。

目次

- I 社会科歴史で勉強した〈縄文人の暮らし〉はどんな内容か
- II 遺跡から見る縄文建築事情とは
 - 1 建築部材が100本以上も出土―縄文人のイメー

ジが変わった一・富山県桜町遺跡

- 2 縄文時代の草壁が見つかった・新潟県青田遺跡
- 3 国内最古の建築部材と判明・大分県横尾遺跡

III 群馬県でも見つかっている掘立柱の跡とは

- 1 縄文時代の直径1mの大きな柱穴
- 2 長野原一本松遺跡の掘立柱建物
- 3 横壁中村遺跡のウッドサークル
- 4 月夜野町の矢瀬遺跡

IV 高床建物構造模型を組み立てよう一桜町遺跡の復原建物から一

- 1 <組み手>= <継ぎ手>と <仕口>
- 2 <相欠き継ぎ手>・<渡髭仕口>・<通しほぞ>
- 3 復原製作作業から

IV くらべてみよう縄文時代と現代の技術

- 1 現代の加工方法を見てみよう
- 2 縄文人の技術に注目
 - その1 木の組み合わせの工夫
 - その2 切り倒したり仕口はどうやって加工したのか
 - その3 切り倒してからどうやって木を運んだのか
 - その4 長持ちさせる工夫
 - その5 縄文人の知恵と技術から考えてみよう

VI 現代人に求められる知恵と技術とは

- 1 貝塚と最終処理場
- 2 縄文人から将来のヒントがもらえないか

(4) 利用方法

主な利用方法を以下のように想定した。

- ①教師用指導資料 ア教材研究用の参考資料 イ板書提示 ウ写真拡大提示
- ②生徒用配付資料としての利用

5 構造模型の製作と周辺資料

(1) 桜町遺跡の復原高床建物と組立式構造模型仕様

模型(写真3)の製作にあたっては、等角図で描かれた桜町遺跡高床建物「建て方図」を参考に、棟木高7.648m・間口3.850m・奥行6.300mの実寸法を、柱芯心それぞれ8m・4m・6mに置き換え基準寸法とした。基準寸法をもとにした10分の1の組立式構造模型の仕様と製作手順について以下、簡条書きで、またあわせて、写真により加工部材についての説明を記す。

- ・材は和タモ材 t=40の板材を用いた。
- ・電動丸鋸等を用いて材の切り出しをおこない、板材の表裏に墨打ちして芯出しをおこなった。
- ・墨線を目安にし丸棒に削りだし、小口にスコヤと指金をあてがい交差する芯の墨打ちをして柱材の材料取りとし、その後各組み手の部材加工をおこなった。
- ・桜町遺跡高床建物「建て方図」を参考に仕口加工を選

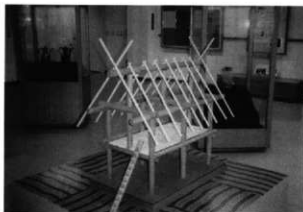


写真3

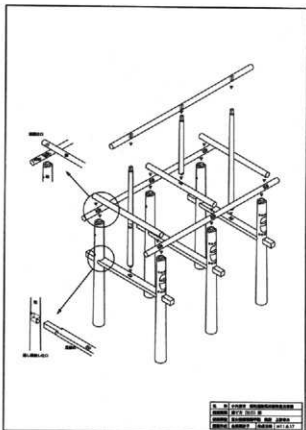


図2 桜町遺跡高床建物「建て方図」
図面調整/上野野夫 作図/金岡美砂子

- 択した。取り入れた技法は「渡髭仕口」「通し納」「留め納」「包み込み納」「相欠き継ぎ」である。
- ・部材加工に使用した工具は、主に副付鋸と突き鑿及び電気ドリルである。
- ・屋根の垂木に相当する部分は市販のラミン径12mm丸棒を使用し、木ネジで閉鎖できるようにした。千木については、桜町遺跡の出土例にはないが、復原高床建物に従い採用した。

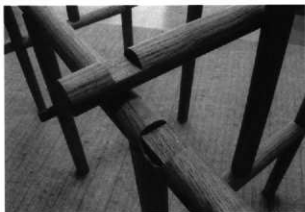


写真4



写真8



写真5

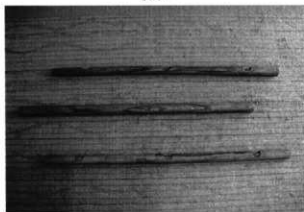


写真9

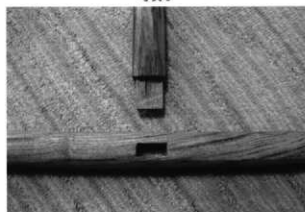


写真6



写真10

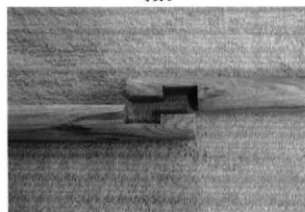


写真7



写真11

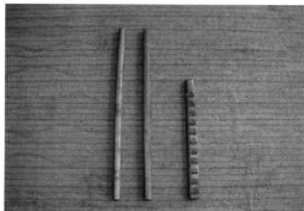


写真12

- 床材については、市販の $t=12$ の鋼材を用いて4枚で床面が組み合わされるようにした。
- 柱材を固定する柱穴の空いた台については $t=4.5$ ベニヤ板と板材で作製し、マットを載せる構造とした。
- 持ち運びができるよう、3つ折れの台を別途作製、収納袋を準備した。
- 組み手の接合部分互いの材すべてに、数字打刻ポンチで打刻した。このことで微妙な手作りの誤差からくる組立の不具合を解消し組立がおこなえるようにした。

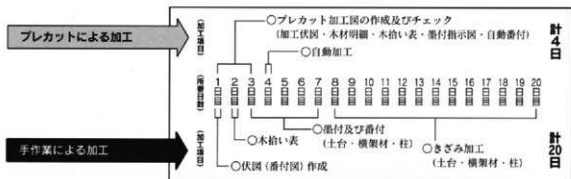


図3 プレカットと手作業による工期の比較 (40坪の住宅の例 平方木材株式会社営業資料より)

20日で仕上げる仕事が、4日で仕上がる計算で、実に5倍のスピードである(図3)。しかも、精度は部材を組み合わせて誤差0.5mmという。現在、県内でも在来工法の6割がこのプレカット工法により加工されている。このコンピュータ管理された加工方法は、導入されて15年ほどになる。

主に「蟻仕口」「鎌仕口」「胴差し」などの数種類が加工されていて、数十秒単位で1つの仕口加工が完成する。プレカット部材の構造模型を準備し、本教材化の中で生徒提示用として活用を図る。

また、提示資料としての活用を図るために、工場での加工風景を撮影した動画資料(写真13は同風景)を作成

写真4の「渡部仕口」は、梁と軒桁の組み合わせの6カ所に用いた。写真5は、柱と大引を組み合わせる「通し納」である。「包み込み納」に加工し、6カ所に用いた。写真6の束柱と大引2カ所・束柱と梁1カ所・棟木と束柱3カ所には「留め納」を用いている。写真7は、棟木と桁(1カ所)に用いた「相欠き鎌ぎ手」。写真8は垂木に対応する。特に両端の1対は屋根の棟木よりも出っ張っている千木である。千木は古代より大社殿など格式の高い建築に用いられてきた様式である。桜町遺跡では出土していないが復原高床建物に採用されており、構造模型にも採用した。2本のラミン棒を木ネジで留め閉鎖式にした。写真9は、上は桁で一本もの。中央が棟木、下が桁でそれぞれ「相欠き鎌ぎ」を用いている。写真10は、大引と柱を「通し納」で組み合わせた状態。両端の束柱を「留め納」で組み合わせている。写真11は床材。模型では市販の板材を用いたが、出土例では楔を用いて加工した板状のものが見つかった。写真12は梯子と2本の補助材である⁹⁾。

(2) プレカット模型と動画資料

前橋市天川大島町の平方木材株式会社プレカット部の小野京一氏を訪ね資料収集を行った。工場では40坪の住宅なら3棟分を1日で加工可能だという。一般に大工が

した。デジタル8mmカメラで撮影したものを46秒の動画ファイルにパソコン編集⁴⁾(容量1.6MB)した。教材用に入手したプレカット部材は、写真14が「鎌ぎ」、写真15は「蟻仕口」である(金谷紀行1995)。

(3) 教材スライド

今回収集した写真・スライド等を一括してデジタル化し提示用資料とした。以下に、その撮影主題を掲載する。桜町遺跡調査風景/桜町遺跡土層/出土部材/復原高床建物/復原建物CG組図/桜町遺跡出土磨製石斧と柄複製品/同柱根/同出土組み手模式図/矢瀬遺跡柱根/同親水公園/クリ灰汁/チカモリ遺跡復元図/小矢部市復原実験打ち割り製材/同建て方/同 納 穴/青田遺跡草



写真13

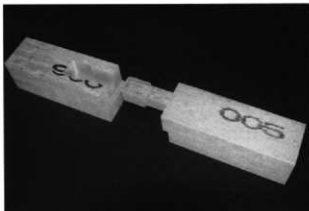


写真14



写真15

壁/長野原一本松遠隔立柱跡/横壁中村遺跡ウッド
サークル/プレカット仕口/同継ぎ手/新潟県立歴史博
物館模型/穴掘り建柱車/鉄錆の橋/最終処理場/10分
の1構造模型/同各部位/太田市立東中学校授業風景/
他

6 教材の活用

(1) 指導計画の作成

筆者のうち関は、かつて中学校技術・家庭科の授業実

践において「設計要素」を取り上げ「木製品の設計と製作」を通して構想力の育成を目指す授業実践に取り組んだ(関1994)。これは、生徒各自が作品の構想を行う時に、設計要素として自分の作品に対する自分なりのディテールを考慮しながら構想をまとめるための構想力育成を目指す授業実践の取り組みであった。新指導要領の中でも、この方向性は強調されていることであり、指導計画としては今回これを流用することとする。本稿の教材化への取り組みの中では、製作品をまとめる際の、仕組みや原理を考えるものづくりの原点を知る教材の一つとして、縄文人の技術を取り上げるものでもある。

(2) 指導計画(総授業時数35時間予定)

項目(単元名)	授業時数	検討利用例
1 木材と技術	3	①③④⑤
2 導入題材の製作	7	
3 主題材の製作	24	③④
4 まとめ	1	①②

(3) 資料読本の利用

検討例を利用項目に関連させ、指導用資料「縄文人の建築技術」の利用ページとその活用例を思案し、指導計画表に記した。

ア 教材研究用の参考資料

・利用例①

地域教材として月夜野矢瀬親水公園(0278-20-2123)や群馬県埋蔵文化財調査センターの発掘情報館(0279-52-2513)などを知り、見学利用するヒントとしての資料とする。



図4 指導用資料 p.4~5 抜粋

エ 生徒用配付資料としての利用

・利用例⑤

図2の桜町遺跡高床建物「建て方図」と合わせて、社会科歴史分野の学習で学んだ内容をふりかえれるようなプリントを準備する際に活用するために、歴史教科書や参考書籍を参考に作成した。

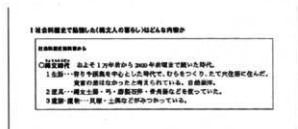


図8 指導用資料 p.2抜粋

7 授業実践

(1) 指導計画(1木材と技術:総授業時数3時間予定)

指導計画	時間
縄文時代の暮らしと高床建物	1(本時)
設計・製作と設計要素の分析	2

③ 展開

学習段階(分)	学習活動	教師の支援	準備
・社会科歴史学習で学んだ縄文時代の暮らしを振り返る(5) ・桜町遺跡について知る(10)	・プリントをまとめ、歴史の時間に学んだ縄文時代の人々の暮らしを思い返す。 ・土砂崩れに埋まりその後も水漬けになっていたことから今まで不明だった縄文人の技術が解明されたことを知る。	・歴史の教科書で扱った内容を取り上げ、プリントの穴埋め形式問題を準備する。 ・写真を提示し、遺跡の紹介を簡単にし、高床建物の復元について紹介する。	・プリント ・プロジェクター
・模型の組立に取り組む(15)	・番号を確認しながら模型を組み立てる。	・適宜アドバイスを行うが、プリントの図をもとに生徒間で完成させる。	・プリント ・模型
・部材の解説を聞く(13)	・縄文人が使っていた建築部材の組み手についての名称や形状を知る。	・模型を分解しながら部材の組み手「波型仕口・相欠き継ぎ手・通し杭」について触れ、模型の建築部位については参考にプリントに付記する程度とし深入りしないようにする。	・プリント
・現代技術「プレカット」を知る(7)	・加工風景の動画と仕口部材の实物を見て、現代住宅建築の在来工法の部材加工方法について知り、縄文人の技術が受け継がれていることを知る。	・磨製石斧を使った部材加工→大工が刻んできた組み手→FAによる「プレカット」の加工と、時代が変わっても、接合技術を生みだし、木材を使いこなす工夫してきた技術は、縄文時代から受け継がれていること気づかせる。	・動画 ・部材模型

④ 授業を終えて

1年生の木材加工学習の導入として、本授業を行った。導入であるので、生徒には木材加工に関する基礎知識は

(2) 指導方針

- ・社会科歴史的分野で学習した内容を確認させ、その中から縄文人の技術を抽出させる。
- ・復元高床建物の模型を組み立てさせ、その構造と組み手の技法を知らせる。
- ・縄文人の現代社会に通じる技術を理解させ、歴史学習の枠を越えて、我々の暮らしの中で生きている知恵や技術に気づかせる。
- ・構想力や「設計要素」の中の、木材の接合を考える際の導入学習の一部とする。
- ・縄文人の技術から資源の有効利用や環境の問題について今後の技術の役割についても気づかせる。

(3) 指導案(本時)

① ねらい

- ・縄文高床建物の復元模型の組み立てを通して、構造や木材の接合について考える契機とし、主な継ぎ手や仕口を知らせる。
- ・縄文人の木材加工技術が今日まで受け継がれてきたことを知り、それらはかつて伝統技術として伝えられ、今日工場でのスピードと精密さを備えた加工技術につながっていることを知らせる。
- ・生徒が取り組む、木製品の構想学習の一部導入となるよう構造や接合についての関連づけを行う。

② 事前の準備

- ・組立式構造模型 ・プレカット部材模型 ・プリント

あまりない。そのため、木材の接合技術を紹介してみても、使われる言葉が身近でないため、生徒は理解に苦しんでいたようである。

習に位置づけた本授業に対し、模型の活用はより高いレベルで生徒の学習への興味づけに効果を発揮したと判断される。

いわゆる「本物」の実体験を教育の出発点とすることが大切であり、このことにより問題の本質や課題を深く理解することができると同時に、知識や技能、思考力などを真に身に付いたものとして習得させることが可能になるといわれる(群馬県教育研究所連盟1993)。この観点から、先人の残していった埋蔵文化財が学習教材や教材として活用されることは、考古学がモノを扱う学問であるのと同様に学校教育でもモノを用いた普及・活用の方向性として視点をそそぐべきであると考えられる。

技術史を授業に取り入れる目標としては、「技術史を取り入れることにより、子どもたちが原理・原則的な面を発見しやすく、かつ、授業展開が容易になる。(足立1979)」ことが挙げられており、「①導入として、子どもの中にある知識を引き出す場合、②まとめとして、子どもたちの知識を豊かにする、③常に取入れながら、子どもの興味を持続させるため、④別に技術史の枠を設けて、近代科学技術との空間をうめより発展的に取り組めるようにするため(足立1979)」などが授業展開の方法として提唱されている。高床建物の構造模型は、実践授業の結果、教材として取り上げ方によってこれらの中の多くの要素を満たす可能性をもっていると考えられる。

(2) 今後の課題

新学習指導要領によれば、中学校技術・家庭科の技術分野における内容の取り扱いには、「技術の発達を、生活を充実・発展させてきた過程」を取り上げ、技術の役割を考えさせることが述べられている。材同士を継ぎ手と仕口により固定し構造物を築いてきた縄文人の技術は、今日まで受け継がれてきた技術を題材とするのにふさわしい内容だということが確認された。教科内での他の項目での活用も模索したい。

他に教科の枠を越え「最新の縄文観」として歴史教育で扱う考古学の教材とすることもできると考えられる。模型の製作を振り出しにおこなった本研究では、歴史学習でも縄文時代を伝える興味を集める教材として有効であろうし、技術・家庭科の教科に限らず、多くの教科で活用をはかり、教科の枠を越えた活用方法を模索していくことが本研究の課題となる。

9 おわりに

小矢部市に復原された高床建物を実見し得られた感動を機に模型の製作を思い立った。考古資料をもとに、現代の技術との対比に立ち現代の技術を見つめ直すヒントとして、①複雑で難解な「木材の接合技術そのもの」を扱う、②歴史学習の中で縄文観を伸張させる、③群馬県内での類似遺跡資料を調べるなどを主眼として取り組ん

だつもりである。しかしながら、その意図を十分に達し得たとは考えられないものの、本取り組みが埋蔵文化財の学校教育における活用の一環になれば幸甚である。

本稿をまとめるにあたり、小矢部市教育委員会の伊藤隆三氏と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の能登健氏には板町遺跡に関する情報と教材開発のヒントをいただいた。また、上野幸夫(富山国際職藝学院)、小野京一(平方木材株式会社)、加藤幸一(群馬大学)、篠原智彦(吾妻教育事務所)、平方富士男(株式会社平方木材販売)、三浦基弘(産業教育連盟)、宮本長二郎(東北芸術工科大学)、村田敬一(前橋工業高校)、渡邊晶(財団法人竹中大工道具館)、藤巻幸男・石守晃・桜岡正信・石田真(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)の各氏をはじめ多くの方々のご協力とご教示をいただいた。末筆ながら感謝申し上げる次第である。

本研究は、平成12年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究活動指定研究の成果の一部である。

註

- 1) 出土部材など裏付けのあるものを「復原」、発掘やものがない場合は「復元」を使う(上野2000)。
- 2) 1988年におが国で初めて縄文時代の建築部材が出土した板町遺跡は、富山県の最西部に位置する。遺跡では地下水位が高く、土砂崩れに埋まりその後も水浸けになっていたことが多くの建築部材の発見につながった。4000年前の縄文時代の遺跡で組み手の地刺した建築部材が出土したことは、これまで鉄器が出現する弥生時代までと考えられていた高床建物が縄文時代に存在したことを裏付けることになった。その後、1999年7月に舟岡地区第2調査区から出土した縄文時代晩期と考えられる瓦葺の屋根材については、新聞報道「板町遺跡発掘発見情報第9報」によれば「出土した屋根材は古墳時代前期のものである」と訂正された。24種類の木材が使用されオニグルミの樹皮が用いられていたもので、共存する縄文晩期の土器をもつその年代が推定されていたが、年代測定により1700年前という年代が出た。以前に他地点で見つかっている構造部材等については、一緒に出土したクリの木の年代測定から縄文時代中期の年代が示されており、この点についてはあきわらない。
- 3) 平成13年10月21日テレビ放映、NHKスペシャル「日本人はかなた旅③」の東京都立大・山田教授の例では、機弁の柄にはエスリハを使用し、仏彫師の直徑10cmで切り倒すのに5分、30cmで30～40分であったという。
- 4) 当初、強固に柱材にクリを用いて8分の1縮尺で片面茅葺きの模型を製作した。本稿ではその製作過程については略す。入手した材を水漬けにした灰汁抜き作業では数日で水が茶褐色に変化した。「クリの灰汁」については、指導用資料の中に取り上げた。
- 5) 他にも本の復元柱の構造部材として3本の柱を繋ぎ結ぶ補助材も作製した。補助材は、板町遺跡高床建物「建て方図」には盛り込まれていないが、施工にあたった工務店の勧めで復原建物に採用されているものである。
- 6) 市販ソフト Ulead Video Studio 4.0 SE Basic を用いた。
- 7) 自分達で組み立ててみてすぐこう難しかった。今は(模型は)設計図や番号がついているけど、昔はなかったのですぐむずかしくなっただろうなと思いました。みんな協力して楽しくできたのでよかったです。また、こういうのをやりたいと思いました。(ま)
- 8) 縄文時代の人たちは(つくるのに)どのくらい苦労したのかと思うとすごいと思った。縄文人はたいした技術力をもっていたとは思っていませんでしたが、考えが変わった。(り)
- 9) 縄文時代にこんな高床建物があるなんてすごいと思った。組立は楽し

- かった。(1)
- ・縄文時代にあったとは思えないほどの精密な木の組み合わせにビックリした。小さい模型だから数人組み立てられるけれど、この模型の10倍の大きさとなると、すごく建てるのが大変だと思った。機械のない時代なのにいまの技術に近いのをやっているのはおどろきでした。(1)
 - ・わたしのもったのは、いちばん上の部品でけっこう大事そうなかんじで目立っていました。すごくおもしろく、たててみるとうまく大きくてやりがいがあつた。でも、すごくおもしろい……。 (h)
 - ・組み立てる前は、そんなにすぐくはないと思っただけけど、組み立てていくうちにもしろくなってきて、完成したときにはすごいと思いました。ちゃんと床や屋根の部分もあって感動しました。(1)
 - ・いろいろ組み合わせておもしろかったです。できあがり、本当にあの様からできたとは思えないなあと思いました。みんな楽しく組み立てていました。(1)
 - ・昔にも鎌倉手や接合方法などの技術があったというはおどろきました。現在の家も縄文時代の人たちから伝わってきたとしたらとてもすごいとおもいます。それに昔は、今のようあまり材料などがとどっていないのにそんなことをかんがえていてかんしんします。(Y)
 - ・思ったより早くできた。こんな複雑な物を考え、作り出したなんて(縄文人)すごい。組立の時は、ある程度まいった人たちがやっていたから、周りで見ていただけの人たちはちょっとつらまらなかつた。完成したときには、すごく感動した。10分の1の大きさだから本当はもっと大きくて、もっと広いだろうな。(1)
 - ・組み立てて楽しかった。縄文時代に高床建物を建てるほどの技術がよくあつたと改めて感じました。縄文時代の人たちはどこでこのような材料をあつめてつくったのかと思いました。縄文時代のころからの技術が今の建築まで役に立っているのだと思いました。(1)
 - ・こんないい家があつたなんて、縄文時代の人たちはこんなに頭脳が発達していたのかと、ビックリした。10分の1の大きさなのにすごいものがあつてよかった。作るのにはまじまじかかっていたいへんだったでしょうがおもしろかつたです。(Y)
 - ・高床建物を作る技術があつたのがおどろきだった。学校で勉強している私たちがより頭がいいのか……。一つの部材加工するのにすごく時間がかかると思うのに、たぐさの加工をしなくてはならないのがおどろきだと思つた。おもしろかつた。(k)
 - ・実際に組み立てるといへんだった。今から4000年前にこんな技術力があつて、よくこんなものを作れたなあとおもつた。これはすごい発見だと思いました。これからもこんな発見がいっぱいあつて昔のことが細かくとらえて知ることができるといいなあと思いました。(w)
 - ・縄文時代の人とおそろい。今のと同じような技術を縄文人はもっていたなんて。(8)
 - ・縄文時代にこんなすごい技術があつたなんてすごおどろいた。それとこれは10分の1の模型だから本物はすごく大きく感じるだろうと思った。(u)
 - ・はじめは組み立てた。まだ縄文時代なのにこんなすごいものをつくっていたなんてすごいと思いました。組み立ててもいい組み立てられておもしろかつたです。縄文時代の建築と今の建築がにているので、(技術は) すごくすすんでいたんだと思いました。(Y)
 - ・こんなに小さいのに組み立てるのは大変だった。この10倍の大きさのものも(機械を使わずに) 手作りできるなんて縄文時代の人たちは大変だったと思った。僕も後で小さいのをわらばしてつくってみよう。(h)
 - ・縄文時代に仕口や継ぎ手があつたなんてすごいと思う。考えた人はすごいと思った。(8)
 - ・仕組みがすごく分かりやすくて、しっかりしていた。この技術が今でも使われているから今の家があるのだと思った。縄文時代の人はずいぶん頭がいいのだと思った。(k)
 - ・はじめは、どんなのができるのかなと思つたけれど、組み立てていくうちにこんなことができるなんてすごいと思った。いせきだけで、こんなに細かく分かっていくなんてすごい！(Y)
 - ・すごいとおもつた。だって、せつせきも使わないで、家をつくるなんて、頭がいいと思つた。もつちの材料をつくるのもすごいと思つた。(u)

した。(u)

- ・4000年前にこんなにも高度な建築技術があつたなんておどろいた。それは縄文時代の人々が今と同じような方法で家をつくらせてくれたんではないとおもつた。(Y)

参考文献・資料

- 足立正 1979 「技術史を生かす授業と教材」『技術教室』№324。
 晩教育図書編集部 1998 「新歴史資料」平成10年度版 晩教育図書株式会社。
 伊藤隆三 2000 「富山県小矢部市・板町遺跡」『木の建築』第50号 木材建築研究フォーラム。
 伊藤隆三 2001 「縄文時代の建築技術をめぐって」『縄文文化の脈を世界に開く』国立歴史民俗博物館。
 上野平夫 2000 「縄文の技に挑む・実験考古学」『木の建築』第50号 木材建築研究フォーラム。
 小矢部市教育委員会編 1998 「板町遺跡 およべ展」小矢部市。
 小矢部市編 1999 「NEWS-WIDE 富山県小矢部市板町遺跡」小矢部教育委員会。
 東京書籍編 2001 「新しい技術・家庭科 技術分野」。
 金谷紀行 1995 「削って、彫ってハイ組み立て」『木の100不思議』東京書籍。
 群馬県教育研究所選定 1993 「実証的研究のすすめ方」。
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 「遺跡は今」4号。
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 「遺跡は今」6号。
 財団法人竹中大工道具館 2001 「竹中大工道具館だより」№6。
 財団法人竹中大工道具館 2001 「木をうがつ 穴をあける道具の歴史」(企画展解説)。
 関俊博 1994 「構想力の育成を目指した木製品の設計と製作」『研究報告書 第150号(産業科学講座) 群馬県立研究センター』。
 関俊博 2002 「発掘調査による技術の秘密」『技術教室』№595 農山漁村文化協会。
 鳥嶋義之助 1992 「図解木工の継手と仕口」理工学社。
 文化庁編 2001 「発掘された日本列島 2001新発見考古情報」朝日新聞社。
 文部省 1998 「中学校学習指導要領」大蔵省印刷局。
 文部省 1999 「中学校学習指導要領 解説 一技術・家庭編」東京書籍株式会社。

ノースウェスタン大学人類学部の考古学野外実習

槽 崎 修一郎

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 はじめに | 5 アメリカ中西部の編年 |
| 2 アメリカ考古学センター | 6 エリザベス・マウンド群 |
| 3 コースについて | 7 現地見学 |
| 4 骨学実習 | 8 その後のフィールド・スクール |

— 要 旨 —

アメリカの人類学は、考古学・自然人類学・文化人類学・言語人類学の4つの分野を含む。アメリカの大学には、369の人類学部があるが、夏期には、夏期考古学野外実習を開講している。ここでは、筆者が1985年に受講した、第18回ノースウェスタン大学考古学野外実習の様子を紹介する。ノースウェスタン大学は、イリノイ州シカゴ郊外のエヴァンストンに位置するが、野外実習はイリノイ州の南にあるキャンパスヴィルにあるアメリカ考古学センターで実施された。センターは、人口400人の村の39の建物を買取り、様々な分野の研究室に変貌させた。コースは、大学生のみならず小中高生や成人用にもプログラムが組まれており、1985年時点ですでに約15,000人以上が参加している。このプログラムは、1960年代にアメリカで有名になったコスター遺跡と共に拡張されており、その中心的人物は、ニュー・アーケオロジーの先駆者であるステュアート・ストリューヴァー博士である。その後、このコースは生物考古学を専攻するジェーン・バクストラ博士が中心となって開催されている。1985年のコースでは、中期ウッドランド期のエリザベス・マウンドの発掘調査を通して実習が行われた。この調査では、人骨9体・土器5個・イヌの骨等が発見された。また、夜には、バクストラ博士による優れた骨学実習も開講され、それまで人骨を見たことも触ったことも無かった学生が、数週間後には人骨の同定ができるようになる様子も紹介する。合わせて、現地見学が行われた中でも、イリノイ州を代表するイリノイ州立博物館・ディクソンマウンド博物館・カホキアマウンドを紹介する。その後のフィールド・スクールは、バクストラ教授の移籍に伴い、ノースウェスタン大学からシカゴ大学へ、そして現在はニュー・メキシコ大学へと変更されている。但し、フィールド・スクールは一貫してアメリカ考古学センターで行われており、2002年には第35回フィールド・スクールが開催される予定である。

キーワード

- 対象時代 アーケイック期～ミシシッピ期
対象地域 北米（中西部：イリノイ州）
研究対象 考古学野外実習

1. はじめに

古い話で恐縮だが、1984年からアメリカのオレゴン大学 [University of Oregon] 人類学部に留学していた筆者は、1985年の夏にイリノイ州のキャンパスヴィルでノースウェスタン大学人類学主催のサマー・フィールド・スクール (夏期考古学野外実習) に参加する機会を得た。このフィールド・スクールとは、人類学の場合、主に発掘を教える実習であり、これが異なる学部の場合、海洋生物学・地質学・古生物学・植物学等、フィールドで実地を教える実習の意味である。フィールド・スクールでは無いが、筆者は同様な夏期実習を、1986年の夏にアメリカの首都ワシントンにあるジョージタウン大学医歯学部にて人体解剖学実習を受講したことがある (橋崎、1988)。

アメリカの大学では、セメスター (2学期制) [Semester]・トリメスター (3学期制) [Trimester]・クォーター (4学期制) [Quarter] という3つの制度に学期が別れている (橋崎、1993)。通常、6月から8月の夏学期は日本の夏休みにあたる期間だが、多くの大学では夏期も開講している。アメリカの大学は、単位制度が整備されており、他大学に籍を置いても大学間で単位の互換がきくため、他流試合ができるというメリットがある。

アメリカにおける人類学は、日本とは異なり、考古学・自然人類学・文化人類学・言語人類学の4つの分野を含めた総称である。従って、人類学部にはこの4つの分野の専門家が一緒に同居しているし、学生も同様にこれらを学ぶシステムになっている。一方、日本で人類学と言うと、一般的には自然人類学のみを表す。なお、アメリカの大学の人類学が主催する発掘調査に学生が参加するためには、このフィールド・スクールの単位を取得することが必須条件となっている。つまり、将来、人類学者や考古学者を目指す学生は必ず通過しなければならない関門ということになる。

ちなみに、アメリカには全体で470の人類研究部があり、そのうち369が大学に、66が博物館に、26が研究所に、そして9が政府に属しているというように、我が国とは比べようがないほど数多く存在している (橋崎、1987)。その369の大学の人類学部のほとんどが、夏期考古学野外実習のコースを開講している。その中でも、当時、全米一という評判であったのが、ノースウェスタン大学の夏期考古学野外実習であった。

ノースウェスタン大学 [Northwestern University] は、イリノイ州シカゴ郊外の北部にあるエヴァンストンに1851年に創立されている私立の名門校で、日本でも有名なシカゴ大学よりも創立が古く、学生達はアメリカ中西部のハーヴァード大学と呼んでいる。フィールド・スクールは、イリノイ州の南にあり、イリノイ州のシカゴから車で約6時間、ミズーリ州のセント・ルイスの北約

100kmの位置にあるキャンパスヴィルという人口400人という小さな村にあるアメリカ考古学センターで行われた。ちなみに、筆者は、西海岸のオレゴン州ユージーンより自分の車でここまで移動した。



図1. イリノイ州の位置



図2. イリノイ州の主な遺跡と博物館

2. アメリカ考古学センター

[Center for American Archeology]

アメリカ考古学センターは、イリノイ川に面したイリノイ渓谷にあり、1968年に発見され1970年代に全米の注目を集めたコスター遺跡と共に拡張されてきた。このコスター遺跡は、ノースウェスタン大学教授のステュアート・ストリューヴァー博士 [Stuart STRUEVER] の指導の元に発掘され、1980年の調査終了までに約1万年前のアーケイック初期から紀元前1000年前まで26の文化層が発見され、遺跡は7m以上掘り下げられた (Struever & Holton, 1979)。ストリューヴァー博士は、フローテーションと呼ばれる、遺跡からの植物遺体を水洗いにより集める方法を導入した考古学者で、1960年代、民族考古学の提唱者のルイス・ビンフォード博士や現オレゴン大学人類学部名誉教授のメルヴィン・エイキンズ博士達と共に、ニュー・アーケオロジー (New Archeology) [新しい考古学] の先駆者として有名になった。ちなみに、こ



写真1. 学生が川でフローテーションを行っているところ

のニュー・アーケオロジーの先駆者達は、主に、シカゴ大学人類学部の教員や卒業生達であった。この、ニュー・アーケオロジーは、1950年代のアメリカが当時の旧ロシアから受けたスパートニク・ショックに伴い、科学を国策として奨励したことに端を発する。そして、その科学を1960年代に考古学に積極的に応用したことでアメリカの考古学は大きな変革を遂げたと言われる。センターは、村の39の建物を買い取り、石器・土器・植物・地質・自然人類学・コンピューター研究室等を設置した。例えば、旧内屋の建物は売店と博物館、旧銀行は自然人類学研究室というようになっている。このキャンパスビルから車で1時間以内の同心円部には約2,500の遺跡が存在するので、当分の間、発掘を続けることができるそうである。センターでは、毎年夏、大学生のみならず小中高生や成人用にプログラムを組んでいて、1985年時点で15,000人以上の人々が参加している。現在、活躍している考古学者や人類学者の中には、学生時代にこのプログラムに参加して以来、人類学者を目指した人も少なくないといわれているし、実際に、このプログラムを修了した後、現在、アメリカで人類学者として活躍している人々も多い。



写真2. 旧内屋を改造した博物館

3. コースについて

ノースウェスタン大学のフィールド・スクールには、中学生・高校生・大学生が参加できるコースが用意されている。大学生用のフィールド・スクールには、5週間コースと9週間コースの2つがあり、筆者が参加した1985年時点の第18回ノースウェスタン大学考古学フィールド・スクールでは、前者が6月9日から7月13日まで、後者が6月9日から8月10日までとなっていた。ほとんどの学生は、9週間コースに参加しており、筆者も9週間コースに登録し参加した。学生は、ノースウェスタン大学を始め、コロンビア大学・シカゴ大学・イリノイ大学・インディアナ大学・ハワイ大学等から14名が参加し、これに対し講師陣は22名その内9名が常時学生と一緒に発掘するという内容の濃いものであった。

毎日の日課は、朝5:30起床・6:00から朝食・6:30に宿舎をスクールバスで出発・7:30から15:30まで発掘実習・17:00から夕食・18:00から講義とかなりのハード・スケジュールであった。また、大学生コースに登録した学生は、自分でテーマを決めて独自の研究を期間内に行わなければならない、発掘が休みの土日にも研究室にこもって研究を行った。ちなみに、筆者は人骨の古病理学をテーマとして研究を行った。



写真3. 骨学実習を講義中のバイクストラ博士

これらのコースを統括するのは、当時、ノースウェスタン大学人類学部教授のジェーン・バイクストラ [Jane E. BUIKSTRA] 博士である。バイクストラ博士は、1945年にインディアナ州のエヴァンスヴィルに生まれ、デューパー大学にて人類学専攻で修士号取得後、シカゴ大学大学院にて人類学専攻で修士号及び博士号を取得している。ノースウェスタン大学では、博士号取得前の1970年から教鞭を取っており、1972年に助教授に昇進している。バイクストラ教授は、自らの専門を生物考古学 [Bioarchaeology] と呼び、長年、イリノイ州中西部で人骨を発掘しており、主に古病理学を研究している (Buikstra, 1976・1981)。教授が筆者に語ったところによると、それは主に医師である父親に影響されたという。また、自分

で人骨の発掘を始めたのは考古学者により発掘された人骨が不十分な状態で発掘されているため、精密な研究をするには自分で始めるしかないと思いついたためだそうである。これは、筆者もオレゴン州人類博物館で出土人骨の整理をしている時に経験したことがあるが、1960年代以前に考古学者によって発掘された人骨は主に頭骨だけであり、四肢骨は多くの場合放棄されたか一部分しか保存されておらず、幼児人骨はほとんどの場合骨片しか残されていない。教授は、1960年代後半より慎重な発掘を続け、すでに数百体にのぼる全身骨格の揃った人骨を収集している。その中には、約100体ほどのやはり全身骨格の揃った幼児人骨も含まれている。この成果が認められてか、1985年には弱冠40歳にしてアメリカ自然人類学会会長に選出され1987年までその重責を果たした。女性の会長は、1930年の学会創立以来、前ワシントン大学解剖学教室名誉教授のトロッター博士 (M. Trotter: 1956年—1958年に第14代会長) と前コロラド大学人類学部のブルーズ博士 (A.M. Brues: 1972年—1974年に第22代会長) に次いで3番目である。

4. 骨学実習

骨学実習は、毎週、月曜日・水曜日・木曜日の夜、18:00—20:00に2時間ずつ行われた。骨学の試験は毎週行われたが、学生には親指の先ぐらいの人骨片が与えられ、30秒以内に、人骨か獣骨か・人骨であればその骨の名称・左右・特徴を当てさせるといったものであった。これは、英語を母国語としない筆者にはきつこともあったが、何とかパスした。しかし、数年前までは、袋の中に入れた骨を手で触るだけで人骨の名前を当てさせたそうであるから、現在はまだ簡単になった方であろう。ちなみに、筆者は日本ですでに人骨を扱う経験があったが、参加した学生の中には人骨を見るのも触るのも初めてという者もいた。しかし、数週間経ってコースが修了する頃には、その学生達もかなり人骨を同定する実力がついており、アメリカの優れた教育システムには驚嘆した。



写真4. 古病理学講義に使用された人骨1



写真5. 古病理学講義に使用された人骨2

5. アメリカ中西部の編年

アメリカ中西部の編年は、研究者により意見が異なるが、アーケイック期・ウッドランド期・ミシシッピ期の3期に大きく分けられる。

(1) アーケイック期 [8,000 B.C.—200 B.C.]

アーケイック期は、前期 (8,000 B.C.—6,000 B.C.)・中期 (6,000 B.C.—3,000 B.C.)・後期 (3,000 B.C.—200 B.C.) に大まかに分けられる。

このアーケイック期の内、前期までは大型動物の狩猟を行っていた。その後、大型動物の絶滅に伴い、その他のシカやアライグマ・リス等の小型動物及び水鳥を狩猟したり、魚や貝、堅果類・種子類・果実類を採集した。また、中期及び後期アーケイック期にはヒマワリ・アマランス・アカザ等の栽培を始めている。2,000 B.C.頃には、容器や食物の用途のために、ヒョウタンやカボチャの栽培も開始した。同じ頃、土器が出現する。



写真6. アーケイック期のジオラマ [イリノイ州立博物館]

(2) ウッドランド期 [200 B.C.—A.D. 1,000]

ウッドランド期は、前期・中期・後期に分けられる。この時期には、土器が普及し、埋葬用のマウンドが数多く築かれる。この内、100 B.C.—A.D. 300は、イリノイ州とオハイオ州には、ホープウェル文化が存在した。農業はまだ本格的には開始されておらず、サンブウィー



写真7. ウッドランド期のジオラマ [イリノイ州立博物館]

ド・アカザ・ヒッコリー等の採集が中心であった。

(3) ミシシッピ期 [A.D. 1,000—A.D.1,200]

ミシシッピ期には、農業が発達し、トウモロコシやマメが栽培される。また、巨大なマウンド群が築かれるが、ウッドランド期と異なるのは埋葬用のみではなく、神殿も築かれることである。この代表的なマウンドが、後で紹介するカホキア・マウンドである。



写真8. ミシシッピ期のジオラマ [イリノイ州立博物館]

6. エリザベス・マウンド群

エリザベス・マウンド群は、イリノイ川を望む小高い丘に位置し、その数は13からなる。マウンド群は、中期アーケティック期 (約6,000 B.C.) と中期ウッドランド期 (約150 B.C.~A.D. 400) の2期からなる。これ以外に、マウンドではない墓地も発見されている。

1985年のコースは、エリザベス・マウンド第7号を発掘調査した。この第7号は、エリザベス・マウンド群でも最大のものであり、1984年の発掘では、11の埋葬遺構から15体の人骨・28の土器・獣骨等が発見されている。1985年の発掘では、掘り残されている約4割を完掘し、中期ウッドランド期に属するこのマウンドの性格を解明することになった。

結局、1985年の発掘では、9体の人骨・5個の土器・獣骨・装飾品等が発見された。人骨の保存状態は驚くほ



写真9. エリザベス・マウンド第7号の遠景



写真10. エリザベス・マウンド第7号の発掘風景

ど良く、アルカリ性の黄土による保存度は、酸性土壌の日本の保存度とはかなり異なることを思い知らされた。面白い発見としては、真珠の首輪を伴ったイヌの骨があった。考古学センターの民族考古学者のホワイト博士によると、アメリカ・インディアンの民族例に身分の高い者が死ぬと白い毛のイヌと一緒に埋葬したという。また、そのイヌを殺す際には刃物を使用してはならず、必ず窒息死させたという。ホワイト博士の祖母には、アメリカ・インディアンの血筋が入っており、子供の頃にそ



写真11. 21号埋葬遺構の発掘風景



写真12, 21号埋葬遺構人骨出土状態



写真13, 22号埋葬遺構で出土した犬骨

の祖母から多くの民族事例を聞いたという。

7. 現地見学

発掘が休みの土日には、遺跡や博物館等の現地見学が行われることもあった。中でも、イリノイ州立博物館・ディクソンマウンド博物館・カホキア遺跡を紹介する。

(1) イリノイ州立博物館 [Illinois State Museum]

イリノイ州のスプリングフィールドに位置する。人類学・動物学・地質学・植物学等の研究部門と常設展示を持つ、イリノイ州を代表する博物館である。入館料は無料である。この博物館には、前出のバクストラ教授監修による、アメリカ・インディアンの等身大ジオラマが4つある。それらは、「アーケイック期」・「ウッドランド期」・「ミシシッピ期」・「歴史時代」のもので、当時、アメリカでも話題になった素晴らしい出来である。余談だが、この展示を見た筆者はいずれこのような等身大ジオラマを製作することを夢見たのだが、この夢は1996年10月に閉館した群馬県立自然史博物館の常設展示で「直立二足歩行」・「火の使用」・「埋葬」という人類進化のジオラマ3つを担当者として製作することで達成できた(横崎, 1997ab・1999・2000)。



写真14, 歴史時代のジオラマ [イリノイ州立博物館]

(2) ディクソン・マウンド博物館 [Dickson Mounds Museum]

ディクソン・マウンド博物館は、イリノイ州のルイスタウンにある。1927年にドン・ディクソンとその父親トーマス・ディクソン等が農場で人骨や遺物を発見したことから発掘が開始され、発掘区に建物を作り、234体のアメリカ・インディアンの人骨を発見時のまま展示していた。当時は、アメリカ中から来館者が訪れ、その数は年間約4万人にも達したという。しかし、1940年頃には、年間約8,000人と往時の1/5にまで来館者数が落ち込んだ。そこで、経済的に困窮したディクソン親子は、1945年にこの施設をイリノイ州に売却し、親子はそのままイリノイ州に雇い入れられた。その後、1965年にはイリノイ州立博物館の分館として新しく開館した。博物館の名前は、ディクソン親子の偉業をたたえて、ディクソン・マウンド博物館となった。また、1972年には現在の建物が完成し、人骨を半永久的に保存しながら展示を行った。

しかし、1990年から1991年にかけて、アメリカ・インディアンによる人骨返還運動がアメリカ各地で盛んになり、1991年11月にはそのオープン展示を閉鎖することが決定された。その後、1992年4月3日に一般来館者への



写真15, かつてのディクソン・マウンド博物館の人骨展示 (現在は、この展示は非公開である)

公開は中止され、新しく展示をリニューアルするために1993年9月に閉館後、新しい展示は1994年9月より公開されている。このような人骨返還運動は、アメリカのみならず、オーストラリアのアボリジン・ニュージーランドのマオリ族・我が国のアイヌ等の例がある(檜崎、1989)。ちなみに、我が国においては同様の試みが山口県の土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムにて弥生時代人骨を発見時のまま展示しているが、土井ヶ浜では人骨のレプリカが表示されている。

この貴重なディクソン・マウンド出土人骨についての詳細な記載は、考古学及び基本情報はアラン・ハーンによりまとめられており(HARN, 1971)、出土人骨の古病理学はダン・モースによりまとめられている(MORSE, 1978)。それによると、出土人骨269個体の性別は、男性が78個体・女性が85個体・13歳以下の子供が75個体・胎児が31個体である。また、平均死亡年齢は、成人男性が42歳・成人女性が35.4歳である。13歳以上の子供を含めると、男性が29.7歳・女性が25.6歳となる。現代人と異なり、女性の死亡年齢が低いのは、出産に伴い若く死んだためと推定されている。平均身長は、男性で165.24cm・女性で155.08cmと推定されている。なお、このマウンドの年代は、主にミシシッピ期であり、A.D. 950年～1,200年の時代とA.D. 1,200年～1,400年の2期に分かれている。

(3) カホキア・マウンド [Cahokia Mound]

カホキア・マウンドは、イリノイ州ロズヴィルに位置し、ミズーリ州のセント・ルイスから東へ約13kmの位置にあるミシシッピ川とミズーリ川の合流点の氾濫原に位置する。ミシシッピ文化の遺跡中、最大の規模を持つマウンドである。時代は、A.D. 700年～A.D. 1,400年の約700年間続いている。最盛期はA.D. 1,100年～A.D. 1,200年の100年間と考えられている。マウンド群は、約120あるが、最大のものがモンクス・マウンドである。このモンクス・マウンドは、底辺が長さ330m・幅



写真16. カホキア・マウンド最大のモンクス・マウンド

216m・高さが33mもの規模を持ち、4段構造である。土台は、エジプトのピラミッドをもしのぐという。この土は、人工的に盛られたもので、その土量は61.5万m³と推定されている。頂上には、支配者である神官あるいは王が住んでいたと考えられている。

当時の人口は、トウモロコシ栽培の導入と共に、急激な人口増加があったと推定されている。この周辺の人口は、最盛期で25,500人と推定されている。なぜ、約700年続いた人口集中センターがその後、A.D. 1,400年に放棄されたかは未だに不明であるが、1,200年には気候変動があったことが確かめられており、その気候変動が引き金となって1,200頃から人口が減少し、1,400年に放棄されたのではないかとという説がある。

このカホキア・マウンドは、1982年に世界遺産に登録されている。

8. その後のフィールド・スクール

筆者が参加した第18回ノースウェスタン大学フィールド・スクールは、その年、つまり1985年で18年間の歴史を閉じた。これは、バイクストラ教授が1986年にノースウェスタン大学から母校のシカゴ大学に移籍したためである。その後、教授はシカゴ大学に1995年まで在籍し、1995年からはニュー・メキシコ大学人類学部教授に就任して活躍しており、最近ではホンジュラスの遺跡を発掘調査している。教授の移籍に伴い、フィールド・スクールも、ノースウェスタン大学からシカゴ大学へ、またシカゴ大学からニュー・メキシコ大学へと変遷した。だが、フィールド・スクール自体はアメリカ考古学センターで継続して行われており、2002年は第35回ニュー・メキシ



写真17. 1985年のフィールド・スクール参加者の集合写真(前列、中央が筆者)

コ大学人類学部主催のフィールド・スクールが行われる予定である。但し、期間は以前と異なり、5週間と9週間コースの選択性ではなく、全員が6/16～7/27の6週間コースに集約されたようである。

引用文献と参考文献

- ASCH, David 1976 "The Middle Woodland Population of the Lower Illinois Valley", Northwestern University
- BUIKSTRA, Jane 1976 "Hopewell in the Lower Illinois Valley", Northwestern University
- BUIKSTRA, Jane E. (ed.) 1981 "Prehistoric Tuberculosis in the Americas", Northwestern University
- フェーラム, C.W. (寺田和夫・加藤幸雄・松谷純子訳) 1974 『最初のアメリカー人』, 新編社
- フェイガン, ブライアン・M. (河合信和訳) 1990 『アメリカの起源』, どうぶつ社
- HARN, Alan D. 1980 "The Prehistory of Dickson Mounds: The Dickson Excavation", Illinois State Museum, No.35
- 河合信和 1982 「遺跡の宝庫は蒸気船時代の村」『科学朝日』, 42(4): 130-133
- MORSE, Dan 1978 "Ancient Disease in the Midwest", Illinois State Museum, No.15
- 横崎修一郎 1987 「第55回アメリカ自然人類学会に参加して」『人類学雑誌』, 95(3): 405-406.
- 横崎修一郎 1988 「米国の夏期集中解剖実習に参加して」『人類学雑誌』, 96(4): 477-479.
- 横崎修一郎 1989 「アメリカ・インディアン出土人骨の再埋葬問題について」『人類学雑誌』, 97(1): 147-148.
- 横崎修一郎 1993 「米英仏の大学と大学院」『太平洋学会誌』, (59-60): 39-60.
- 横崎修一郎 1997a 「D, 自然界におけるヒト」『群馬県立自然史博物館ガイドブック』, 群馬県立自然史博物館 p.107-118.
- 横崎修一郎 1997b 「自然界におけるヒトのジオラマと絵」『Demeter (デメテル) 群馬県立自然史博物館だより』, (4): 2-3.
- 横崎修一郎 1999 「知っていますか展示の舞台裏: Dコーナー」『Demeter (デメテル) 群馬県立自然史博物館だより』, (12): 2-3.
- 横崎修一郎 2000 「D, 自然界におけるヒト」『群馬県立自然史博物館総合案内』, 群馬県立自然史博物館 p.66-73.
- 大貫良夫 1995a 「カネキア」『世界の遺跡100』, 朝日新聞社
- 大貫良夫 1995b 「第2章: アメリカ大陸の文化」『モンゴロイドの地球 5. 最初のアメリカー人』(大貫良夫編), 朝日新聞社 p.39-116.
- 斎藤成也 1992 「第2章: アメリカ大陸への人類の移動と拡散」『アメリカ大陸の自然誌 2. 最初のアメリカー人』(赤澤 威・坂口 豊・富田幸光・山本紀夫編), 岩波書店 p.57-103.
- STRUEVER, Stuart & HOLTON, Felicia A. 1979 "KOSTER", Anchor Press

投 稿 規 定

- 1 執筆者：投稿できるのは、本事業団職員（嘱託員・補助員含む）及び年報・紀要委員会が認める者とする。
- 2 提出及び掲載の手続き：原稿は構想発表会など年報・紀要委員会が定める事前審査を経たものとし、期日までに年報・紀要委員会に提出する。尚、その採否及び掲載順序は年報・紀要委員会が決定する。
- 3 種 類：原稿は埋蔵文化財及び関連する諸分野を含む内容の論文・研究ノート・資料紹介とする。なお1号内で完結することを原則とし、いずれも他で既発表のものは対象外となる。
- 4 頁数及び投稿件数：1編あたりの分量は20頁以内、一人1件を原則とする。

執 筆 要 項

A 締 切

- 1 当該年度2月末日必着とする。

B 内 容

- 1 要旨・キーワードを付ける（日本考古学協会「日本考古学」参照）。
 - 1-1 要旨は44字×20行程度とする。
 - 1-2 キーワードは対象時代・対象地域・研究対象を10文字・3点以内で記入。
- 2 学術的内容を維持するため、提出後必要最低限の加筆を要請することがある（年報・紀要委員会の判断及び各専門職員のレフェリーによる）。
- 3 題名は簡潔なものが望ましい。また英文タイトルを付与する。
- 4 本文は日本語使用を原則とするが、外国文要約を付けることができる。

C 体裁・表現

- 1 本文体裁はA4版（原則的に「日本考古学」に準じる）。
 - 1-1 25字×48行横2段組、要旨等を含め全体を偶数頁に抑える。
 - 1-2 提出原稿：原則としてテキストファイル（WINDOWSもしくはMAC）に変換したフロッピー及び打ち出しとする。
- 2 文章表現は次のようにする。
 - 2-1 原則として現代仮名遣い・「である」体・常用漢字を使用する。
 - 2-2 外国関係固有名詞 カタカナ書きで（ ）内に原文表記とする。
 - 2-3 註は通し番号右肩付き 文末参考文献前に一括記載とする。
 - 2-4 本文中と註での参考文献は（小林1998）のように表記する。引用箇所が明確な場合は頁数も表記する。
 - 2-5 参考文献配列 著者名原文発音アルファベット順（日本語のみの場合は五十音順も可）記載方法は「日本考古学」例に準じる。

3 図・写真図版の体裁

- 3-1 版面：1頁大 縦232mm×横168mm 左右半頁 縦232mm×横80mm
 - 3-2 図はトレースを行った2倍図版、写真は等倍にプリントしたものを原則とする。また原則として折込・別刷りは認めない。
 - 3-3 図・写真はそれぞれ1頁1図版とし、台紙には必ず執筆者名を記す。
 - 3-4 印刷は原則として単色印刷とする。
- 4 その他
- 4-1 提出原稿には年報・紀要委員会が定めるレイアウト用紙を用いたレイアウトを添付する。

D そ の 他

- 1 上記以外は年報・紀要委員会が定める。
- 2 当事業団の職員自主研究活動指定研究の投稿は、優先して扱う。
- 3 掲載料の徴収や原稿料の支払いはなく、抜き刷り作成費用は個人負担とする。

執 筆 者 (平成14年4月1日現在)

津島秀章 (つしま・ひであき)	群馬県教育委員会主任
桜井美枝 (さくらい・みえ)	当事業団専門員
井上昌美 (いのうえ・まさみ)	東部農業総合事務所主任
齋藤英敏 (さいとう・ひでとし)	群馬県教育委員会主任
谷藤彦彦 (たにふじ・やすひこ)	当事業団主幹兼専門員
橋崎修一郎 (ならざき・しゅういちろう)	当事業団専門員
齋藤和之 (さいとう・かずゆき)	当事業団専門員
石坂 茂 (いしがき・しげる)	当事業団主幹兼専門員
深澤敦仁 (ふかさわ・あつひと)	当事業団主任調査研究員
中里正憲 (なかざと・まさのり)	佐波郡玉村町教育委員会主任
田中 雄 (たなか・ゆう)	吾妻郡高山村立高山小学校教諭
高井佳弘 (たかい・よしひろ)	当事業団専門員
関根慎二 (せきね・しんじ)	当事業団主幹兼専門員
今井和久 (いまい・かずひさ)	当事業団専門員
能登 健 (のの・たけし)	当事業団東毛事務所長
長沼孝則 (ながぬま・たかのり)	当事業団調査研究員
関 俊明 (せき・としあき)	当事業団主任調査研究員
山口邦弘 (やまぐち・くにひろ)	太田市立西中学校教諭

平成13年度年報・紀要委員 (平成13年4月1日現在)

石守晃 (資料整理課:委員長)・大島信夫 (総務課)・角田芳昭 (資料整理課)・小林大悟 (普及情報課)・本間昇 (調査研究第1課)・高柳浩造 (調査研究第2課)・須田正久 (調査研究第3課)・小保方香里 (調査研究第4課)・田村博 (東毛調査研究第1課)・小暮育秀 (東毛調査研究第2課)

平成14年度年報・紀要委員 (平成14年4月1日現在)

石守晃 (資料整理課:委員長)・植原恒夫 (総務課)・須田正久 (資料整理課)・深澤敦仁 (資料整理課)・小林大悟 (普及情報課)・平方篤行 (調査研究第1課)・吉田和夫 (調査研究第2課)・新井英樹 (調査研究第3課)・松原孝志 (八ツ場ダム調査研究課)・小林徹 (東毛調査研究第1課)・小暮育秀 (東毛調査研究第2課)



研究紀要 20

平成14年8月30日発行

編集・発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2

☎ (0279) 52-251100

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 朝日印刷工業株式会社

BULLETIN OF GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

01-350 / 6 / 20(2)



013500060002000 02

2002.8

20

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

CONTENTS

TSUSHIMA H., SAKURAI M. & INOUE M. : 1

A Basic Study of the Lithic Sources, Black Glassy Andesite in the Kosaka River Basin, Used for Palaeolithic Stone Artifacts

SAITO Hidetoshi : 11

The Remains of Paddy Fields Tell of the Change of Agricultural Technique in East Asia

TANIFUJI Yasuhiko: 27

The Restoration of Arable Land after the Mt. Asama's Eruption in 1783

NARASAKI Shuichiro: 43

Medieval Cremated Human Skeletons from Shimokotorigodo Site, Gunma

RESEARCH NOTES

SAITO Kazuyuki : 51

A Study of the System of a Qualification of Buried Properties

ISHIZAKA Shigeru : 71

Disappearance of the Circular Settlement and arrival of the Stone Circle at the end of the Middle Jomon Period

FUKASAWA A. & NAKAZATO M. : 103

A Study of how to specify the decade when "Koshiki-hajiki" excavated at Sunamachi-Site in Tamamura-machi, Gunma was used

TANAKA Yuu : 123

The Bibliography of the Historical Records for the Research of "Jori" Division in Gunma

REVIEWS

TAKAI Yoshihiro: 147

A Study of Special Cloth and Mold Used for the Cylindrical Mold Tile Manufacture Technique

TANIFUJI Y., SEKINE S. & IMAI K. : 157

A Compilation of Stone Accessories in the Jomon Period, Gunma

NARASAKI Shuichiro: 191

Surface Collection of Human Skeletons from Hijiridaki Site, Oita

A SPECIAL FEATURE : *Archaeology and Education*

NOTO T. & NAGANUMA T. : 205

The Reason Why Sir Ernest M Sataw Came to the Ancient Sepulchral Mounds in Koudzuke

SEKI T. & YAMAGUCHI K. : 233

The Production and the Utilization as Teaching Materials of a Cubic Model of the Ancient High Floor House

NARASAKI Shuichiro: 245

18th Northwestern University Summer Field School of Archeology

